

ISSN : 1881-5731
CODEN : KDKOBM

甲子園大学纪要

BULLETIN OF KOSHIEN UNIVERSITY

No. 40

2013年3月

甲子園大学

甲子園大学紀要 No.40 (2013)

目 次

『西東詩集』の「酌人の書」と「比喩の書」……………	上野 義久 ……	1
ファシリテーションを学ぶ場作りの試み……………	高橋 紀子 ……	11
年初来高値または安値をつけた後のRSI指標を用いた株式投資の評価 ……………	中井 孝・米澤 忠幸 ……	15
学生の自主的な学びをサポートするひとつの企画の試み - 「甲子園大学ノート大賞」 - ……………	西川真理子・増田 将伸・梶木 克則・上村 健二・前馬 優策 ……	23
Effects of acetic acid and vinegar on the hydrolysis of inulin and dahlia tubers ……………	Hiroshi Nishise, Tomoe Ajiki, Nami Kakimoto, Urara Ohsumi, Ayaka Teshima ……	33
<i>The Coherence of Gothic Conventions</i> 試訳(2)……………	比名 和子訳 ……	37
現代自己心理学における「共感」の探究……………	安村 直己 ……	43
就職支援に向けたeポートフォリオの2年目の運用結果について ……………	梶木 克則・西川真理子・増田 将伸・前馬 優策 ……	59
高齢者の学習講座参加によるプロダクティブ・エイジング志向性の変容……………	藤田 綾子 ……	65
Android タブレットのプログラミング演習……………	榊井 猛 ……	73
学術活動……………		81

BULLETIN OF KOSHIEN UNIVERSITY

No. 40 2013

CONTENTS

- Some poems of 〈Das Schenkenbuch〉 and 〈Buch der Parabeln〉 in 《West-östlicher Divan》
..... Yoshihisa Ueno 1
- Effects and subjects of The Facilitation Learning Workshop
..... Noriko Takahashi 11
- A review of stock investment using RSI after a series of the year-to-date high
or low of stock prices is observed. Takashi Nakai, Tadayuki Yonezawa 15
- An Attempt to Support Students' Autonomous Learning:
Koshien University Best Notebook Award
..... Mariko Nishikawa, Masanobu Masuda, Yoshinori Kajiki,
Kenji Kamimura, Yusaku Maeba 23
- Effects of acetic acid and vinegar on the hydrolysis of inulin and dahlia tubers
..... Hiroshi Nishise, Tomoe Ajiki, Nami Kakimoto,
Urara Ohsumi, Ayaka Teshima 33
- A Translation of *The Coherence of Gothic Conventions*(2) Trans. Kazuko Hina 37
- On the Exploration of "Empathy" in Modern Self Psychology
..... Naoki Yasumura 43
- Operational Results of the second year of The e-Portfolio for Career Support
..... Yoshinori Kajiki, Mariko Nishikawa, Masanobu Masuda, Yusaku Maeba 59
- Change in Productive Aging Intensity by Participation for Aged People's Learning Class
..... Ayako Fujita 65
- Seminar of Programming for an Android tablet device Takeshi Masui 73
- Academic works 81

『西東詩集』の「酌人の書」と「比喩の書」

上野 義久

平成24年10月31日受理

Some poems of 〈Das Schenkenbuch〉 and 〈Buch der Parabeln〉 in 《West-östlicher Divan》

Yoshihisa Ueno

Goethe's several poems of 〈Das Schenkenbuch〉 and 〈Buch der Parabeln〉 in 《West-östlicher Divan》: [Setze mir nicht], [Schenke, komm!], [Ob der Koran] and so on are translated into Japanese with explanatory notes.

This paper is intended to conclude on the basis of Goethe's 《Noten und Abhandlungen zu besserem Verständnis des West-östlichen Divans》 and his following words: "Der höchste Charakter orientalischer Dichtkunst ist, was wir Deutsche Geist nennen, das Vorwaltende des oberen Leitenden; hier sind alle übrigen Eigenschaften vereinigt, ohne daß irgendeine, das eigentümliche Recht behauptend, hervorträte. Der Geist gehört vorzüglich dem Alter, oder einer alternden Weltepoche. Übersicht des Weltwesens, Ironie, freien Gebrauch der Talente finden wir in allen Dichtern des Orients." that he made every effort to devote himself as a Western poet to Oriental poetry, to write his poems in the Oriental style and to leave many remarkable poems for us.

はじめに

『西東詩集』の原語はWest-östlicher Divanで、DivanはDiwanとも綴り、元々ペルシア語で「詩集」を意味する。従って『西洋的かつ東洋的な詩集』とでも訳すべきところだが、一般に『西東詩集』として世に知られている。

ゲーテがこの詩集の創作に最も力を注いだ時期は、1814、15年頃で、詩人の65歳前後の頃である。当時の西洋、とりわけドイツは、ナポレオン占領下での社会の混迷と長い政情不安の中にあった。そんな折り、ゲーテはたまたま手にしたペルシャの詩人、ハーフィスの『詩集』（ハンマー訳、1812年）を読み、ハーフィスと自分との親近感を強く覚えるとともに、ハーフィスのように純粋な恋愛、人生の喜びを素直に享受し、明るい生の肯定と享楽を謳歌し、西洋詩人による東洋的な詩を書こうとの意図のもと、この『西東詩集』を編んだのである。

しかし、この詩集は容易に理解できる類いのもではなく、ゲーテの多くの詩集中最も難解なものとされている。しかも分量は、ヴァイマル版『ゲーテ全集』の第6、第7の2巻を領し、内容的には抒情詩、相聞歌、格言風の詩、思想詩など多岐にわたるが、もちろん単純に分類できないものも多数含まれている。

この詩集を刊行するにあたって、ゲーテ自身、読者の理解を助けるために『西東詩集をよりよく理解するための注解と論考』と題した解説を書いている。この稿では前回の「ズライカの書（そのⅢ）」（Buch Suleika（Ⅲ））に引き続いて、「酌人の書」（Das Schenkenbuch）と「比喩の書」（Buch der Parabeln）の中から特色ある注目すべきものを選んで訳出し、ハンブルク版『ゲーテ全集』の編者、E・トゥルンツの注解やゲーテ自身の『注解と論考』を参照しながら、若干の註釈を施すことにする。

Ohne Titel

Dem Kellner

Setze mir nicht, du Grobian,

Mir den Krug so derb vor die Nase!

Wer mir Wein bringst, sehe mich freundlich an,

Sonst trübt sich der Eilfer im Glase.

Dem Schenken

Du zierlicher Knabe, du komm herein,
Was stehst du denn da auf der Schwelle?
Du sollst mir künftig der Schenke sein,
Jeder Wein ist schmackhaft und helle.

無題

ボーイに

汝武骨者よ、そんなに乱暴に
わしの鼻先にビンを置かないでくれ！
酒を持って来る者は、やさしくわしを見つめろ、
さもないとグラスの中で美酒が濁る。

酌する者に

汝かわいい少年よ、入って来い、
どうしてお前は敷居に立っているのだ？
お前はこれからわしに酌をしてくれ、
どんな酒も味よく澄んでいる。

(註釈) ボーイに語った言葉と、酌する少年に語った言葉が、4行ずつあるだけの小詩だが、それぞれにa-b-a-b型の脚韻を見事に踏んでいる美しい詩である。ボーイに言った最終行のEilferはラインワインの銘酒で、ゲーテが特に好んだものであつた。

1814年9月1日から1週間、ゲーテがフランクフルトの友人プレントナーの別荘に滞在した時のことを、その夫人は思い出の中で次のように述べている。「・・・ゲーテは食事の際、食べ物を自分の皿に山盛り取って、・・・ワインは良いのがたくさん私の家にあつたのを、ものすごくお飲みになりました。特にEilferがお好きでした。主人は時々 Eilferの樽を彼に贈って、たいへん喜ばれました。」

E・トゥルンツの注によると、ガイスベルクのレストランにいた若くて美しいブロンドの少年がモデルとのことで、ゲーテはこの少年に好感を持っていたようである。

Ohne Titel

Dichter

Schenke, komm! Noch einen Becher!

Schenke

Herr, du hast genug getrunken;
Nennen dich den wilden Zecher!

Dichter

Sahst du je, daß ich gesunken?

Schenke

Mahomet verbietet's.

Dichter

Liebchen!

Hört es niemand, will dir's sagen.

Schenke

Wenn du einmal gerne redest,
Brauch' ich gar nicht viel zu fragen.

Dichter

Horch! wir andren Musulmannen

Nüchtern sollen wir gebückt sein,
Er, in seinem heil'gen Eifer,
Möchte gern allein verrückt sein.

無題

詩人

さあ、酌を！ もう一杯！

酌する者

ご主人、もう十分お飲みになりました。
大酒飲みと言われますよ！

詩人

わしが酔いつぶれたのを、お前はかつて見たことがあるか？

酌する者

マホメットが禁じております。

詩人

かわいい子よ！

誰も聞かないなら、わしはお前に言うつもりだ。

酌する者

あなたがお話くださるなら、
私は多くを尋ねる必要などありません。

詩人

聞け！ 我々他のイスラム教徒は
素面で腰をかがめていなければならない、
彼は聖なる熱意に燃えて、
ひとり狂っていたがる。

(註釈)「ズライカの書」が恋の陶酔状態で書かれているとすれば、「酌人の書」は酒による酔いの状態で作られたと言える。両書とも大方、贈答や対話の形式で書かれていて、前者はハーテム・ゲーテとズライカ・マリアンネとの、後者はハーフィス・ゲーテと酌人とのやりとりである。しかし調子は随分異なる。「ズライカの書」では男女の感情が最高にまで盛り上がっているのに、「酌人の書」では、人生の先輩である詩人が酌する少年を相手に、軽口をたたいたり、しゃれを飛ばしたり、冗談を言ったりする。ゲーテの詩でこれほど風変わりなものは他に見当たらない。

ゲーテはワインを好んだが、大酒飲み、酒豪と呼ばれる程ではなかった。彼はこの書で、酒豪ぶって、素面のままでは言えないことを、酔った振りしてくだを巻くように、とぼけたものの言い方をしている。

上掲の詩は、酒好きの老詩人と酌する若者との会話を、ただ無造作に書き留めたもののように思えるが、原文ではこれもa-b-a-b型の韻を見事に踏んでいる。「もう一杯！」の「もう」(schon)でわかるように、詩人はすでに相当酔いが回り、酌人が心配になって酒をつごうとしないと、「わしが酔いつぶれたのを、お前はかつて見たことがあるか？」と言う。それに対して、そもそも酒はマホメットの禁ずるところであることを、酌人は詩人に警告する。そんなことは百も承知だと言わんばかりに、詩人はそういう禁令を出したマホメットの行き過ぎを非難し、その行為の裏にあるものをあばく。

最後の詩人の言葉で、「我々他のイスラム教徒」と自分を呼んでいるところから、この詩人がハーフィスかそれに類する者であることがわかる。こうしてゲーテとハーフィスが紛れ、マホメットが大衆に禁酒を命じたのは、実は酩酊の特権をひとりじめしたかったためだとぼやく。

この箇所は、文章がみだれていて訳し難いが、これも詩人の酩酊振りを示しているのであろう。

Ohne Tietel

Ob der Koran von Ewigkeit sei?

Darnach frag' ich nicht!
Ob der Koran geschaffen sei?
Das weiß ich nicht!
Daß er das Buch der Bücher sei,
Glaub' ich aus Mosleminenpflicht.
Daß aber der Wein von Ewigkeit sei,
Daran zweifl' ich nicht.
Oder daß er vor den Engeln geschaffen sei,
Ist vielleicht auch kein Gedicht.
Der Trinkende, wie es auch immer sei,
Blickt Gott frischer ins Angesicht.

無題

コーランが永遠からのものかどうか？
私はそれを問わない！
コーランが創造されたものかどうか？
私はそれを知らない！
それが書物中の書物であること、
それを私はイスラム教徒の義務として信じる。
しかし酒が永遠からのものということ、
それを私は疑わない。
あるいはそれが天使たちより前に創造されたということ、
それも多分作り話ではないだろう。
酒を飲む者は、いずれにしても、
より生き生きと神の顔を見る。

(註釈) この詩は1815年5月20日に成立した。コーランが永遠の昔から存在したのか、あるいはアラーの神によって創造されたものなのか。E・トゥルンツの注によると、この点をめぐって、かつてイスラム教徒たちの間でしばしば論争が行われたという。

ペルシア人はコーランを唯一神、アラーによって創造されたものと信じ、一方トルコ人は永遠の昔から存在したと主張した。8世紀にはバグダッドで、この論争がイスラム教徒たちの間で騒乱にまで発展したとのことである。

いずれにしても、旧約聖書がユダヤ教徒にとっては、また新約聖書がキリスト教徒にとっては「書物中の書物」であるように、コーランはイスラム教徒にとって「書物中の書物」である。それを義務として信じるというのである。

しかし、7行目からは一転、酒が採り上げられる。酒は神代の昔からの永遠の存在である。その永遠の存在によって酩酊する者が、下戸よりもっと「生き生きと」アラーを拝顔できるという。神に心酔する状態は、酒で酩酊する状態に近いというのだろうか。ここにも作者の諧謔を読みとることができる。

Ohne Titel

Trunken müssen wir alle sein!
Jugend ist Trunkenheit ohne Wein;
Trinkt sich das Alter wieder zu Jugend,
So ist es wundervolle Tugend.
Für Sorgen sorgt das liebe Leben,
Und Sorgenbrecher sind die Reben.

無題

我々はみんな酔わねばならない！
青春は酒のない酩酊。
年寄りも飲んで若返る、
これこそ不思議な効能。
愛しい命が不安を気づかう、
そして憂いの解消は酒だ。

(註釈) この詩がいつ作られたか、定かではない。ただ、ゲーテが1815年1月から読み始めた「カーブースの書」に次のような表現が見られる。„In der Jugend sind die Menschen ganz ohne Wein berauscht.“ (「青春時代には人間は全く酒なしで酔っている。」) これをヒントに「青春は酒のない酩酊」という言葉が生れたのであろう。最終行の「憂いの解消は酒」とは、古今東西変わらぬ真実のようだ。

因みに、「カーブースの書」については、ゲーテの『注解と論考』の「フォン・ディーツ」の項で詳しい説明がなされている。

Ohne Titel

Da wird nicht mehr nachgefragt!
Wein ist ernstlich untersagt.
Soll denn doch getrunken sein,
Trinke nur vom besten Wein:
Doppelt wärest du ein Ketzer
In Verdammnis um den Krätzer.

無題

そこではもう問い合わせるまでもない！
酒は厳しく禁じられている。
それでも陶酔すべきなら、
極上の酒だけを飲め。
安い酒の天罰を受けたら
お前は二重に異端者となるだろう。

(註釈) この詩も前の詩と同様、「カーブースの書」を典拠としている。参考までにその箇所を記載しておく。„Laß immer den besten Wein bringen; denn ist der Wein schlecht, so wird die Mahlzeit für schlecht gehalten. Hierzu kömmt, daß Wein zu trinken Sünde ist. Wenn du also Sünde begehst, so begehe sie wenigstens um des besten Weines willen; denn sonst würdest du teils die Sünde begehen, teils würdest du schlechten Wein trinken.“ (「いつも極上の酒を持って来させよ。なぜなら酒が悪いと、食事も悪いと思われるから。それに加えて飲酒が罪だという事情がある。だからお前が罪を犯すなら、せめて極上の酒のために犯せ。さもないと罪を犯す時もあるわ、悪い酒を飲む時もあるわということになるから。」)

因みに、最初の「Da」(そこでは)の解釈であるが、唐突な感じも受けるが、コーランと考えると、なんの問題もなくスムーズに読める。

Ohne Tietel

Die Perle, die der Muschel entrann,
Die schönste, hochgeboren,
Zum Juwelier, dem guten Mann,
Sprach sie: „Ich bin verloren!
Durchbohrst du mich, mein schönes All

Es ist sogleich zerrüttet,
Mit Schwestern muß ich, Fall für Fall,
Zu schlechten sein geküttet.“

„Ich denke jetzt nur an Gewinn,
Du mußt es mir verzeihen:
Denn wenn ich hier nicht grausam bin,
Wie soll die Schnur sich reißen?“

無題

貝殻からこぼれた真珠、
一番美しい高貴な生れの真珠が、
善良な男である宝石商に
言った。「私はもうだめです！
あなたが私に穴をあけたら、私の美しい全て
それがすぐだめになります、
姉妹たちと私はひとつひとつ、
粗悪な真珠たちと繋がらねばなりません。」

「おれは今利益のことしか考えない、
お前はおれを許さねばならない。
ここでおれが残酷にならないと、
どうして首飾りが出来上がるだろうか？」

(註釈) この詩は「比喩の書」にあるものだが、ゲーテは『モルゲンブラット』紙の予告で、この書は「人間の様々な状態に通用して、種々比喩的に表現したものを収めてある」と述べている。これらの詩は教訓詩の一種には違いないが、それを正面から教えるのではなく、比喩という衣に包んで人間の普遍的な倫理的眞実を描こうとしたものである。

ゲーテについて一般によく言われることは、若い頃には他人のことなどあまり顧みず、ひたすら己の感情の趣くままに生きようとしたが、広い世の中を知り経験を積むにつれて、個と全体との関係を深く考えるようになった。

いかなる人間もどんなことをするにしても、個人でとどまる間は、無能に等しい。人間は有能になればなる程、社会との関連を保ち、それを深めなければならない。ゲーテはヴァイマル公国の政治にも力を尽し、このことを痛切に感じていた。

全ての人は、その才を全体のために役立てることによって己を生かすべきだという信条を、真珠と宝石商との微妙な関係に譬えて歌っている。世間の諸々の矛盾を腹に納めて、苦笑いしながら詩作するゲーテの姿が浮かんでくる。

Ohne Tietel

Zum Kessel sprach der neue Topf:
„Was hast du einen schwarzen Bauch!“——
„Das ist bei uns nun Küchgebrauch.
Herbei, herbei, du glatter Tropf,
Bald wird dein Stolz sich mindern.
Behält der Henkel ein klar Gesicht,
Darob erhebe du dich nicht,
Besieh nur deinen Hintern.“

無題

釜に対して新しい鍋が言った、
「君はなんて黒い腹をしているんだ！」——
「これが我々のところでは台所の流行だ。
こっちへ来い、こっちへ来い、つるつるの阿呆よ、
すぐにお前の自慢も衰えるだろう。
取っ手がきれいな顔をしていても、
それで舞い上がるな、
お前の尻をよく見ることだ。」

(註釈) この詩は1818年9月5日の作で、1827年に決定版が出る際、「比喩の書」に追加された。E・トゥルンツの注によると、トルコの格言、「Der Fleischtopf sagte dem Fleischtopfe: dein Hinterer ist schwarz.“ (「肉鍋が肉鍋に、お前の尻は黒いと言った。))に触発されて、作られたとのことである。

内容も形式も東洋的であって、ゲーテの独創的なものとは言えない。ただ、東洋的なものをドイツ語で表出したところに、ゲーテの独創があると言えないだろうか。最後の単語、「Hintern“はお尻を意味する俗語であって、他の詩で使われているのを筆者は知らない。全く詩的ではないが、5行目の„mindern“と押韻するため使ったのである。こんなところにも、東洋的ペルシア的軽み、諧謔が出ていて、読者は失笑を禁じえないであろう。

Ohne Tietel

Bulbuls Nachtlied durch die Schauer
Drang zu Allahs lichtem Throne,
Und dem Wohlgesang zu Lohne
Sperrt' er sie in goldnen Bauer.
Dieser sind des Menschen Glieder.
Zwar sie fühlet sich beschränket;
Doch wenn sie es recht bedenket,
Singt das Seelchen immer wieder.

無題

恐怖を通して小夜啼鳥の夜の歌が
アラーの明るい玉座へ届いた、
そして美しい歌の報いに
アラーは鳥を金色の鳥籠に閉じ込めた。
この籠は人間の身体である。
もちろん鳥は窮屈な感じを受けるが、
しかしよく考えてみると、
この小さな魂は繰り返し歌う。

(註釈) この詩は1815年5月30日以前に成立したと推定されるが、定かではない。ペルシアの『ニガリスタンの書』の中に、「魂と呼ばれるこの捕われの小夜啼鳥は、網の役割をする肉体に仕えるのではない」という表現があり、E・トゥルンツの注によると、魂を鳥籠に閉じ込められた鳥とする喩えは、ペルシアの詩にしばしば見られるものという。ハーフィスにも次のような詩があるので、記載しておく。„Der Phönix meines Herzens hat/Sein Nest im letzten Himmel, /Im Körperkäfigt eingesperrt/Ist er längst satt des Lebens.“ (「私の心臓のフェニックスは/最果ての天に巣を持っている、/肉体の鳥籠に閉じ込められて/彼はとっくに生にうんざりしている。))

単語で注意すべきは、最初のBulbulで、Nachtigallのことだが、比喩的にSeele (魂)を意味する。また同じく1行目のSchauerは、Wolken (雲), Nebel (霧), Regen (雨)の比喩である。

Es ist gut
Bei Mondenschein im Paradeis
Fand Jehovah im Schlafe tief
Adam versunken, legte leis
Zur Seit' ein Evchen, das auch entschlief.
Da legen nun, in Erdeschranken,
Gottes zwei lieblichste Gedanken.——
„Gut!!!“ rief er sich zum Meisterlohn,
Er ging sogar nicht gern davon.

Kein Wunder, daß es uns berückt,
Wenn Auge frisch in Auge blickt,
Als hätten wir's so weit gebracht,
Bei dem zu sein, der uns gedacht.
Und ruft er uns, wohlan, es sei!
Nur, das beding' ich, alle zwei.
Dich halten dieser Arme Schranken,
Liebster von allen Gottesgedanken.

これでよし
楽園の月の中に
アダムの深い眠りに沈んでいるのを
エホバは見つけ、そっと
傍らにかわいいエヴァを置いたが、彼女も眠り込んだ。
さてそこで、地上の束縛の中で、
神の最も愛すべき思想がふたつ横たわった。——
「よし!!!」と神は自分の傑作に報いて叫んだ、
彼は立ち去ることすらためらった。

目と目が爽やかに見合う時、
我々が魅せられるのは、なんの不思議もない、
あたかも我々が、
我々を考案した神の傍らまで達したかのように。
そして彼が我々を呼ぶなら、それもよし！
ただ、ふたりとも、私は条件をつける。
この両腕の柵がお前を放さない、
全ての神の思想の中で最も愛すべき思想よ。

(註釈) この詩の成立は1815年5月24日である。前稿で採り上げた「ズライカの書」の中の「Wiederfinden」(再会)とモチーフにおいて共通するところがある。しかし「Wiederfinden」が荘重で繊細な趣きがあるのに対して、「Es ist gut」は明るく、軽みを感じられる。

表題の「Es ist gut」は、哲学者カントの最期の言葉でもあるが、何よりもすぐ思い浮かぶのは、旧約聖書の「創世記」の天地創造の記述で、神は何度もこの言葉を繰り返している。

2行目のJehovahは、もちろん旧約聖書の神の名で、我国の聖書では「主」あるいは「主なる神」と訳されている。ゲーテは幼い頃から聖書、特に旧約聖書に親しんでいて、詩や小説のモチーフをそこからしばしば採っている。最後の行で「全ての神の思想の中で最も愛すべき思想よ」と呼び掛けているが、ゲーテにとって旧約聖書は汲めども尽きぬ話題の宝庫、まさに愛読書中の愛読書だったのである。

付記

テキストにはGoethes Werke (Hamburger Ausgabe)Band 2 を使用し、適宜Goethes Werke (Herausgegeben im Auftrage der Großherzogin Sohie von Sachsen) 6. und 7. Bandを参照した。

ファシリテーションを学ぶ場作りの試み

高橋 紀子

平成24年10月31日受理

Effects and subjects of The Facilitation Learning Workshop

Noriko Takahashi

要 約

本稿では、地域に開かれたファシリテーションの学びの場作りを通して、ファシリテーションを学ぶという体験が参加者にどのように体験されるのか、またファシリテーションを学ぶ場作りにおける課題を検討した。

ファシリテーション研修会を6回実施し、延べ86名が参加した。参加者アンケートの分類の結果、ファシリテーションの学びの体験には、①グループを見る視点の獲得・ファシリテーションについての理解の深まり、②ファシリテーションをする不安の軽減、③自己理解の深まり、④学びへの意欲の高まりの4つの傾向があることが伺われた。また、複数のファシリテーターによる研修会においては、それぞれのファシリテーターのグループ観の違いの尊重とその活かし方が課題としてあげられた。

The purpose of this research is to discuss about effects and subjects of the facilitation leaning workshop. The following thing was suggested as the result of analysis of questionnaire; experience of facilitation leaning facilitate (1) deepening of an understanding about facilitation (2) uneasy mitigation for facilitation, (3) deepening Self-understanding, (4) improvement in the volition to study. And about coexistence of facilitator diversity are discussed.

key words : ファシリテーション、学び、場作り

I 問題と目的

グループ・アプローチは、個人カウンセリング、心理査定と並ぶ心理士の業務のひとつである。医療領域ではデイケアやSSTそして心理ミーティング、教育領域では構成型エンカウンターグループ、地域でも母親同士の育児相談やひきこもりの家族の会など、グループの力動や構造を活用したグループ・アプローチはあらゆる領域で実践研究されている。

こうしたグループ・アプローチを実践する上でグループを促進するファシリテーションは重要な概念のひとつである。

ファシリテーターの哲学および態度について、ロジャーズ (1970) は次の5つをあげている。

- ① グループはグループの潜在力を発展させる促進的な風土をみずからもっている。
- ② ある特定のグループに特殊な目的を持ち込むことなく、そのグループ自身の方向が発展するのを願う。
- ③ 私の希望は、促進者であるとともに参加者になっていくことである。
- ④ 私は、グループプロセスのほうが、私の発言もしくは行動よりもはるかに重要であり、私が介入しなくてもプロセスは展開すると信じている。
- ⑤ 感情および認知の両面を伴う全人間the whole personが参加してほしいと強く思う。

また、ロジャーズ (1970) はファシリテーターについてこうも述べている。「私の希望は、促進者であるとともに参加者になっていくことである。これは説明しにくいことで、私があたかも二つの異なった役割を意識的にとるような印象を与えてしまいやすい。もしも、あなたが、正直に自分自身になろうとしている一メンバーを注意深く見るならば、その人はある時には主として他のメンバーの成長を促進する目的で、自分の感情・態度・考

えを表明しているのを見るであろう。またある時には、彼が同じ真実さで、成長という賭けへ自らを開くという明確な目的をもって自分の感情や関心毎を表明しているのを見るであろう。これが私にも当てはまる。ただ、私は自己を賭ける点では二番手で、グループの初期よりも後期になって冒険をするタイプの人間である。各側面が私の真実の姿であり、役割をとっているのではない。」

また野島（2000）は、ファシリテーションのねらいとして、①グループの安全・信頼の雰囲気形成、②相互作用の活性化、③ファシリテーションシップの共有化、④個人の自己理解の援助、⑤グループからの脱落・心理的損傷の防止の5つをあげている。

そして、安倍（2010）は、ファシリテーターの特徴として以下の3つをあげ、リーダーシップとファシリテーションの違いを説明している。

- ① リーダーシップの分散：ファシリテーターは、自分だけでリーダーシップを独占するのではなく、自分もメンバーのひとりになることによって、メンバーにできるだけリーダーシップを委譲し、権威化を避けようと試みる。
- ② 自己の表明：ファシリテーターは、自分がファシリテーターだからといって自分のことを語らないのではなく、グループのなかで体験したことをグループに開示する。ファシリテーターは、自己のグループ体験を開示することによって、グループプロセスを促進する。
- ③ グループプロセスの促進：ファシリテーターは、あらかじめ決められたプログラムの進行役というよりは、メンバーの自発性を尊重しながら、メンバーの話したいことを引き出すプロデューサーに近い。ファシリテーターは、メンバーに話すことを強制するのではなく、メンバーとともに話せるグループプロセスを創出する。

このようにファシリテーションの役割や機能について検討が重ねられている一方で、実際にグループをどうファシリテートするかといった実践的学習や、グループの構造の意味等の理論的学習は、臨床心理士を養成する大学院でも充分に行われていないのが現状である。集中講義で外部の講師によるファシリテーションでグループのメンバー体験をしたり、アクティビティをいくつか体験したりすることはあるかもしれない。また、とりあえず放り込まれる形でグループ活動に携わるというものもあるだろう。しかし、そこでの体験を振り返りや活動の意図の説明、改善点の検討や、自身のファシリテーションについて検討する機会が丁寧に行われているところは少ないように見受けられる。

個人カウンセリングが電話相談申込の対応に始まり、インタークの陪席、ケースカンファレンス、スーパービジョンと修士課程の2年間にわたりきめ細やかに学びの機会があるのに比べると、ファシリテーションを学ぶ現状は実にお粗末である。

なぜこんなにもきちんとした学びの体制が整わないまま今日まで来てしまったのか。その理由として、まずグループの場合、ファシリテーターだけでなくメンバーの力も作用することから、熱心に取り組めば大抵なんとなくうまくいくというグループの持つ力も作用しているかもしれない。また、グループ・アプローチの実践は職業を限定しないため、職業アイデンティティにつながらず、心理士も積極的に学ぼうとしない傾向もあるかもしれない。

熱心に取り組めばさえすればほどほどに成功し、職業も限定されないのであれば、あえて学ぶ必要もないという考えもありそうである。

しかし、現場でグループ・アプローチのニーズがとても高いことは心理士を育成教育する立場として自覚的である必要があるかと思う。グループ・アプローチに熟達しなくとも、最低限気をつけることや準備することを伝えておく必要は臨床現場へ送り出す者の責任としてあるのではないだろうか。また心理士の育成に限らず、地域でグループ実践を重ねる人たちとの交流を通して、ファシリテーションを学び合い、より実践的で継続的なファシリテーターの学びのプロセスをサポートすることも重要になろう。

むしろファシリテーションを学ぶ機会が全くないわけではない。例えば人間関係研究会は、1970年代から続くファシリテーションの学びの場である。そして、野島（2011）は大学院の修士過程2年間でファシリテーションを学ぶシステムを提案している。

こうしたファシリテーター養成の試みの問題は、これらは基本的にファシリテーションを学ぼうと積極的に思う人々を対象に実施されており、その意味で対象がだいぶ限定されているところにある。また、こうした養成のかたちでは、現場でグループをすることになったのでファシリテーションを学ぶ必要が生じた方々や、既に実践しているけれどこれで良いのか振り返ってみたい、他の人の意見を聞いてみたいといった人たちには参加しに

くく、そうした人たちがファシリテーションを学べる機会を設け、互いに学び合うことは大切となろう。

そこで、必要を感じた人が必要を感じた時にファシリテーションを学ぶには、どうした場を設定するのが適切なのか検討することにした。その最初の試みとして、2012年度は地域に開かれ職業や経験を限定しない形でファシリテーションの研修会を企画運営した。本稿では、その研修会を事例に、ファシリテーションを学ぶ場作りの効果と課題について検討することとする。

Ⅱ 概要

1 研修会の構成

ファシリテーションを学ぶ場として年間6回の研修会を企画した。講師はそれぞれ異なる領域でグループ実践をするファシリテーターに依頼した。定員は20名程度、参加費は4000円とし、研修会は午前中1時間半をレクチャー、午後3時間強を体験学習という構成にした。

ファシリテーターには研修の目的を説明し、研修する内容についてはこちらからテーマを提案し、後半の体験学習をどのような内容にするのかは各講師の判断に任せた。ただし2回目以降の講師には過去の内容を報告するか実施前にどのようなことをするのか尋ねる等して、他の研修会との内容の重複を避けるようにした。

2012年度のファシリテーション研修会のプログラムを表1に示す。

表1 2012年度ファシリテーション研修会プログラム

1	2012/6/3	総合	グループの力 なぜ、グループなのか。ファシリテーターとは何か。ファシリテーションとは何をするのか。	三國牧子 (九州産業大学)
2	2012/7/8	地域	家族を支えるグループにおけるファシリテーション：不登校の親のグループ事例を元に	中地展生・小西浩嗣 (帝塚山大学)
3	2012/8/5	産業	企業メンタルヘルス研修におけるファシリテーション：「次も願われる研修のコツ	土井晶子 (神戸学院大学)
4	2012/10/13	教育	授業で実施するグループの進め方：担任のニーズや学級風土に応じたプログラムの作り方	金子周平 (鳥取大学)
5	2012/11/4	医療	統合失調症患者の心理ミーティング：参加者の病態水準によるファシリテーションの違い	野島一彦 (跡見学園女子大学)
6	2012/12/8	総合	グループにおける記録の活用：プロセスや効果を客観的に振り返る方法として	坂中正義 (福岡教育大学)

2 参加者の内訳

参加者は2012年11月現在で参加者は55名、延べ数では86名となった。職業は臨床心理士24名、他職種12名、大学院生12名であった。他職種は会社員、教員、保育士等であった。

Ⅲ 学びの効果と課題

1 参加者の学びの体験と効果

研修会終了後、参加者には自由記述で研修会の感想についての記入を求めた。参加者が研修会の参加によってどのような学びを体験し効果を感じているのか、その内容を分類すると、①グループを見る視点の獲得・ファシリテーションについての理解の深まり、②ファシリテーションをする不安の軽減、③自己理解の深まり、④学びへの意欲の高まりの4つの傾向があることが伺われた。

まず〈①グループを見る視点の獲得・ファシリテーションについての理解の深まり〉については、「グループが繋がっていく過程においてファシリテーターとしてどのような働きをしていくのか、又、ファシリテーターとしてどういうところに気をつけていかなければいけないのかすこしですが学ぶことができました。」「多少の混乱や予期せぬ出来事、このように秩序の崩れる瞬間が大きなエネルギーとなり、ファシリテーターはこれを上手に取り扱うことが求められるのだと感じました。」等、ファシリテーションとは何をするのかイメージを持たせるとする記述や、「自分の実践を言語化できていないところや、いつも想っているけど、そう、いつも想っていたことだ、ということを確認できました。」といった、これまでの実践を照らし合わせてファシリテーションについての理解を深めた記述がみられた。

また、「自分自身のファシリテーションのやり方に自信がもてる気がしました」「またグループをする機会にであつたら、今までのように「え、イヤだな、どうしよう…」という気持ちをあまりもたずにのぞめそうな気がするの、がんばってやってみようと思います。」「研修を受け、できること、自分が体験してみたい、やってみようと思えることを現場で取り入れてやっていこうと思えました。少し肩の力を抜いて、できる範囲でがんばっていこうと思います。」といった記述から、ファシリテーションを学ぶ機会は、〈②ファシリテーションをする不安の軽減〉につながることもあることが示された。

そして、「何か目的に向かうというよりも、いろいろなものを一旦置いて“ただの私”になっていくという経験でした。そういう経験“ただの私になって今を楽しむ”が現実をいきっていく力になるなあとと思います。」「自分の課題を解決するヒントを得ました。」といった記述から、研修会がファシリテーションの学びだけではなく〈③自己理解の深まり〉の機会にもなりうることが示唆された。

なお、「対人援助職に就かれている方や、これからそれを目指そうとしている方、一般企業の方など、普段はなかなか知り合うことのできないような人たちとワークをしたり、ディスカッションをすることでとても良い刺激となりました。」と、いろいろな立場の人たちとの出会いが刺激となったとする記述や、「聞いて学べたことと、やって感じたこと、みて思ったこと、それぞれを体験でき、自然とわからないことやもっと聞いてみたいということができました。また、それを出しても安全だという柔らかい雰囲気を直接味わえたことが今回1番良かった点です。」と、〈④学びへの意欲の高まり〉を体験する参加者もみられた。

2 学びの場作りの課題

ある講師は「アクティビティをこちら側が提案するグループをする人は、ファシリテーターではなくリーダーと呼びます」と話し、ある講師はアクティビティを提示する場合もしない場合もファシリテーターとしてそのファシリテーションを話した。またグループのアンケートについて、ある講師は「アンケートを使わないとメンバーの気持ちがわからないのでは問題だ」と参加者アンケートについて疑問を呈し、ある講師は参加者アンケートの意義と使い方について説明をした。

こうした用語の使い方の違いや参加者アンケートの取り扱いが講師のグループ観によるところが大きい。そしてその講師のグループ観やスタンスを知らない参加者によっては混乱しやすい部分でもある。

これについては、事前に言葉を統一するのではなく、こうした違いが生じた時に参加者に補足として説明する他、そのような違いが生じていることを申し送りとしてその後の研修会講師に伝える等した。しかし単発で参加する人も多量中、講師のグループ観に影響される事柄について全ての方に十分に説明することはできなかった。講師の持ち味を尊重しながらも、講師の答えが唯一の正解ではなく、数多くある正解のひとつであることも伝える工夫は、企画をオーガナイズする者が丁寧に取り組んでいかななくてはならない課題であると思う。

こうした講師の違いを統制せず、様々な価値観に触れる機会とするのは、参加者が自身のグループ観を自覚し醸成するきっかけになると思われる。その為にも、講師のグループ観の違いによる誤解をどのようにそれぞれの理解に昇華させていくかは重要な課題である。

参考文献

安倍恒久 (2010) 『グループアプローチ入門』 誠信書房.

Rogers, C.R. (1970) Carl Rogers on Encounter Groups. Harper & Row. 『エンカウンターグループ』 島瀬稔・島瀬直子訳, 創元社.

野島一彦 (2000) 『エンカウンターグループのファシリテーション』 ナカニシヤ出版.

野島一彦監修 高橋紀子編 (2011) 『グループ臨床家を育てる：ファシリテーションを学ぶシステム・活かすプロセス』 創元社.

年初来高値または安値をつけた後のRSI指標を用いた株式投資の評価

中井 孝 米澤 忠幸

平成24年10月31日受理

A review of stock investment using RSI after a series of the year-to-date high or low of stock prices is observed.

Takashi Nakai Tadayuki Yonezawa

概 要

These are fundamental trading according to fundamental information and technical trading according to past changes in stock prices. We report a stock investment using RSI, one of technical analyses, after a series of the year-to-date high or low of stock prices is observed.

Keywords: stock investment, RSI, year-to-date high or low

1 はじめに

一般に、資産を株式で運用するときは、証券会社が勧める株や、株式投資雑誌などに掲載されている推奨株、または配当利回りやPER、ROEなどの投資指標を条件にスクリーニングした株を買う。しかし、たとえ安く買えたとしても、少しの利益で売却してしまったりする。逆に欲を出して売り時を見誤り、買値より下がりその損失が拡大して損切りできずにいたり、急落するとまだ下がるかもしれないとろばい売りしてしまったりする。このような理由で、株式の運用で利益を出している人は1割程度にしかないという。株価の動きに一喜一憂して、冷静におられないのも一要因のようである。

株式運用で失敗をしないためには、ファンダメンタルやテクニカルのような投資指標を計算し機械的に売買をするのも良いのかもしれない。

さて、株式欄で年初来高値（もしくは安値）が一旦つけば、1回だけということは少なく、その後幾度か年初来高値（安値）をつけ続ける傾向にある。本稿では、年初来高値（安値）をつけた後を日々追いかけて、テクニカル分析のうちの一つであるRSI（Relative Strength Index）指標を算出する。この指標が、株売買のタイミングを計るのに適切かどうかを検証する。

2 RSIインデックスの求め方と投資家の目論見

朝刊の株式欄を眺めていると、黒地に白抜き数字になった年初来高値（安値）を見かける。一度年初来高値（安値）がつけば、同銘柄で、その後、年初来高値（安値）が数日おきぐらいつけ続け、長いときには数週間から数ヶ月にわたってつけ続けることがある。

年初来高値（安値）がつけ続ける状況下の株の、ピークをつけた日から過去数ヶ月からのデータをExcelに取り込み、投資指標RSIを計算する。まず年初来高値を追い続けるのであれば日中の高値の前日比を、年初来安値を追い続けるのであれば日中の安値を使って前日比を算出する。上がればプラス、下がればマイナスである。

x_n を営業日 n における日中の高値（安値）としたとき、前日比を

$$\begin{aligned} \Delta x_n &= x_n - x_{n-1} \\ \Delta x_n^+ &= \begin{cases} \Delta x_n & : \Delta x_n > 0 \text{ ただし } (n = \dots, -1, 0, 1, \dots ; n = 0 \text{ は年初来高値 (安値) のピーク日}) \\ 0 & : \Delta x_n \leq 0 \end{cases} \quad (1) \end{aligned}$$

で表す。これらの符号付き前日比 Δx_n をもとに、期間を決めて次のRSIを求める。

$$RSI = \frac{\sum \Delta x_n^+}{\sum |\Delta x_n|} \quad (2)$$

RSIは0から1の値を取り、一般には0.7を超えれば買われ過ぎ、0.3を割れば売られ過ぎと判断して、それぞれが売りのタイミング、買いのタイミングだとする。

RSIの期間は、14日間で計算されることが多いが、10日の方がよいと言う人もいる。証券会社によって期間は変わるが、最長は30日とか52日である。実は期間の日数は、株価チャートの形状に依存していて、10日か14日かどの日数がよいとは断定できない。日数が増えるにつれRSIの変動はより滑らかに移動平均化される(図1(b)(c)参照)。株価の変動が激しいときは、少ない日数の方がその変動に反応がよい。単調にゆっくり変化するときは、日数が多い方がよい。つまり株価チャートの形状でRSIの出力パターンが異なるために、ディーラー経験のあるホームページ解説者たちは株価チャートの形状を見て経験的に日数を選んでいるようである。

3 用いた銘柄とそのRSI時系列データ

年初来高値が一旦ついてから何日か継続するのは、上がる理由があって、売りより買いの方が多からである。業績の上方修正が確実な場合は、堅実に上がる。

そうであっても時価総額が小さければ、資金が多量に流れ込んだときに株価の振れ幅が大きくなる。よって取り扱った銘柄は2012年8月1日時点での時価総額1兆円以上である。45銘柄あった。データの取得期間を、年初来高値(安値)のピーク日の前後2ヵ月としたので、その年初来高値(安値)の前後2ヵ月ずつが取れなかったり、期間途中で株式分割があったりしたので、年初来高値を追う銘柄は42、安値を追う銘柄は33となった。安値を追う銘柄が少ないのは、上がり続ける上昇基調のチャートが比較的多かったためである。なお、株価の時系列データは、ヤフーファイナンスから取った。これらデータの年初来高値と安値のピーク日にはそれぞれ薄緑色と薄紅色で明示されるようになっている。

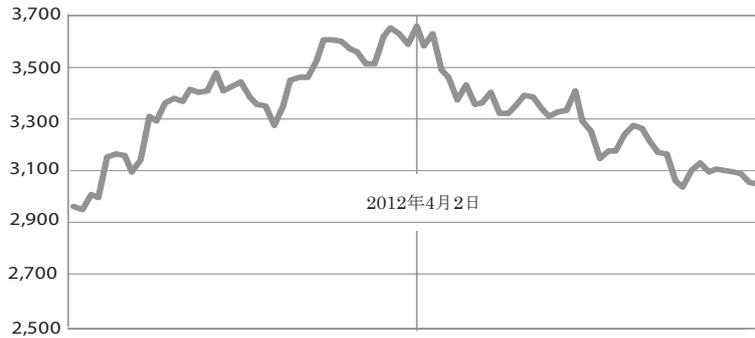
なお株価チャートの中には、当然年初来高値(安値)を追い続けるチャートと同じような形状を持つ箇所が出てくる。その箇所が見つければいいのだが、東証一部上場の企業数だけでも1,700社近い。だから現実には探すのも大変である。それに対して年初来高値(安値)は株式欄に出るので注目されやすく、ピークをつけるような箇所の発見が容易である。

ここで、年初来高値(安値)とは、1月1日から3月31日の間は、前年の1月1日から当日までの高値(安値)のことを表す。4月1日より12月31日の間になれば、今年の1月1日から当日までの高値(安値)のことを表す。この2つの期間の違いによって、たとえば1月4日で、昨年末より高い値をとっても、4月1日を超えれば、大発会の1月4日の株価が安値基準となって、株価がより下がれば年初来安値をつけ続けることになる。この場合、1月4日前後の株価を見ながら、年初来安値の始まりを1月4日ではなく、昨年のデータより下がったところで設定した。

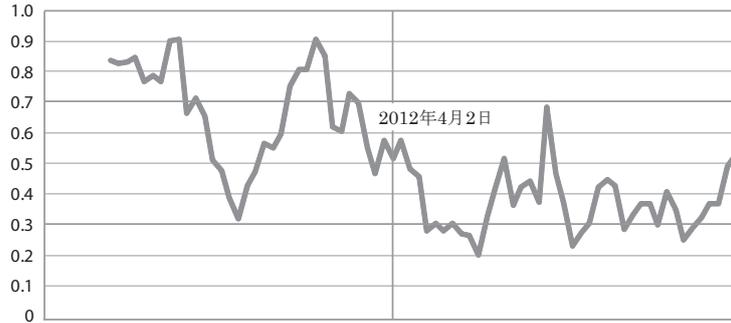
また、1月に年初来高値や年初来安値を取ったとしても、上記の2つの期間の存在により昨年11月から12月のデータも含めて全体の株価チャートを見ながら、データを取得するかどうかの判断を行っている。

さらに、ヤフーファイナンスが表示する年初来高値や安値をつけた日にしたがえば、その日から2ヵ月増しにデータを採れない場合がある。このような場合、ヤフーでの年初来をつけた日より以前に実現されていた年初来高値や安値をつけた日を使った。

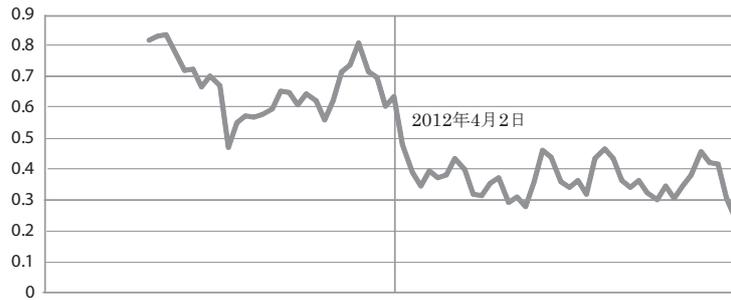
図1(a)は、トヨタの株価チャートである。ピークをつけた年初来高値の前後2ヵ月ずつ合計4ヵ月分のデータを、中央にその年初来高値のピークがくるように配置したものである。同図(b)(c)は、(a)のデータに対して式(2)で示されるRSIを計算し、グラフ化したものである。(c)は(b)と比べて、日数が多い分滑らかになっている。同図(b)の場合、RSI=0.9を2回越え、2回目のRSI=0.9から9日経ってからピークの年初来高値(同図(a))に到達し、そのときのRSI=0.51である。つまりRSI最高値に達してから、ピークの年初来高値に至るまでタイムラグがあることがわかる。なお、期間9日で計算した営業日nのRSI $_n$ は、次式で表わされる。



(a) 2012年4月2日につけた年初来高値と前後2ヵ月の株価チャート



(b) RSI が9日ときのグラフ



(c) RSI が15日ときのグラフ

図1 トヨタの株価チャートとそのチャートから計算したRSI 9日とRSI15日

$$RSI9_n = \frac{\sum_{k=n-8}^n \Delta x_k^+}{\sum_{k=n-8}^n |\Delta x_k|} \quad \text{ただし } (n = \dots, -1, 0, 1, \dots; n = 0 \text{ は年初来高値 (安値) のピーク日}) \quad (3)$$

図1 (b)の横軸は最初の8日分、同図(c)の横軸はRSI 15日となるので最初の14日分が欠落している。またRSIを計算する場合、終値でなく日中の高値や安値を使っている。終値を使うよりシャープになり特徴が出てくるからである。

4 計算結果と考察

年初来高値の場合、各銘柄に対する1日当たり売買金額は24～277億円で、時価総額に対する割合は0.1～0.8%であった。年初来安値の場合は、各銘柄に対する1日当たり売買金額は23～209億円で、時価総額に対する割合は0.1～0.7%であった。

表1、表2は、RSIの期間を9日、11日、13日、15日と増やした年初来高値と年初来安値に関する計算結果である。

年初来高値がつけ続く場合、分母に対する分子の割合が大きくなるため、RSIが0.7以上の高値をつけるようになる。その後、上がるより下がる割合が増えるため、RSIは下がってくる。つまりRSIが0.7以上の最高値をつけたときが売り時ではなく、数日から数週間おいてRSIが若干下がってきたときが、丁度、株価チャートで最高値に達しているのだと言える。表1よりRSI最高値は9日から15日で0.84～0.94、特にRSI期間が9日と小さければ、

RSIはより0.95に近かった。ピークの年初来高値を付けたときの、RSIは9日の母平均の95%信頼区間が0.67～0.76で、11日から15日においては、0.05程度下がって、0.63～0.70である。

上述とは反対に年初来安値であれば、RSIが0.3以下で最安値をつけてから、数日間経過してから浮上してRSIが比較的上がったときに、株価チャートでは最安値になっている。そのような可能性が高い。表2からRSI最安値は9日から15日で0.12～0.23、特にRSI期間が9日と小さければ、RSIはより0.1に近かった。ピークの年初来安値を付けたときの、RSIは9日の母平均の95%信頼区間が0.29～0.38で若干高くなり、11日から15日においては、0.02程度上がって、0.32～0.40である。年初来高値のRSI期間と比べて対称的である。

さらにRSIが最高値に達してから、株価の年初来高値ピークをつけた日までの到達日数も調べた。平均は9日から15日で14.6～16.6日。RSIが最安値に達してから、株価の年初来安値ピークをつけた日までの到達日数は、8.7～13.1日。つまり年初来安値の場合の日数は、母平均の95%信頼区間を見ても、高値の場合と比べてRSI最安値に達してから、比較的早く株価の年初来安値ピークに到達することがわかる（図1、図3参照）。

表3は、ピークの年初来をつける前の2ヵ月間でRSI最高値もしくはRSI最安値に達したあと、それぞれRSIが0.7ラインと0.3ラインとを何回クロスするかを調べてみたものである。クロスの数え方は、たとえば0.7ラインの場合、0.7より大きい値から下がってきて、0.7ラインをクロスし、今度は下から0.7ラインをクロスする。これで

表1 ピークの年初来高値を中心とした合計4ヵ月の時系列データのRSI値の基礎統計量など

	期 間	9日	11日	13日	15日
RSI最高値	平均	0.94	0.88	0.86	0.84
	標準偏差	0.05	0.05	0.05	0.06
ピークの年初来高値（株価） をつけたときのRSI	平均	0.71	0.66	0.66	0.66
	標準偏差	0.15	0.11	0.10	0.09
	母平均の95% 信頼区間	0.67～0.76	0.63～0.70	0.63～0.69	0.63～0.68
RSI最高値をつけてから 年初来高値日までの到達日数	平均	15.6	16.6	14.6	14.6
	標準偏差	10.3	8.9	8.5	9.5
	母平均の95% 信頼区間	12.5～18.8	13.9～19.3	12.0～17.2	11.8～17.5

表2 ピークの年初来安値を中心とした合計4ヵ月の時系列データのRSI値の基礎統計量など

	期 間	9日	11日	13日	15日
RSI最安値	平均	0.12	0.16	0.19	0.23
	標準偏差	0.09	0.09	0.10	0.11
ピークの年初来最安値（株価） をつけたときのRSI	平均	0.33	0.36	0.36	0.36
	標準偏差	0.13	0.11	0.10	0.11
	母平均の95% 信頼区間	0.29～0.38	0.32～0.40	0.32～0.39	0.32～0.40
RSI最安値をつけてから 年初来安値日までの到達日数	平均	13.1	11.6	9.5	8.7
	標準偏差	9.6	8.4	7.3	7.9
	母平均の95% 信頼区間	9.8～16.4	8.8～14.5	7.0～12.0	6.0～11.4

表3 年初来高値の場合は0.7ラインを、安値の場合は0.3ラインを超える回数

回数（高値）	9日	11日	13日	15日	回数（安値）	9日	11日	13日	15日
0	0	0	1	0	0	1	5	6	10
1	1	6	7	12	1	12	10	11	5
2	12	15	12	16	2	9	6	6	12
3	13	13	10	10	3	5	2	4	3
4	9	5	9	2	4	1	6	4	2
5	3	2	3	1	5	4	2	0	1
6	2	1	0	1	6	0	2	1	0
7	2	0	0	0	7	1	0	1	0

1回と数える。クロスする回数を数えるのも、投資家によっては、RSIが0.7以上または0.3以下になった場面ですぐに売買するのではなく、0.7以上となり経過とともに0.7を割ってから（または0.3以下となり経過とともに0.3を超えてから）、再び、0.7を下から超えて（または0.3を上から割って）くる時に売り（または買い）のタイミングとして利用しているらしいことを聞きつけたからである。

同表から、年初来高値を追い続けるのであれば、1～3回、年初来安値の場合は、0～2回で、売り買いのタイミングとして利用できる。また同表から単調に上がってピークをつけた後、単調に下がるパターンは少ないことを示している。

5 本稿の手法を別銘柄のチャートに適用

本稿の手法を、年初来高値が続くオリエンタルランドと安値が続く富士フィルムに適用してみた。2012年8月1日時点での時価総額はそれぞれ、8,838億円と7,086億円であった。

オリエンタルランドは図2(a)のように2012年2月8日から5月7日まで年初来高値をつけ続けた。データは2012年2月8日から4ヵ月分である。同図(b)(c)はそれぞれRSI 9日、RSI 15日のグラフである。

株価チャートに初期の小さな山があるので、RSIは共に下降した後、上昇に転じている。買われすぎの0.7ラインを何度か上下に横切って波をつくっている。

RSI 9日とRSI 15日における5月7日までのRSI最高値はそれぞれ0.93と0.84、ピークの年初来高値でのRSI値はそれぞれ0.74と0.75であった。

図3(a)は富士フィルムの4月10日から4ヵ月分の株価チャートである。この銘柄は2012年4月10日から年初

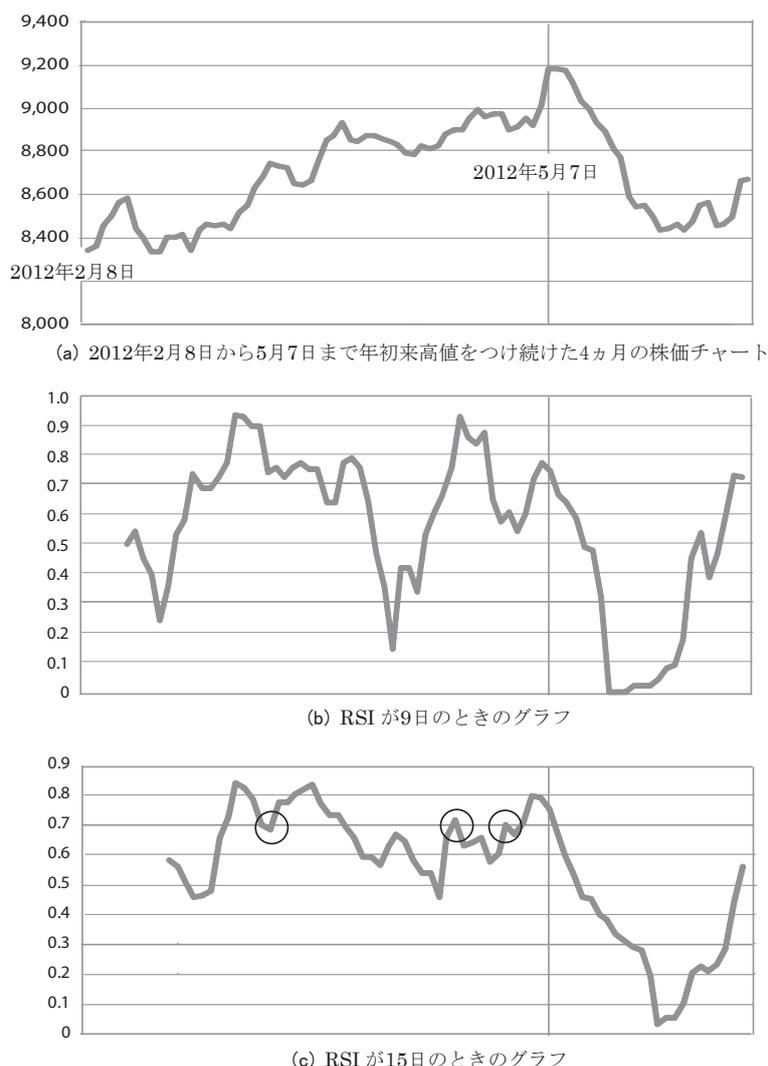
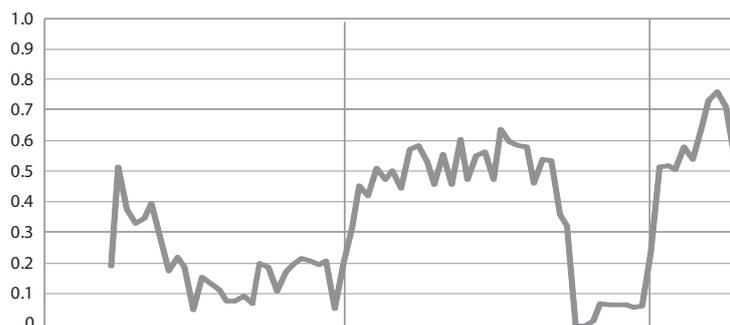


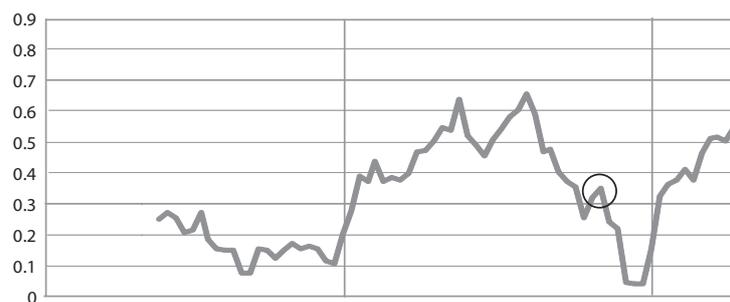
図2 オリエンタルランドの株価チャートとそのチャートから計算したRSI 9日とRSI 15日



(a) 2012年4月10日から年初来安値をつけ続けた4カ月の株価チャート



(b) RSIが9日ときのグラフ



(c) RSIが15日ときのグラフ

図3 富士フィルムの株価チャートとそのチャートから計算したRSI 9日とRSI 15日

来安値をつけ続けた。同図(b)(c)はそれぞれRSI 9日、RSI 15日のグラフである。共に、1ヵ月以上のRSIは売られ過ぎの0.3ラインを割り続け、RSI=0.2前後で、株価は中途の最安値（6月4日と7月26日）に到達している。

RSI 9日における6月4日と7月26日までのRSI最安値はそれぞれ0.06と0.00、6月4日と7月26日のRSI値はそれぞれ0.21と0.24であった。これらの値は、表2の期間9日の母平均の95%信頼区間下限である0.29より低い。

表4は0.7と0.3ラインを1、2回越えたときの、オリエンタルランドと富士フィルムの株価を示したものである。オリエンタルランドの年初来高値が2月8日に初めて現れたときに、そのときの株価は8,320円。もしこのとき上がり続けると考え、買っておれば、RSI 9日であれば、1回で110円、2回で480円の利益が出ていることを意味する。以前から保有しておれば、売りのタイミングである。

また初めて5月7日に富士フィルムの年初来安値を見てその日の終値1,664円で信用で売ったとき、RSI 9日であれば、1回では38円の損失だが、2回で272円の利益が出ている。現物で保有したければ、買いのタイミングである。空売りであれば、返済買いのタイミングとなる。

今回2件しか検証していないが、機械的に売買するとなれば、図2(c)や図3(c)の○印に見られるような小さな山や谷があればそれも1回とカウントしてしまう。つまり適切な売買のタイミングが生まれにくい。このことからもうすこし0.7、0.3ラインを上げるか下げるとの方が良いと思われる。表5は0.05ずらし0.75、0.25ラインに変更したときの結果である。オリエンタルランドの0.75ラインについてはより悪くなっている箇所があった。たとえばRSI 13日の1回目同士で比較すると8,960円から8,610円と下落している。小さな山や谷がより多く出現し

表4 オリエンタルランドの場合は0.7ラインを、富士フィルムの場合は0.3ラインを超える回数とその時の株価（単位：円）

回数（高値）	9日	11日	13日	15日	回数（安値）	9日	11日	13日	15日
1	8,430	8,860	8,960	8,620	1	1,702	1,664	1,664	1,504
2	8,800	8,900	8,920	8,900	2	1,392	1,392	1,408	1,448

表5 オリエンタルランドの場合は0.75ラインを、富士フィルムの場合は0.25ラインを超える回数とその時の株価（単位：円）

回数（高値）	9日	11日	13日	15日	回数（安値）	9日	11日	13日	15日
1	8,630	8,610	8,610	8,620	1	1,664	1,661	1,636	1,504
2	8,800	8,900	8,860	8,860	2	1,392	1,345	1,348	1,442

たのが原因である。しかし、富士フィルムの0.25ラインの場合、株価が低い方が良いので、全般に株価が下落し改善が見られた。

6 おわりに

以上、本稿では年初来高値もしくは年初来安値をつけた後、ある期間中、年初来を追い続けるという状況下において、RSI指標を用いた売りと買いのタイミングを見つける手法を述べた。

RSIが0.7以上または0.3以下になった場面ですぐに投資するのではなく、0.7ライン、0.3ラインを越える回数が、年初来高値であれば1～3回、安値であれば0～2回を売買のタイミングとして利用すればよいことがわかった。

ただ本稿で用いたRSIの期間の日数や、0.7と0.3のラインは、経験値としての域を出ない。株価チャートの形状を考慮したより実用的な値を探す必要がある。

参考文献

1. 盛田昭夫, MADE in JAPAN, 朝日新聞社, 1987.
2. 岩田暁一, 「経済分析のための統計的方法」第2版, 東洋経済新報社, 1991.
3. Levy Robert A., Relative strength as a criterion for investment selection, *Journal of Finance* Vol. 22, 1967.
4. 米澤忠幸, 金融混乱下の株価急落市場におけるrelative strength戦略の収益性, 甲子園大学紀要, No. 36, 2008.

学生の自主的な学びをサポートするひとつの企画の試み - 「甲子園大学ノート大賞」 -

西川真理子・増田 将伸・梶木 克則・上村 健二・前馬 優策

平成24年10月31日受理

An Attempt to Support Students' Autonomous Learning: *Koshien University Best Notebook Award*

Mariko Nishikawa, Masanobu Masuda, Yoshinori Kajiki, Kenji Kamimura, Yusaku Maeba

【要約 (英語)】

Koshien University has presented *Koshien University Best Notebook Award* annually since 2005 as one of the attempts to support students' autonomous learning. This paper presents how this attempt was planned and has been developed, as well as the present problems. The argument demonstrates the capabilities of the award to support autonomous learning, which forms the basis for the further development of the award.

【キーワード】 学生の自主的な学び：Students' autonomous learning 学びのサポート：Learning support
ノートを録る：Note taking ノート大賞：The Best Notebook Award

0. はじめに

本学では、学生の『自主的な学び』を支援する企画のひとつとして、2005年度から「甲子園大学ノート大賞」を実施している。本稿では、この「甲子園大学ノート大賞」の誕生とこれまでの経緯をまとめ、現在の課題を提示し、今後の「甲子園大学ノート大賞」の発展に生かすとともに、学生の自主的な学びをサポートする企画のひとつとしての可能性を学内外に示したい。

1. 講義「ノートのとり方」と「ノート大賞」の誕生

1.1 「ノートをとる」ことの重要性—「高校生」から「大学生」へ—

1970年代後半から80年代前半にかけてアメリカの多くの大学で導入された「初年次教育¹」が日本の大学でも1990年代後半から導入されるようになった。「初年次教育」は、高校生から大学生への円滑な移行をめざすためのものであり、国立教育政策研究所「初年次教育に関する調査」(2007年)の『初年次教育8領域』では、①スタディ・スキル系、②スチューデント・スキル系(学生生活における時間管理や学習習慣、健康、社会生活等)、③オリエンテーションやガイダンス(フレッシュマンセミナー・履修案内、大学での学び等)、④専門教育への導入(初歩の科学、法学入門、専門の基礎演習等)、⑤教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの、⑥情報リテラシー、⑦自校教育、⑧キャリアデザインに分類されている。

当初初年次教育は、オリエンテーションやガイダンスのみであったが、2000年前後から、「スタディ・スキル系」のものが多くの大学で導入されるようになり、入学後、半期あるいは通年の授業の形で実施されるようになった²。大学の授業を受け、学んでいくのに必要とされる基本的な技術「スタディ・スキル」としては、「ノート

¹ 当初は、「導入教育」と呼ばれていたが、現在は「初年次教育」と呼ばれるのが一般的なようである。2008年12月24日の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、「初年次教育」ということばが使われ、その重要性が指摘されている。

² スタディ・スキル系初年次教育のテキストとしては、翻訳では、ウオレスM. J. 著『スタディー・スキルズ』(1991年、大修館書店) A. W. コーンハウザー著『大学で勉強する方法』(1995年、玉川大学出版部)などが早くからあったが、日本の大学関係者が出版したものとしては、2002年に出版された、藤田哲也編著『大学基礎講座—これから大学で学ぶ人における「大学では教えてくれないこと」—』(北大路書房)や『知へのステップ—大学生のためのスタディ・スキルズ—』(くろしお出版)が最初だといえる。

のとり方」、「図書館の利用のしかた」、「情報収集のし方」、「レポートの書き方」、「発表（プレゼンテーション）のし方」などが挙げられる。

このうち「ノートのとり方」については、すでに小学生の時から行ってきたにもかかわらず、スタディ・スキルの一つとして取り上げられているのは、「ノートをとる」ということが大学では高校までとかなり異なるため、その技術を学ぶ必要があるからである。実際、大学の授業を受けて学生たちが最初にとまどうのが、「ノートをとる」ということである。高校までは、「ノートをとる」ということは、先生が黒板に書いたものをそのまま写すということであり、受け身的な行為であった。しかしながら、大学では、そのまま写せばノートになるような板書をする教員はほとんどおらず、板書も大切なことを書かれているとは限らない。学生たちは、自分で工夫してノートをとらなくてはならず、これまでの受け身的な授業の受け方では対応できないことになる。まさしく「ノートをとる」ということは、受け身的に授業を受けていた高校生から、『自主的に学ぶ』大学生へと移行する大きな一歩なのである。

1.1.1 2005年度 栄養学部基礎セミナーでの『ノートのとり方』の講義導入

西川が当時所属していた栄養学部でも、高校生から大学生への円滑な移行を援助するために、2002年度から「基礎セミナー」という科目が開講されている。ただし、栄養学部という学部の性質上からか、「専門教育への導入」（『初年次教育の8領域』の④）が中心となっていた。しかしながら、2005年度には、当時の「基礎セミナー」の企画担当者の意向により、西川が最初の3回、「高校生から大学生へ」というテーマで授業を担当することになった³。そこでは、高校と大学における「学び方の違い」を中心に話し、大学生としての『自主的な学び』のひとつとして、「ノートのとり方」を取り上げた。当時、「基礎セミナー」は専門科目の選択必修として位置づけられていた⁴が、教育的指導により1年生全員が履修していたので、栄養学部1年生全員に「ノートのとり方」についての講義をすることが可能となった。

1.1.2 2006年度 総合教育研究機構の設立と「甲子園大学ノート大賞」の誕生

2006年度には、本学に、初年次教育の充実のために、学部から独立した「総合教育研究機構⁵」という組織が創設されることとなり、西川も栄養学部から移動することとなった。

総合教育研究機構では、特に初年次の学生の学びをサポートし、学生たちが本学で頑張っていこうという気持ちにさせることを最大の目標とし、このような学生の成長意欲（学習意欲）を高めるにあたって、『帰属意識』と『自尊感情』を高めることを重要視して、さまざまな企画を実施している。学生が授業の空き時間を有効利用し、学びを深めるなかで自尊感情を高め、教員や学生たちとの交流を深めるなかで帰属意識と自尊感情を高めていく「ステップアップ講座⁶」とともに総合教育研究機構の発足と同時に始められた企画が「甲子園大学ノート大賞（以下、ノート大賞）」である。半期ごとにプログラムを変更して年間実施される「ステップアップ講座」に対し、「ノート大賞」は、年に1回のイベントであり、また、「ステップアップ講座」が機構レベルの企画であるのに対し、「ノート大賞」は全学的な企画として位置付けられている。

「ノート大賞」実施に伴い、2006年度は、「ノートのとり方」についての講座を、栄養学部1年生に対しては、昨年度同様「基礎セミナー」の時間を2コマもらって実施した。栄養学部2年生以上、現代経営学部、人文学部の学生たちについても、授業時間外に2コマ開講することにしたが、授業外に自主的に参加する講座だったため、残念ながら受講した学生はごく一部にとどまった。

1.1.3 2008年度 全学的初年次教育「教養演習Ⅰ」の開始と講義「ノートのとり方」の必修化

2008年度に、本学の1年次配当のキャリア教育科目⁷である「教養演習Ⅰ」の管轄が、それまでのキャリアサポー

³ この授業を行うにあたり、西川も作成に携わった、前出の初年次教育のテキスト『知へのステップー大学生からのスタディ・スキルズ』を参考にした。

⁴ 2006年度からは卒業必修科目として位置づけられるようになった。

⁵ 教養科目、教職科目、情報処理科目担当の教員からなる。

⁶ ①学びのサポート（学習意欲の向上、学習習慣の涵養）、②空き時間の有効利用、③他学部・他学年の学生および教員との交流などを目的とし、「教養編」「学習編」「資格編」「就職編」の4つの分野からなる30余りの講座が、月曜日から金曜日までの全授業時間帯に開講されている。

⁷ 本学では、1年生から3年生まで、1年次は「成長意欲の向上」、2年次は「就職意欲の向上」、3年次は「社会性の向上」を目標

トセンターから総合教育研究機構に移行されるにともない、それまで全学的な初年次教育がなかった本学において、総合教育研究機構が中心となり、「教養演習Ⅰ」を全学的な初年次教育科目として実施することが可能となった。これに伴い、それまでの「教養演習Ⅰ」のプログラムを大幅に変更し、「成長意欲を高める」ことを目標としたプログラム⁸を作り、その中に「自主的に学ぶ」回を1コマ設け、そこで「ノートのとり方」を入れることとなった⁹。「教養演習Ⅰ」は、総合教育科目の1つとして位置づけられ、選択科目の位置づけとなっているが、全学的な初年次教育ということで、教育的指導により、全学部1回生全員に受講させている。これをもって、栄養学部だけでなく、全学部の1回生に「ノートのとり方」の講義を実施することが可能となったのである¹⁰。

1.1.4 2008年のノート（『ノート本』）ブームと「ノート大賞」

2008年には、太田あや著『東大合格者のノートは美しい』の出版をきっかけに、世間では空前のノートブームが起り、以来、さまざまな『ノート本』が出版されてきた。このブームを受けて、本学でも、2009年には、神戸新聞、大学教育新聞、FM宝塚で、「甲子園大学ノート大賞」が取り上げられることになった。

1.2 講義「ノートを取る」の内容

「スタディ・スキル系」初年次教育のテキストは2006年をピークにかなりの数出版され、学生が大学で学ぶうえで必要なスタディ・スキルの1つとして「ノートをとる」ということが取り上げられているが、ほとんどが「ノートをとる」ということが前提として書かれている。

このような中、1983年に、斎藤喜門著『受講ノートの録り方 大学・短大で学ぶ人のために』が出版され、さらに、そこでは「なぜノートを録るのか」（『ノートを取る意味』）という根本的な問題から掘り起こして書かれている¹¹ということは驚きに値する。

西川の講義でも、「なぜノートを録るのか」「どうしてノートを録ることはたいせつなのか」という根本的なことを重視し、まずは、「ノートを取る」という行為が、大学生としての『自主的な学び』の体现の一つであること、そして、「ノートを取る」ことは「理解を深める」ことにほかならず、したがって、ノートをしっかり録ることによって成績も上がる（逆に、しっかりとノートを録らないといい成績は取れない）ということを学生たちに示し、学生たちをノートを録る気持ちにさせることを大事にしている。

2008年度から初年次教育科目の中で1年生全員に「ノートを取る」（自主的に学ぶ）ということについて話をすることが可能になったものの、1コマしか充てられていないため、教員が、時々板書しながら、主として口頭で講義する「板書型¹²」の講義のノートの録り方しか紹介できず、また、実際にどういうノートがよいノートなのか、という見本の紹介も、この講義のホームページに掲載するにとどまっている¹³。

2. 「ノート大賞」の募集および応募

2006年度の総合教育研究機構の発足とともに、学生の自主的な学びをサポートする企画として始まった「甲子園大学ノート大賞」について、まずは、学生への募集のしかたと応募状況について見ていきたい。

2.1 募集方法

初めて「ノート大賞」という企画を知ることになる1年生に対しては、「教養演習Ⅰ」の授業の「ノートを取る」（自

にプログラムを作成し、「段階的キャリア教育」を実施している。

⁸ 西川他「『学生力』を高めるための『教養演習Ⅰ』（4）」『甲子園大学紀要第39号』（2012年）参照。

⁹ 「教養演習Ⅰ」は総合教育研究機構全教員で分担しているが、この回については、西川が1人で担当。

¹⁰ 「ノートの取り方（授業の受け方）」としては1回の開講となったが、「高校生から大学生へ」という内容については、「教養演習Ⅰ」の別の回でも話す機会を設けている。

¹¹ 斎藤氏は、ノートを録る最も基本的な意味・機能を「知識・情報の収集とその収集したものの記録」とし、「自己の学習史である」「集中力を養う」「理解力・思考力・想像力につながる」「書写力を身に付ける」ことをノートを録る効果として挙げている。

¹² 教員の口頭での説明が中心となって講義が行われるもの。他に「パワーポイント主体型」「プリント主体型」「教科書主体型」の講義に分けることができる。

¹³ 西川著『図解 栄養士・管理栄養士をめざす人の文章術ハンドブックーノート、レポート、手紙・メールから、履歴書・エントリーシート、卒論までー』（2011年、化学同人）では、「板書主体型」「パワーポイント主体型」「プリント主体型」「教科書主体型」の4つの講義スタイルごとにノートの録り方のポイントとノートの見本を挙げている。

主的に学ぶ)の回の終わりに『募集要項』(図1,2)の配布とともに「ノート大賞」についての説明が担当者の西川によってなされる。2年生、3年生については、必修科目の時間を少しもらって告知し、1~3年生については全員に直接、エントリーシート(応募用紙)付きの『募集要領』を配布し、告知するようにしている。また、並行して、大学ホームページの学生掲示板でも告知し、学内には『募集要項』の内容を抜粋したポスターも掲示している。

応募する場合、学生は、前期授業開始から約3週間以内に実施された授業1コマ分のノートをカラーコピーし¹⁴、エントリーシートとともに提出する¹⁵。応募対象とする「ノート」は、大学ノートやルーズリーフに講義内容をまとめたものに限らず、教科書、プリント、および、パワーポイントをプリントアウトしたものへの書き込みも「ノート」とする。これは、学年が上がるにつれて、「板書主体型」よりも「パワーポイント主体型」や「教科書型」、「プリント型」の授業が増えるためでもある。

エントリーシートには、自身がノートを録るにあたって工夫した点について5点まで記入し、その目的とともにPRする(図1右)。これは、学生たちに「ノートをとる」ということを意識化してもらいたいというのが一番の目的だが、審査(評価)する側としては、どこまでが教員が板書した内容で、どこからが学生が自分で書き加えたものかわかりにくいので、この点を明確にし、できるだけ公平な評価をしたいためでもある。

また、第6回までは、学生に配布する「ノート大賞」のお知らせは、エントリーシートを付けたものだけ(図1)であったが、第7回は、「ノート大賞」への応募を促すためと、ノートを録ることの大切さを伝えるために、

(図1)

(図2)

¹⁴ カラーコピーは総合教育研究機構の事務員が大学のコピー機でとる。

¹⁵ 第3回から同じ科目は1作品のみ、第6回から1人2作品までのみと、応募に制限を付けた。

ノート大賞の説明とともに、「ノートをとることの意義」や「ノート大賞に応募することの意味」についても言及した文を掲載した（図2）。

2.2 応募状況

これまでの学生の応募状況は、（表1）のようになっており、応募者が急増した第5回を除いては毎年20名前後の応募数である。（表2）は、応募者の学部別の内訳である。

第5回が急増したのは、栄養学部の1年生の応募が多いことが大きな要因である¹⁶。この学年は、ステップアップ講座への申し込み人数も過去最多であり、何かに挑戦する雰囲気が強い学年だと思われる。毎回「ノート大賞」への応募が栄養学部に偏っているのは、栄養学部の学生の人数が他学部よりも多いということに加え、ステップアップ講座など他の企画においても栄養学部の学生の参加が多く、栄養学部の学生のほうがさまざまな企画への参加に対して積極的だということもあるが、「ノート大賞」においては、絵が多く入った、見た目にきれいな作品が受賞することが多かったという過去の経緯から、「絵がきれいなノートでないとダメ」という認識が他学部の学生に広がっていることも他学部の学生の応募が少ない大きな要因となっていると思われる。

3. 「ノート大賞」の審査

次に、応募された作品について、どのように審査されるのかを見ていく。

3.1 審査方法

第5回までは全作品について1回の審査で受賞作品を決めていたが、第6回からは、1次審査である程度作品を絞った後、2次審査で最終決定することとした。また、1回目の審査では、審査員全員で全作品を審査することとしているが、第5回だけは作品数が多かったため、審査員と作品を3つに分けて審査した。審査期間は、1次審査は1週間、2次審査は2週間としている。

3.2 審査員

審査には、「ノート大賞」の企画運営部署である総合教育研究機構の教員に加え、全学的な行事ということで、

（表1）過去7回の「ノート大賞」の応募数と応募作品数

	応募者数（人）	作品数
第1回（2006年度）	12	15
第2回（2007年度）	15	18
第3回（2008年度）	22	49
第4回（2009年度）	22	32
第5回（2010年度）	62	75
第6回（2011年度）	27	28
第7回（2012年度）	20	27

（表2）「ノート大賞」応募者の学部・学年別内訳

（人）

学部	栄養				現代経営				人文（心理）				その他	
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	留学生	聴講生
第1回	6		1		3						2			
第2回	6	1	4						1		2			1
第3回	12	4		2	1							2		1
第4回	12	5			2				3					
第5回	34	16	6			1					2		2	1
第6回	17	8	1						1					
第7回	11	6	2											

¹⁶ 栄養学部の2年生が多いのは、第4回に1年生の時に応募した学生がほとんど再応募したためである。

学長、各学部の学部長をはじめ、教務委員会の協力を得て、教務部長、各学部教務委員長に指定審査員として協力してもらっている。第5回までは指定審査員全員で全作品を審査していたが、第6回からは、1次審査は総合教育研究機構の教員だけで行い、ある程度絞り込み、学長を始めとする審査員の先生方には2次審査から参加してもらうこととした。

また、第6回には、応募学生も指定審査員に加えることとした。これは応募学生にも他の学生のノートを見て学んでほしいという教育的効果を期待してのことであった。また、より多くの教職員に「ノート大賞」に関心を持ってもらいたいということから、2次審査には指定審査員以外の教職員にも有志の形で審査に加わってもらうこととした。

第7回には、1次審査は、第6回同様、総合教育研究機構教員のみで行ったが、2次審査には、指定審査員およびその有志の教職員に加え、学生については、応募学生ではなく、応募学生以外の学生たちに有志の形で審査員に加わってもらうことにした。これは、応募学生以外の学生にも「ノート大賞」に関心を持ってもらうためである。

3.3 審査基準

審査員には審査基準を示した所定の「審査票」に記入し、提出してもらう。第1、2回は、①字の読みやすさ、②全体の見やすさ、③自分で工夫している点がきちんと反映されているか、④授業の流れや要点がわかりやすいか、の4項目を審査基準とし、それぞれ5点満点で評価してもらうとともに、これとは別に「最強のノート」を選んでもらい、その理由とともに書いてもらった。

第3、4、5回は、第1、2回の基準①②を1つにまとめ、①全体が見やすく書けているか（字の読みやすさ、レイアウトなど）とし、②授業の概要、流れ、要点などがわかるように書かれているか、③自分工夫している点は妥当なものか、それがきちんとノートに反映されているか、④自由裁量点、の4項目について、それぞれ4点満点で評価してもらった。また、これらに加え、「最強のノート」を選び、その理由とともに書いてもらうのはそれまでと同じとした。

第6回は、1次審査は、第5回までの①から④までの評価ポイントは同じだが、それらを総合して10点満点で評価することとした。「最強のノート」の選出とその理由の記入はそのままである。

第7回は、見た目にきれいなノートが高く評価されることを避けるために、①講義内容の理解が深まるようなノートになっているか、②読み返した時に講義内容を思い出せるノートになっているか、の2項目に関して、各5点満点で評価してもらった。「最強のノート」の選出とその理由の記入は従来どおりである。また、ノートだけを見て、見た目にきれいなノートに高い評価を付けるのではなく、講義内容の理解が深まるように学生が工夫しているノートが評価されるように、エントリーシートに書かれていることを重視するように注意を促した。

3.4 投票方法

2次審査に進んだ作品は、学生や教職員の出入りが多い場所を選び、食堂前、学生ホール、総合教育研究機構の3箇所に掲示した。投票箱は紛失防止のため、総合教育研究機構の掲示場所1箇所とした。

投票は、第1回から6回までは全て用紙に記入し、投票箱に提出してもらった。第7回は、梶木が投票システムを作り、2次審査の学生審査員は、用紙に加え、インターネットでの投票もできるようにした。指定審査員は用紙で投票してもらったが、指定審査員以外の教職員はインターネット上での投票に限定した。これに伴い、2次審査の対象ノートは、PDFファイルにし、インターネット上でも閲覧できるようにした。

3.5 指定審査員以外の投票結果

第6回は、1次審査で4作品に絞り、2次審査を行った。2次審査員の指定審査員以外で審査員に加わってくれた教職員は、教員6名、職員24名の計32名で、予想以上に教員が少なかったことは残念だったが、反対に予想以上に職員の参加が多かったのは喜ばしいことであった。

第7回は、1次審査員で7作品を選出し、2次審査を実施したが、指定審査員の他に審査に参加してくれた学生は34名、教員は28名、職員は14名の計76名だった。2次審査に加わってくれた学生、教職員が第6回より増えたことはよかったが、こちらの期待より学生と教職員の参加が少なかったのは残念だった。また、学生審査員34名のうち、用紙での提出は12名、インターネットでの提出は22名であり、インターネットでも投票できるように

したことは投票数の増加に効果があったと思われる。

4. 教育的効果

ここでは、学生たちの自主的な学びをサポートする企画として実施されている「ノート大賞」が学生たちに与えている教育的効果について見ていきたい。

4.1 対応募学生

4.1.1 表彰

「ノート大賞」に応募した学生については、提出したノートを評価し、表彰した。

第4回までは、応募者が20名前後だったこともあり、受賞者として名まえが掲示されるということが学生たちの自尊感情を高めるであろうという教育的効果を期待し、全員に何らかの賞を授与していたが、「応募すれば賞をもらえる」という風潮が広まってきたため、応募者がかなり多くて、全員に賞を授与することが不可能になったのを機に、第5回からは受賞者を絞ることにした。(表3)がこれまでの、応募者に対する受賞者の数である。

審査の結果をまとめ、総合教育研究機構の機構企画委員会で原案を作り、総合教育研究機構の教員協議会で受賞者を決定し、表彰式で発表し、表彰を行う。表彰式には、受賞者、総合教育研究機構教員、学長はじめ指定審査員は全員出席とし、その他の学生、教職員にも参加を呼びかけている。

受賞者には、学長はじめ指定審査員から学長名の賞状¹⁷と副賞が授与される。また、受賞者以外の応募学生全員にも記念品が贈られる¹⁸。

4.1.2 コメントの返却

当初は全員に賞を授与していたため、「提出すれば受賞できる」という好ましくない風潮が広まり、理解を深めるようにノートを工夫して書くことを意識せずにもかく応募する、という学生も出てきたため、第4回から、「ノート大賞」の運営組織である機構企画委員会のメンバーが応募学生全員にコメントを書いて、表彰式の時に返却することとした。第7回は、我々、増田、上村、前場、西川の4人で分担し、ひとりひとりにコメントを付けて返したが、従来よりもコメントを書く目的とルールを明確にした。コメントには、よいところとともに改善の可能性のあるところも必ず記入することとし、その後のノートテイキングに生かし、自主的な学びを発展させてくれることを期待して書くことを心掛けた。その結果、応募学生へのアンケートでは、「コメントがもらえてよかった。コメントをこれからのノートに生かしたい」と書いている学生がそれまでよりも多数見られ、コメントをつけて返すことによる教育的効果が見られた。

4.1.3 ノートテイキングに対する意識の向上

「ノート大賞」に応募した学生にとっては、「ノートをとる意識が高まった」「目的をもってノートをとるようになった」などの感想にも見られるように、「ノート大賞」に応募したことをきっかけに「ノートをとる」ことに対する意識と自主的な学びへの態度の変化が見られた。

(表3) 「ノート大賞」の受賞者数

	受賞者数 (人)	応募者数 (人)
第1回 (2006年度)	12	12
第2回 (2007年度)	15	15
第3回 (2008年度)	22	22
第4回 (2009年度)	22	22
第5回 (2010年度)	10	62
第6回 (2011年度)	8	27
第7回 (2012年度)	8	20

¹⁷ この「ノート大賞」は全学的な学生支援行事であり、ここで受賞した学生はそのことを履歴書に書けるよう、その証明としても学長名の賞状を発行している。

¹⁸ 応募学生へのアンケートでは、この記念品を目的に応募したという学生も少なくないようである。

「熱心に授業に取り組むようになった」「集中力がアップし、授業中に理解が深まった」という、ノートをとる本来の目的が達成できている感想もあり、さらには、「何かにチャレンジすることで自分に自信がついた」という感想もあり、授業だけでなく、他のことに対して自主的に頑張っていこうという気持ちが感じられた学生もいた。

また、「ノート大賞」に応募するにあたり、総合教育研究機構に掲示してある前年度の優秀作品（3点程度）とエントリーシート、審査員からのコメントや、大学ホームページで公開している過去3年間の優秀作品・エントリーシート・コメントや、2次審査に選出された応募学生の作品などを見ることで、「他の人のノートが参考になった」「他の人のノートが知れるよい機会になった」「自分もより工夫してノートをとろうと思った」という意見が多数見られた。他の学生のノートを見て、参考にするという機会を与えることは自主的な学びを促すうえで有効だといえる。

毎回、「ノート大賞」の応募者のリピーターが少なくない（第7回の2年生応募者8名中7名が1年生の時に応募している）ことも、ノートをとることに対する熱心な態度が定着していることの現われだと思われる。

4.2 対応募学生以外の学生

総合教育研究機構では、過去の「ノート大賞」の優秀作品とエントリーシート、審査員のコメントを掲示しているので、「ノート大賞」に応募しない学生たちのなかにもそれらを見に来る学生たちは少なくない。

また、第7回からは「ノート大賞」に応募しない学生たちにも審査に加わってもらうことで、まだ決して多いとはいえないが、以前よりは多くの学生を巻き込めたのではないかと思う。

しかしながら、応募学生とともに審査に加わった学生も決して多いとはいえず、もっと学生たちを巻き込む工夫が必要なことはいうまでもない。

5. 今後の課題（改善の可能性）

教養演習Ⅰで「ノートをとる」という講義や、「ノート大賞」という企画を実施することで、『ノートをとることが大切だ』ということが本学の学生たちに浸透してきていることは期待できるが、「ノート大賞」をさらに盛り上げ、『自主的に学ぶ』ことの大切さとすばらしさを伝え、身に着けさせていくうえで、参加者を増やすことは必要だと考える。

最後に、今後、このような『自主的な学び』を後押しする企画を発展させていくうえでの課題と改善の可能性について述べる。

5.1 参加学生の増加にむけて

前述のように、学生数800名弱に対して毎年20名程度の応募というのは決して多くはなく、この企画が全学生を巻き込んだものになっているとは言えない状況である。

応募学生へのアンケートでは、ノート大賞に応募したきっかけを、「教員や友人に勧められた」とする学生が少なくない。教員側から見ていると、ノートをよく書けていても、自分自身では自信がなく、他人に押されると応募する、という学生が少なくないようである。このことを考えると、学生の自薦には限界があるため、教員推薦、学生推薦の応募枠を作り、推薦したノートが受賞した場合は、推薦者にも記念品を贈呈する、というふうにしてもいいかもしれない。

また、一番学生数が多いにしても、応募学生のほとんどが栄養学部で占められているというのは問題だといえる。

前述したように、心理学部の学生に応募しない理由を聞いたところ、「図（絵）のある、見た目にきれいなノートが高得点を取るから」ということを挙げる学生が少なくなかった。また、第3回あたりから栄養学部の応募が多くなったため、受賞者も栄養学部がほとんどになり、応募者の内訳をしらない学生たちは結果だけ見て、「どうせ応募しても栄養学部の学生が受賞するから」というふうにいる学生が多くなっており、悪循環になっているともいえる。

確かに、評価する側も、「図（絵）のある、見た目にきれいなノート」に高得点をつける傾向があることは否めない。さらに、その図は、教員が板書したものや、テキストに掲載されているもので、学生が自分で書き加えたものではない場合も多い。学生が工夫した点を重視し、正しく評価するために、第7回には、「エントリーシートを重視する」

ことを明記したが、必ずしもこのことが周知徹底されていたとはいえない。しかしながら、第7回には、初めて英語のノートが上位で入賞し、図の多い栄養学部の専門科目のノートが上位を占めていたこれまでとは異なる結果が出たことは好ましいことであり、来年度には、心理学部の学生も英語や自身の専門科目で応募してくれることを期待したい。

また、どこまでが教員が板書したものでどこからが自身が書き加えたものかがわからないため、この点はエントリーシートから判断することになるが、必ずしもそのことがわかるようにエントリーシートに書かれているとは限らず、適正な評価はきわめて困難だといえる。このことを解消するためには、やはり、授業担当教員にも見てもらい、評価してもらうことが必要だといえる。

5.2 参加学生の増加に向けて

第7回には、応募学生以外の学生に2次審査の審査員を募集した。2次審査に参加した学生数は、これらが期待していたよりはるかに少なかったが、応募学生以外の学生が「ノート大賞」に関われたことは大きな収穫だったといえよう。

今後さらに参加学生数を増やすためには、5.1で述べたように、学生推薦枠を設けるなどの工夫が必要であろう。

5.3 教員の巻き込み

「ノート大賞」を名実ともに大学全体の行事にするためには学部教員の協力は欠かせない。学部教員の協力を得るために、5.1で述べたような「教員推薦」枠を作ることは有効かもしれない。また、5.1でも述べたように、まずは応募ノートの授業担当教員に審査に協力してもらうとともに、「ノートが録りやすい」講義は、「要点がわかりやすい」「いい講義」ということで、応募ノートの多い授業担当教員や、受賞ノートの授業担当教員は表彰するなどして、うまくFDともつなげられるとよいだろう。

5.4 投票方法の改善

第7回は、学生のほうは、投票方法を用紙とインターネットと併用とし、インターネットで投票した学生のほうが多かったが、逆に、投票方法をインターネットだけとした教職員のほうでは、第6回よりも職員の投票数が減ってしまった。これは、ノートの展示場所ではなく、わざわざ改めてパソコンで投票することがめんどろだった可能性がある。次回からは教職員も用紙でも投票できるようにしたほうがよいだろう。

また、ノートの展示場所は、学内に3か所設けたものの、投票場所はそのうちの1か所としたことも投票数を減らした要因の可能性が大である。今回は、各展示場所で投票できるようにしたいと思う。

5.5 「レポート大賞」の併設

今回学生の応募が少なかったこともあり、総合教育研究機構以外の学部教員の何人かに意見を求めてみたところ、「ただ教員の話をもとめるノートよりも、自分の考えを言葉で表現させたほうがいい」や、「レポートを書かせてほしい」という意見が複数聞かれた。

学部の性質や時間の関係上、統一テーマでレポートを書かせるのは難しいかもしれないが、学部ごとに推薦してもらい、レポートの部を作って表彰することは不可能でないと思う。

ノートの場合、どうしても1、2回生に限られてしまうが、レポートならば、全学年提出することが可能になるだろう。

ノート大賞に、教員推薦、学生推薦を加えたり、レポート大賞を併設したりすれば、さらに教員や学生の参加が見込まれ、「ノート大賞」が全学的な行事になっていくことが期待できる。

「ノート大賞」が本当の意味で全学的な行事となるように、また、学生たちの自主的な学びの試金石となるよう、学生、教職員の意見を取り入れながら、今後も改善を加え、進化発展させていきたいと思う。

Effects of acetic acid and vinegar on the hydrolysis of inulin and dahlia tubers

Hiroshi Nishise, Tomoe Ajiki, Nami Kakimoto, Urara Ohsumi, Ayaka Teshima

(Received October 31, 2012)

Fructose from inulin in acetic acid solution or commercial vinegar was assayed after the hydrolysis with autoclaving. More than 80% of inulin was hydrolyzed at lower than pH3.3 under the described conditions. On the other hand, starch from rice powder (Johshin-ko) in the same solutions was scarcely hydrolyzed between at pH2.2 and 4.6. Fructose from dahlia tubers increased linearly after boiling with 50% vinegar solution.

Nishitani-area in north Takarazuka city is a place of dahlia-tubers production¹⁾. Many tubers out of the commercial standard were abandoned annually. For the utilization of inulin contained in unused dahlia tubers, the hydrolysis of inulin and formation of fructose with acetic acid or vinegar were investigated from the chemical and cookery standpoints.

Materials and Methods

Materials

Inulin (Wako Pure Chemical) was used. Vinegar (Kokumotsu-su, 500mL, Mitsukan, Handa, Aichi) and rice powder (Johshin-ko, (200 g, Sanada-Kyoyamashiroya, Kyoto) were commercial products and purchased. Dahlia tubers were provided kindly from Kamisasori-engeikumiai (Takarazuka). They were grated with a radish grater for the hydrolysis of inulin

Hydrolysis of inulin and starch

One percent inulin solution (0.05 g/5 mL) in acetic acid or vinegar diluted at various rate, in a test tube (1.8 x 18 cm) with a silicon sponge plug, was autoclaved with a autoclave (121°C, 20 min, ES-215, Tomy).

Assay of fructose and glucose

Fructose and glucose were assayed with commercial kits, F-kit, D-glucose/fructose (Roche), and Glucose CII -Test-Wako (Wako Pure Chemical), respectively. Standard errors were less than 10% of the means of three experiments.

Results and Discussion

Dilution of acetic acid and vinegar and pH of each solutions

Theoretical values of pH of acetic acid solution were calculated from the following formula²⁾.

$$[\text{H}^+]^3 + k_a [\text{H}^+]^2 - (\text{C} \cdot k_a + k_w) [\text{H}^+] - k_a \cdot k_w = 0$$

C, acetic acid concentration

k_w, Ionic product of water

k_a, 2.75 × 10⁻⁵ mol/L

Vinegar contained 4.2% acetic acid (w/v), regarded as 0.7 M, was diluted to ranging from 70 μM to 350 mM. Each pH values of dilutions measured at 25°C were shown in Table 1.

Data in figures were plotted on the base of pHs measured.

Hydrolysis of inulin

The hydrolysis of 10% inulin solution was carried out with 0.01 M buffer. Acetate buffer (pH4~5), MES buffer (pH6), potassium phosphate buffer (pH7) and Tris buffer (pH8) were used, respectively. The

hydrolysis of inulin occurred scarcely, at pH5 and over (Fig. 1). At under pH5, fructose was formed and increased.

Acetic acid solution and vinegar, which were diluted to provide the range of under pH5, were used for the hydrolysis. At pH3.3 and under, over 80% of inulin (1%) was hydrolyzed to form fructose. The hydrolysis with two solutions showed similar results (Fig. 2 and 3).

Hydrolysis of starch

To compare with inulin, starch in rice powder was hydrolyzed under same conditions as inulin. Glucose from starch with acetic acid solutions (pH2.2~pH4.6) was scarcely produced (about 0.2g/L, Fig. 4).

In the case of vinegar, glucose was detected at pH3.3 under, with and without starch (Fig. 5). Major amount of glucose originate from vinegar containing about 10% glucose. Subtracted amount of glucose (the amount in a vinegar solution with starch minus that of in the vinegar solution without starch), derived from Johshin-ko only, were in low level, and shown in Fig. 6.

Hydrolysis of inulin in dahlia tubers

Grated dahlia tubers were suspended in the same buffers (pH4~8) as in the case of inulin hydrolysis to 10% (wet weight/v, 1 g/10 mL) and autoclaved. Before the autoclaving, the suspension contained 0.54 g/L fructose (5.4 mg/1g of grated tubers), originally. Fructose formed by the hydrolysis increased at under pH5 as the results of purified inulin. At pH4, 1.2 g/L fructose (11.5 mg/1 g of grated tubers) was produced. But, pH6 and over, fructose decreased to less than 0.5 g/L. the decrease was thought to be derived from no hydrolysis and caramelization or amino-carbonyl reaction of fructose, which was contained in grated tubers.

One gram of grated dahlia tubers was suspended in 4mL of 37.5% vinegar solution. The suspension (25% wet w/v) showed pH3.8, which may be derived from buffering action of grated tubers. After autoclaving, fructose increased from 0.96 g/L to 35.0 g/L (from 3.9 mg/1g of grated tubers to 140 mg/g).

Table 1 pHs of acetic acid solution and vinegar solution

Acetic acid		Theoretical pH	pH measured	
			Acetic acid soln.	Vinegar
1	M	2.28	2.16	–
700	mM	2.36	2.26	2.62
350	mM	2.51	2.43	2.68
70	mM	2.86	2.81	2.86
10	mM	3.29	3.26	3.28
700	μ M	3.90	3.92	3.90
70	μ M	4.49	4.58	4.58

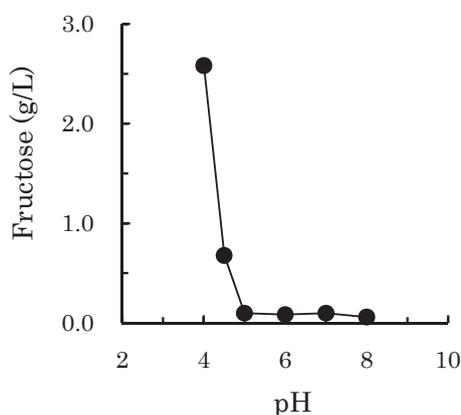


Fig. 1 Fructose from inulin after autoclaving with various buffers

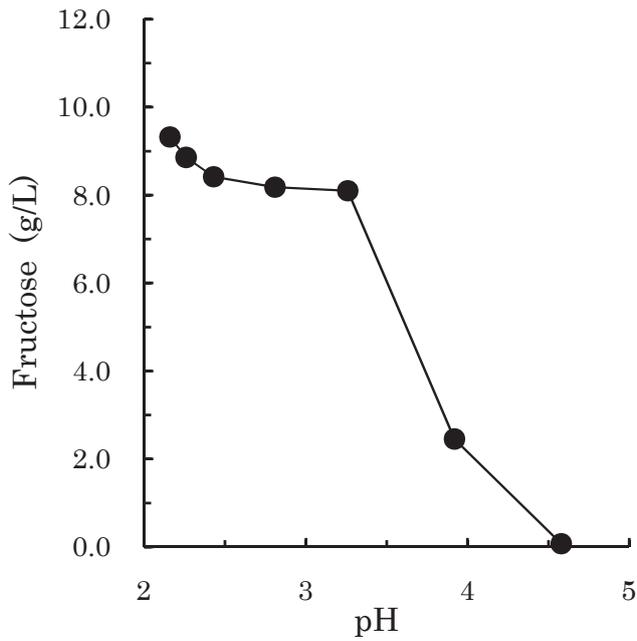


Fig. 2 Fructose from inulin after autoclaving with acetic acid solutions

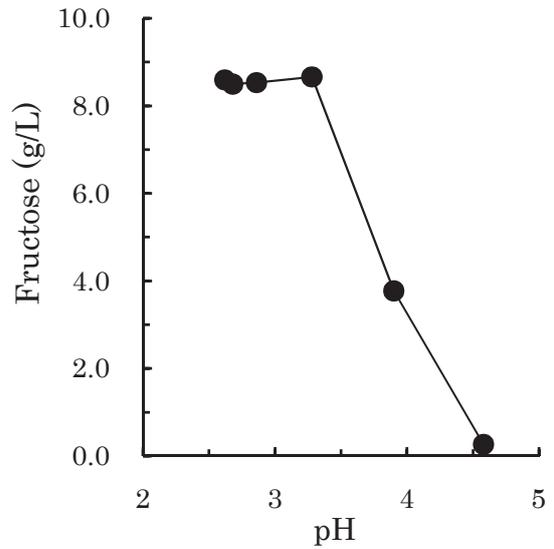


Fig. 3 Fructose from inulin after autoclaving with vinegar solution

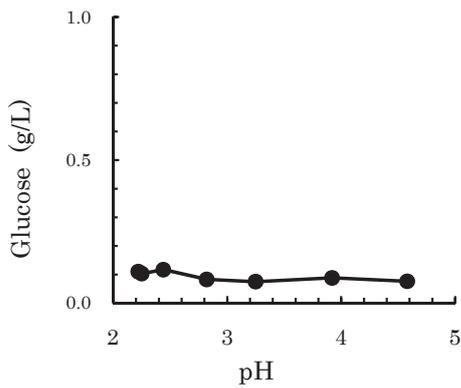
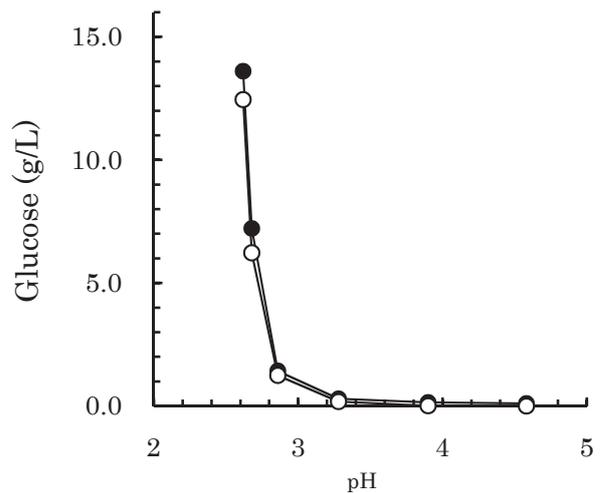


Fig. 4 Glucose from Johshin-ko after autoclaving with acetic acid solutions



● Vinegar+Johshin-ko ○ Vinegar only

Fig. 5 Glucose from Johshin-ko with vinegar solution after autoclaving

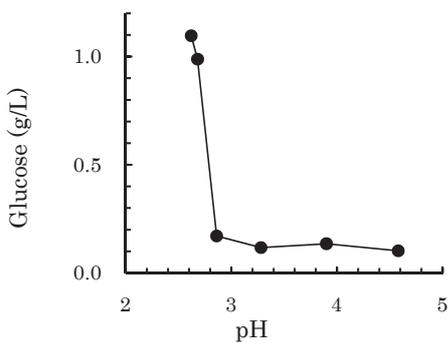


Fig. 6 Subtracted amount of glucose from Johshin-ko only with vinegar solution after autoclaving

Hydrolysis of inulin in dahlia tubers by boiling

Five gram of grated dahlia tubers was suspended to 10% (5g/50mL) in tap water and 50% vinegar solution, which showed pH6.8 and 3.8, respectively. The suspension was boiled gently.

Though the amount of fructose in tap water suspension increased slightly, that in vinegar solution did

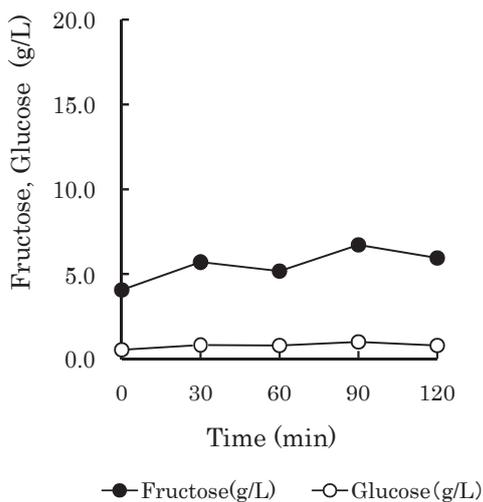


Fig. 7 Fructose and glucose from dahlia tuber after boiling with tap water

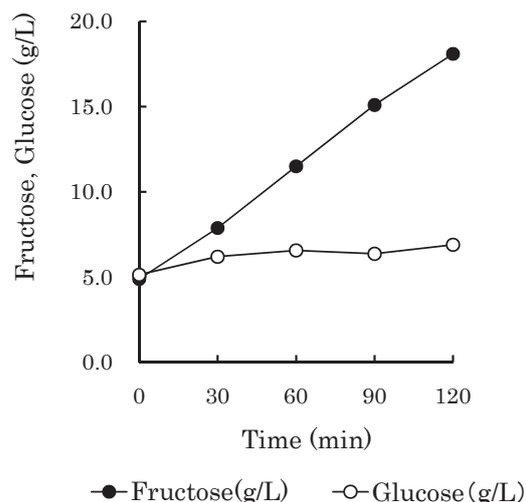


Fig. 8 Fructose and glucose from dahlia tuber after boiling with vinegar solution

linearly (Fig. 7 and 8). The amount of glucose, which derived from vinegar mainly, increased more slightly.

There are two ways for the utilization of inulin. If it is used as polymer, functional content of foods, the extraction and purification of inulin be should carried out at alkaline range to avoid hydrolysis. On the other hand, hydrolysis of inulin for fructose formation needs acidic conditions. For example, in the process of brewing tequila, agave being free of leaves, was cut to pieces, adjusted to pH4.5 and autoclaved for 18h at 110°C³⁾.

Though reports on the hydrolysis of inulin with acetic acid and vinegar solution are scarce, the results of this report responded to the easiness of its hydrolysis at acidic pH range and are able to be applied to the increase of sweetness in cooking of foods containing inulin.

Acknowledgment

We are grateful to Kamisasori-engeikumiai of Takarazuka city, for provision of dahlia tubers.

References

- 1) S. Noguchi and A. Yamamoto, *Nihon Shokuhin Kogakkaishi*, **53**, 308-311 (2006).
- 2) "Bunsekikagaku", H. Ohhashi et.al., p56-61, Snkyoshuppan (1992).
- 3) M. C. Cedeno, *Crit. Rev. Biotechnol.*, **15**, 1-11 (1995).

The Coherence of Gothic Conventions 試訳(2)

比名 和子訳

平成24年10月31日受理

A Translation of *The Coherence of Gothic Conventions* (2)

Trans. Kazuko Hina

Here is an attempt to translate *The Coherence of Gothic Conventions* (1980) by Eve Kosofsky Sedgwick, who is one of the most influential post-feminism critics in the United States. Her masterpieces include *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (1985), *Epistemology of the Closet* (1990) and *Tendencies* (1993). Some of her books have been translated into Japanese and published in Japan, whereas there is no Japanese version of her first book, *The Coherence of Gothic Conventions*. It is quite interesting that she began her career with analyzing English Gothic novels. Her writings are well-known for such difficulty and complexity that this attempt will be challenging.

キーワード: E・K・セジウィック (E. K. Sedgwick)、ゴシック小説 (Gothic novels)、ポストフェミニズム (post-feminism)

はじめに

イヴ・K・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) は、アメリカにおいてクィア理論の原動力とみなされ、多大な影響力を及ぼしている気鋭のポストフェミニズム批評家である。意欲的で大胆かつ緻密な優れた論文を次々と発表しており、主な著書には、*Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (1985)、*Epistemology of the Closet* (1990)、*Tendencies* (1993) などがある。そのいくつかは邦訳が出版されている。*The Coherence of Gothic Conventions* (1980) はセジウィックの最初の著作だが、ホモソーシャル、ホモセクシュアルといった視点から研究を行っているセジウィックが、最初に論じたのがゴシック小説であるという点は、極めて興味深い。(Between Menにおいても、第5章はゴシック小説の分析にあてられている。) セジウィックの論文は用語も文体も難解で、必ずしも読みやすいとは言えないが、彼女の研究の出発点であるゴシック研究の邦訳を試みたい。

第1章 ゴシックの伝統的手法とその構造 (2)

ゴシック小説と同じように影響力のある近代の文学形式のなかで、ゴシック小説ほどあまねく慣習的であるような形式は確かにないだろう。ゴシック小説だということが (例えばその題名から判断して) わかると、驚くほど正確にその内容を予測できる。その道具立ての重要な特色はよく知られている。陰鬱な廃墟、荒涼とした風景、カトリックの、あるいは封建的な社会。ヒロインの恐れおののく心情や恋人の性急な行動も手に取るようにわかる。年老いた暴君が身もすくむような鋭い視線でヒロインを投獄し、凌辱あるいは殺そうとする。ゴシック小説の形式についての知識もある。不連続で複雑に入り組み、おそらく入れ子構造の物語や次々と変わる複数の語り手が織り込まれ、秘密の文書の発見や捏造された身の上話といった枠構造がある。中心のプロットに関係があろうとなかろうと、登場人物の関心事なら何でも書き込まれるということも察しがつく。描かれているのは、司祭制度や修道院、眠りのような死のような状態、地下空間や生きたままの埋葬、ダブルのモチーフ、隠された家系の絆の露見、語りと絵画との密接な関係、近親相姦の可能性、不自然なこだまや沈黙、判読できない文書、言語に絶する状況、罪や恥辱の不快きわまる影響、夜の闇に包まれた風景や夢、過去からの幻影、ファウストやさまよえるユダヤ人のような人物、市民の暴動や火事、納骨堂や精神病院。ゴシック小説の中心的出来事は、このよ

うな少数のテーマを描く以上のことはなく、最も統一のとれたゴシック小説でさえ、これらのほとんどを含んでいる。

ゴシック小説のこのようなおきまりの手法には、いくつか顕著な点がある。まず第一点は、歴史的にゴシック小説が達成してきた形式はもちろんひとつの公式に充分還元できるということである。たぶん例えばまた別の小説のサブジャンルは、数十の語句で詳述できるかもしれないが、そのようなリストではそれらの語句は非常に異なった状態にあるだろう。「罪や恥辱の不快きわまる影響」をヴィクトリア朝中期の小説に適用すると、それは、オースティン・フェヴェラル卿、ルーシー・スノウ、グエンドレン・ハーレスといった多彩な登場人物に対する人物評の集約となるだろう。ゴシック小説に適用すると、モンターニヤスケドーニヤスケモーリのような登場人物が自らの罪や恥辱のためにいかに毒され不快な思いをしているかを饒舌に述懐するある特定の場面のみを示すことだろう。ゴシック小説おきまりの語句は、多少なりとも特定の常套的な場面のレベルで作用する。ヴィクトリア朝中期の人物や、18世紀や現代小説の悪漢を描写するためだけに便利な語句を使って、ゴシック小説を書くことができるだろう。

第二の点は、ゴシック手法内で可能な強弱や焦点のつけ方には幅があり、ゴシック的手法の適応範囲の狭さを補っていることである。小説にはヒーローとヒロインがいるのが当然とされているが、作者が一方だけに注目していることもあれば、ときにはどちらかが全く無視されている場合もある。『ユードルフォの謎』や『イギリスの老男爵』はその極端な例である。また、ほとんどいつも世代も同じなら人相も同じというゴシック小説おきまりの悪漢は、クレアラ・リーヴのラヴェル卿のように、プロットのために急造された添え物にすぎない場合もあれば、アンプロジオのように、その小説に不可欠の生き生きとした中心人物となっている場合もある。主要な出来事が非常によく似たこのような小説は、また予測不能でもある。なぜなら、喜劇的結末であれ、悲劇的結末であれ、またその混合であれ、小説で使い果たされたように思われるどんな結末であろうと、すべて可能だからである。しかしながら、極めて根本的なところで、その強弱や焦点のつけ方が異なっている。筋の運びがスピーディな軽い娯楽読物である『オトランド城』、これみよがしに同性愛を顕示するような『修道士』、緻密で悲惨な物語『ユードルフォの謎』、心理的に切迫しているかのような『放浪者メルモス』。これらの作品はすべて恐怖の快楽に基づく美学を志向しているのだが、読者には極めて異なった印象を残し、それぞれの作者の多彩な才能を示している。

これらの作家たちのように優れた多様な才能が、狭義に定義される常套的な手法の狭い範囲にどうやって収まるのだろうか。あるいは質問の仕方を変えると、なぜこのようなおきまりの手法がゴシック小説におしなべて見出されるのだろうか。なぜ長い時間をかけてこれらの手法のそれぞれがゴシック小説の公式から切り離されて、他の小説の伝統に応用できるようになったのだろうか。

批評がこの問いに答えようとすればするほど、ゴシックの常套的な手法のなかから内面を表現する空間的メタファーを特権化することになるだろう。そのメタファーが人間の自己を表象するのだと考え、ゴシックの他の手法をそのメタファーによって読み取る。例えばマサオ・ミヨシ（三好将夫）は、ゴシックは「極めて個人的な意味で人間の内面の葛藤を」テーマとして探究するとして評価する。ハイルマンは、「新たな次元」に向けて「感情に身を投じる」ために「究極的にまた執拗に心の奥底で、非理性的なるものを認める」と、ゴシックを評価する。このような批評言語が概観している心理的モデルは、慣習や社会的禁忌という表層、つまり「理性的なるもの」が、原初的な存在の深い中心的根源、「非理性的なるもの」を、覆い隠し抑圧しているというモデルである。「非理性的なるもの」は自己の中心であり、外に発露されるし、また発露すべきであるのだ。自己の本質的な場は「内奥」であるとするその当然の結果として、批評家は、ゴシック小説の表面的な部分、場当たりの筋、陳腐な舞台装置や背景といった皮相さに、極度に苛立つことになる。

この章での私の課題は、主要な、どのゴシック的手法も、ときにはこの心理的モデルによって深まる場合がないわけではないが、基本的にはこのモデルに頼らないという点で首尾一貫していると示すことである。このような小説には、構造の点でもテーマ上でも、大きく重要な一群のある特定の手法がみられる。場当たりのでありながら同時に本質的でも象徴的でもある手法で、特定の空間的モデルを共有している。このモデルは心理的解釈と相容れないというわけではないが、心理的解釈なしでも際立っていて、はっきりと識別できる。このモデルの構成要素はしばしば、小説における虚構の「自己」の同一延長上にあるわけではなく、またこのモデルが、質的にも情緒的にも情景描写の点でも互いに異なっている領域を、必ずしもはっきりと区別するわけでもない。この一

群の常套的手法は、「深層」を描くがゆえにゴシックには価値があると評価しようとする批評の中心となっているけれども、この点においてでさえ、焦点をずらすと、最も強いエネルギーが表層に備わっているとわかるだろう。

これを論じるための第一段階は、これまでの批評で暗黙のうちにちりりとほのめかすように用いられてきた空間的モデルを体系化することだろう。概観すると、小説における虚構の「自己」がゴシック的手法の対象となっているとき、その自己は次のように空間化されていると言えるだろう。自己の存在する場所は、通常なら当然接近できるはずのものから幾重にも隔てられている。それらは、自分自身の過去であったり、細部にわたる家族の歴史であったり、また文字通り生きてまま埋葬されたような場合には、自由に呼吸できる空気であったりするだろう。あるいは恋人であったり、死のような眠りで身動きできないのであれば、周りの生活すべてということもあるだろう。しかしながら、そのように隔絶された状況でも、何か（現在という時間、意識の流れ、夢、感覚そのもの）が内側で進行していくのと同時に、不可能な手の届かないところでは、それと密接に関連し合うものが進行しているのだ。主要な3つの要素（内に存在するもの、外に存在するもの、内と外を隔てるもの）は極めて多様な装いをしているが、関係の条件は不変である。内なる自己と何であろうと外に在るものとは、適切で自然な形で必然的に係り合っているが、それは突然その関係を保つことが不可能となるような関係性である。内側の生活と外側の生活は分断を余儀なくされ、協力し合う存在ではなく敵対関係となり、意思疎通できる関係ではなくどこまでも交わることのない平行の存在となる。これは一瞬にして起こるかもしれないが、構造の根本的な再編であり、単独であるはずの存在が二重となる。そのように切り離された要素が再統一されるために辿らなければならない距離、最終的にそれらを最初のひとつの存在へと回復することの不可能性こそが、ゴシック小説の最も特徴的な原動力なのである。ゴシック小説における最悪の暴力、最強の魔術、一瞬にして身体が麻痺するよう不気味さ、これらは、例えば地下礼拝場での異端審問の最中や、悪夢で為すすべもない状態の時に起きるのではない。自分を閉じ込めている壁が破られる瞬間にこそ喚起されるのだ。専制的な力によって幽閉された人々を本来の自由へと解放する火事や地震、反乱は、囚われた人の内や外で進行するもの以上に著しく暴力的である。同様に、何気ない夢から覚めてそれが本当だとわかる瞬間こそが、どんな悪夢よりも怖いのだ。自己と本来自己に付属するはずのものを隔てる障害はどのような原因によっても生じるし、また何の理由もなく起きる場合もある。しかし、異常なほど人を脅かす暴力や魔術、あるいはその両方が、分断された存在を再び結び合わせる可能性もあるのだ。

ところがこの章のもうひとつの目的は、自己が中心だとみなす考えも、内と外との関係の予定調和も、最終的にはゴシックのテキストにおいては蝕まれていると示すことである。

普通なら接近できるはずなのに、突然、不可解に、恣意的に思われるほどに、何重にも妨害されて接近不可能になる状況を描くゴシック的手法のなかで、物語を語るうえでの困難さは、明らかに構造的に最も重要である。この困難さは小説のあらゆる段階で生ずる。完璧に読み取れる原稿や中断されることのない語りはまれである。本の半ばで新しい語り手が登場して新たな話を始め、長々と中断されることなくひとりの語り手が最後まで物語を構築する小説はさらにまれである。オリジナルとされる原稿の由来や古さにまつわる込み入った話や偽名が使われることもなく、作者自らが書き記した本というのはそのなかでも最もまれである。「私たちは、タペストリーで飾られた部屋の中、消えかきそうになるランプの光で、主筋の話と同じぐらいばかばかしい何十もの挿話を読んだ」と、ウォルター・スコットは苦々しく記している。しかしそれでもこのような小説は『トリストラム・シャンディ』ではありえず、その主眼点は語りが一貫性を保てないということにあるわけではない。それはウォーターゲートの訴訟記録に、より似ているかもしれない。物語は直線的には進まず、あいまいに語られ、時間の感覚は歪み、言語を直接的に使用することに対する一種の絶望を伴っている。

どんなに単純だとしても、語ることでできないもの、例えば「言葉にできない恐怖」、がほとんどのページにも出現する。このような小説では、「語るができない」や「言葉にできない」は、必ずどちらか選択を強いられる形容詞なのだ。より広義のレベルでは、ゴシック小説は、罪のように、当然語りにくいことを題材にする。しかし、克服できるかできないかわからない妨害のためではなく、しばしば制度による絶対的な禁忌や規範ゆえに、その困難さを描くのだ。例えば、告解は、『修道士』や『イタリア人』（「黒衣修道僧の告解」という副題がつけられている）のような作品の核心である。なぜならそれによって語ることでできないものは何かという問いが、相対的というより絶対的になるからだ。告解者はすべてを話さなければならず、聴罪司祭はどんなことも他言はしないだろう。異端審問では、その犠牲者は、一方では「真実をあらいざらい話す」と誓わなければならないが、他方では「見聞きしたことは何事も永遠に秘匿」しなければならない。秘密厳守が何よりも優先される

修道院や女子修道院は、すべての小説において、同様の役割をしている。これらの小説の登場人物は互いに秘密を打ち明けたいのか、あるいは打ち明けるべきなのかと心配する必要はめったになく、ただ告解が可能か不可能か、強制されているのか禁止されているのかさえ心配すればよい。

プロットにいくらかの意外性はあるにしても、それは語ることでできないものが語られないままであるという緊張感を持続するためではない。例えば『放浪者メルモス』において読者は、他の登場人物と同じように、早い段階で、メルモスの複雑な過去の問題は何らかの形で自分の魂を悪魔に売り渡したと推測する。にもかかわらず、それについて書かれた原稿のページは、「色褪せ、消えかかって、毀損箇所があり」、肝心な時に「全く判読できない」（第3章）。物語の語り手は絶えず痙攣をおこす。その問題を記述した他の原稿はスペイン語で書かれていて、しかもギリシャ文字が使われている。「あまりに恐怖と不敬に満ちているので聞くに堪えず、むしろその条件に従ったほうが罪が軽いぐらいだ」（第28章）といった文言で述べられている。

メルモスについて語る心構えができた人でさえ、いざとなると話すのはどうてい不可能だと悟る。オラヴィーダ神父は、自分の周囲の人々が推測しているにちがいないことを口に出す。

「その冷たい汗や、痙攣する手足によって、彼の正体はわかる」とオラヴィーダ神父は言われて、汗をぬぐいました。十字を切ろうとされましたが、できませんでした。声を荒げましたが、明らかに話すのがますます困難になるようでした。「…彼の正体はわかっている。彼にこの場を去るように命ずる。その人物は——その人物は——」と言いながら、神父様は前屈みになり、激怒と嫌悪と恐怖とが入り混じったぎょつとするような表情をして、そのイギリス人を睨みつけました。神父様のその言葉で客たちは全員立ち上がり、全体が奇妙なふたつのグループに分かれました。ひとつのグループは驚いた客たちで、全員が寄り集まって、「誰だ、何者だ」と繰り返し言いつのりました。もう一方は微動だにしないイギリス人と、この人物を指差しているオラヴィーダ神父で、神父様は指さした状態のままその場に倒れると、亡くなってしまいました。（第3章）

また同じように、モンサーダが異端審問官にメルモスについて語る場面で、

審問官のひとり、席に着いたまま震えながら（ほの暗い灯りに拡大されて私の向かい側の壁に投影された影は、まるで身体が麻痺した巨人のような姿でしたが）、私になにか質問しようとしていました。彼が口をきくと、その喉から空ろな音が響き、その眼は眼窩でぐるりと上を向いて、他の部屋に運ばれる前に、卒中の発作を起こして死んでしまいました。（第11章）

それぞれ突然の死の場面における場面描写の要素に注目すべきである。「ふたつの奇妙なグループ」、「拡大されて」、「投影された」「まるで身体が麻痺した巨人のような姿」。（オラヴィーダ神父の物語は、実際このようなクライマックスの場面へとつながる一連の描写によって語られている。）こうした絵画的イメージの機能は、身体麻痺による死亡の核心となる固定状態、不動の感覚を強調するためである。オラヴィーダ神父と異端審問官は、謎に包まれたメルモスがまとう沈黙の壁を打ち破ろうとして、逆に身動きならない沈黙の状態へと暴力的に押し戻される。この場面で、語ることでできないものとは、どんな障壁もあるはずのないところに存在する個人間の障壁なのだ。言語は、人と人之間を移動して、身体的心理的分断を和らげてくれる媒体にほかならない。しかし一旦障壁ができてしまうと、暴力という手段でしか打ち破ることはできず、分断はむしろ深まる。ふたりの司祭の麻痺による死は、彼らを絵画や彫像に譬えることを可能にするのだが、言葉を発することのできない無力な孤立の絶望的なカリカチュアとなっている。メルモスは、彼の人生に触れるすべての人々をそのような孤立へと追いやるのだ。

語ることでできないものに対するマチューリンの関心は、メルモスにまつわる現象だけに限られるというわけではない。悪魔との契約が唯一の語ることでできないものではないのだ。共有されているが、共有されているとは認識されない、つまりいわばひとりひとりが個々に知っている不幸な知識は、本来なら連帯し合っている人々を、取り返しのつかない二重の存在へと陥れる。モンサーダと親を殺した案内人は、修道院から脱出しようとして、このような体験をする。

そうして私たちは落し戸の下で震えながら立っていました。互いに自分の考えを相手にあえて囁こうとはせず、意思疎通のできない絶望感に襲われていました。一緒にいることを余儀なくされながら、不愉快な仲を強制されているがゆえに、自分が感じる恐怖を互いに伝え合うことさえできない者にとっては、おそらくこれ以上の過酷な呪いはなかったでしょう。互いの心臓の動悸は聞こえるのですが、「あなたの鼓動に共鳴して、わたしの心臓もどきどきしている。」とはあえて言わないのです。(第9章)

明らかにこの場面での重大な喪失とは、まさしく言語の喪失である。言語はあたかも塞がれてしまった内と外をつなぐ安全弁であるかのように、あらゆる知識は、たとえ共有されていても、孤立し、ひそやかで、危険である。地下道を進むまた別の場面で、この絶望の響きはより大きい。

私たちはそのようにして横たわり、あえて互いに口をきこうとはしませんでした。絶望以外の何を話すことができたでしょう。相手の絶望をさらに深めようと誰がするでしょう。他の人もすでに感じているとわかっている恐怖、その恐怖を知っている人に対してさえ、話してしまうことでさらに恐ろしさがつるのではないかと危ぶまずにはいられない恐怖、おそらく今までこれ以上ぞっとする感覚を経験したことはありません。あらゆる意思の疎通が、語るに能わず、不可能で、絶望的な場においては、交流を希求する魂の焼けつくような渴望に比べると、身体の渴望など無にも等しいのです。罪を宣告された靈魂は、最後の審判においてこのように感じるのでしょうか。受けるであろう苦しみはすべて知っているのに、もはや秘密でもない怖ろしい真実をあえて打ち明け合おうともせず、かえって絶望の底なしに深い沈黙がそれを秘密のように思わせてしまう。秘密は沈黙のままであるかぎり秘密なのです。言葉は、寡黙で目には見えない神に対する冒涇でしょう。最後の瞬間には神はその存在で我々を包んでくれます。(第8章)

意思疎通ができないことへの絶望を強調するだけでなく、黙示録を喚起するような地下でのこの場面は、断片的なモンサーダの来歴がウィリアム・ベックフォードによる『ヴァセック』の結末を連想させる。この小説は、強力なゴシック的影響力を及ぼした東洋風の物語である。カリフであるヴァセックとその妻ヌーロニハールは、エブリス宮の言い伝えられた財宝を手に入れるために、人や神のあらゆる許容事項を踏みこむ。一旦成功すると、ふたりは自分たちがピラネーシの牢獄のような地下にいることに気づく。周囲にはものも言わず永久に彷徨っている呪われた魂が群がり、各々眼をららんと光らせ、片手は業火で焼けるように熱い心臓に置かれている。ヴァセックとヌーロニハールは、自分たちもまた、沈黙したまま憎悪をこめて互いを見るようになるとは信じられない。しかしふたりの命運が尽きるとこれは即座に現実となる。その眼はららんと燃え、手は心臓に置かれて、そこから動かせなくなる。そうして地下での永遠に続く無言の放浪が始まる。「この不幸な者たちは、このうえなく凄まじい放心したような目つきで、後ずさりしました。ヴァセックはヌーロニハールの視線に激しい怒りと復讐だけを見て取りました。ヌーロニハールもまた、ヴァセックには嫌悪の情と絶望しかないのを知りました。」

ヴァセック、ヌーロニハール、その仲間の者たちは、疑問の余地なく閉じ込められている。ふたりは、地上の日光と地下の自分たちとの間に財宝のすべてを抱えたまま、まず最初に圧迫するような地下の洞窟に埋められ、次には自分自身の中に閉じ込められて、普通の空を全く見ることができないのと同じように、互いの姿が目に入らない。ふたりの内面の動きは以前と全く変わらないのに、内面が外に出ていくことがないので、自らを消費し貪る業火となってしまふ。エブリス宮の多数の人々は皆同じ苦痛を味わっているが、モンサーダと案内人が感じた恐怖のように、その苦痛はひとりひとりが孤立したまま共有されている。他者とのつながりが無い孤立した個人はその苦痛の特徴というだけでなく、その状況自体が苦痛なのである。

このような事例でははっきりと、またほかの場合には暗黙のうちに、語るができないという障壁は、質的に異なる空間だけではなく、その内容や固有の性質に遡求しても区別できない空間をも分断させる。モンサーダと案内人、ヴァセックとヌーロニハールは、同じ知識を共有している。二者間の障壁の絶対性は、恣意性を伴っている。いずれにせよ個々の空間の間にはそれを隔てるものがあるという点で恣意的なのだ。もし障壁が存在するはずであるなら、それは絶対的であるはずだし、また障壁が実際に存在するのなら、その配置は恣意的であるにちがいない。

この最後の推論は、語るることのできないものについてのこれらの事例においては、不明瞭である。なぜなら私が図式的に「空間」と呼んでいるものは、このような事例では、登場人物と共存しており、小説において個々の

登場人物を区別することは常套的だと認め難い。しかしながら語りの流れを他のやり方で区別すると、より容易に構造化が選択の結果だとみなせるだろう。『放浪者メルモス』の有名な入れ子構造の語りを例に挙げよう。この作品は、ふたつの点で、4重の語りとなっている。多かれ少なかれ物語はすべて小説の流れのなかで語られているけれども、それぞれの物語の区切りは、語るができないものに備わる分断する力を、象徴している。実際はそうではないけれども、この小説は、ひとつの連続する語りの形式を採用することもできただろう。そのような語りには、登場人物はある状況に直面しても、その前にたぶん同じ状況で他の登場人物が体験して徐々に蓄積された知識を最初から受け継ぐことができるだろう。一方、これまで例として挙げた4つの小説のような語りでは、テイラー・スツールが指摘するように、「繰り返される場面で、主人公たちはほとんどいつも互いに似かよっていて、しばしば互いのダブルである」。また、プロットも密接なパラレルとなっているが、にもかかわらず様々な手法で厳格に区別される。例えば、ほろほろに破れた原稿、修道院での秘密、家系にかけられた呪いを伝達できないというタブー、「メルモス」という言葉で痙攣をおこして倒れたり、(ユダヤ人なので) 奇妙な言葉を話し、発見されるのを恐れて地下に住んだりする語り手。もし4重の語りには、どの物語も似かよっていてパラレルであり、『放浪者メルモス』における真実が、入れ子構造の一番内側でも一番外側でも、同じように強烈であったり明快であったりするのなら、形式のもつ力の焦点は、明らかに、このような奇妙な障壁にあるにちがいない。どのようにしてその障壁が自然に生じ、増加するのか、またその障壁を突破するには、どのような究極の魔術や暴力が必要なのだろうか。

もし入れ子構造になった語り、言語や主題による「語ることをできないもの」という定番のモチーフを極めて広範囲に構造的に応用したものであるとするなら、生きながらの埋葬という定番のモチーフもよく似た関係にある。後にド・クインシーがゴシックから援用し幅広く応用した「Xの中のX」という常套語句は、ある特定の空間関係(内部、「中の」)を示すと同時に、分離した空間が同じであることをも示している。ゴシック小説お気に入りの常套的な罰である生きながらの埋葬は、埋葬された人物が外の活動を失うことが恐怖なのではなく(死んで埋葬された場合は確かにそれが恐怖なのだが)、突然余計なこととなったパラレルな活動が継続していることが恐怖なのである。モンサーダの場合、修道院の地下納骨所に監禁されて普通の時間を剥奪されると、新しい大雑把な意思伝達の方法が生じる。

私は1時間は60分、1分は60秒と計算しました。修道院の大時計と同じぐらい正確に時を刻み、監禁されている時間も、解放されて自由でいる時間も、計れると考え始めました。だから座って60を数えたのですが、大時計より数えるのが速いのではないかという疑念が、いつも生じたものです。それから自分が時計であったらと願いました。何の感情も抱かず、時間の接近を急がせる動機も感じなくて済むように。次には数えるのが遅いのではないかと思いました。眠りがしばしばこの作業を中断させるのです(たぶん自分でそう望んだのでしょう)が、目覚めると、直ちに再びその作業を開始しました。こうして私は敷物に座って、振り子のように振動し、時間を数え計っていました。一方時は、太陽が昇り沈む…という甘美な日常を私には与えてくれませんでした。もっと長くこの生活を続けていたら、読んだことのあるあの白痴になってしまったことでしょう。その白痴は、時計を観察するのを習慣にしていたため、その仕組みをあまりにもうまく模倣したので、時計が壊れたときにも、これ以上望めないほど忠実に時を刻んだのでした。

(『放浪者メルモス』第6章)

現代自己心理学における「共感」の探究

安村 直己

平成24年10月31日受理

On the Exploration of “Empathy” in Modern Self Psychology

Naoki Yasumura

要 旨

本論の目的は、現代自己心理学において探究されている、治療者と患者の共感的相互交流プロセスの研究を概観し、そうした視点から「共感」の双方向的なあり方とその治療作用を臨床的に検討することである。現代の自己心理学は、これまでの伝統的精神分析の「一方向一者心理学」的な視点から「双方向二者心理学」的な視点へと大きく舵を切っている。そこでは、これまでの乳幼児研究の成果を取り入れながら、治療者と患者の相互交流を徹底的に双方向的な視点から検討しており、共感的な相互交流プロセスを、治療者と患者の間で共構築されるものと捉えている。そこで、乳幼児研究から発展したこれらの現代自己心理学の新しい視点を概観し、最後に筆者自身の症例の治療プロセスを現代自己心理学の視点から検討して、それらの臨床的な有効性と共感の治療作用について考察を試みた。

キーワード：共感、双方向のプロセス、自己調整、相互交流調整、エクスプリシットな水準、インプリシットな水準、断絶と修復のプロセス

ABSTRACT

The purpose of this paper is to review some study of empathic interaction between therapists and patients in modern self psychology and examine clinically the structure and form of empathy and its therapeutic meaning from such new perspective. It seems that modern self psychologists change from one-way one-person psychology to bidirectional two-person psychology which regards an empathic interaction as the co-constructed bidirectional process between therapists and patients. I would review some new study in modern self psychology linked with infant research. At last I would present my psychotherapy case and re-examine of the treatment process from the viewpoint of modern self psychology.

Keywords：empathy, bidirectional process, self regulation, interactive regulation, explicit level, implicit level, disruption-restoration process

1. はじめに

ハインツ・コフト Heinz Kohut亡き後、現代の自己心理学は大きな発展の道を辿っている。それはフロイト Freud亡き後、これまでの伝統的な精神分析が拠って立ってきた、科学的客観性に基づいた正しい解釈を治療者が患者に投与することによって患者を治療するという自然科学的治療の発想が根本的に見直され、現代の精神分析が、治療者の主観と患者の主観が複雑に相互交流する間主観的世界の様相を双方向から徹底的に解明し、その中に治療作用を見出す「関係精神分析」relational psychoanalysisへと発展していこうとしている動きと歩を一にしている。このような流れの中で、当時の精神分析の枠組みを批判して提唱されたコフトの自己心理学理論もまた、伝統的精神分析の枠組みから完全には脱却していないとして批判されているのである。

現代アメリカ精神分析の動向に詳しい富樫（2009）は、そうした経緯を、コフト理論は今日の関係精神分析家から「一方向一者心理学」だとの批判を受けていると述べている。確かに、コフト理論にある「双極性の自己の構造」や、最適の欲求不満を治療者が患者に与える中で自己対象機能の内化が生じるという「変容性内在

化」の概念などは、治療者から患者への影響のみを考えている点で「一方向」的であり、また、患者ひとりの心が孤立して存在し、その中で精神力動が完結しているかのような伝統的精神分析の「一者心理学」の視点からも脱却できていない面があるように思われる。その一方で、コフォートの「自己-自己対象関係」の概念には、関係精神分析の「双方向二者心理学的」な視点の萌芽が見られ、コフォートの先見性や自己心理学理論の潜在的な発展可能性が指摘されている。しかし、残念ながらそのような視点がコフォート存命中、それ以上展開されることはなかったのである。

こうしたコフォートへの批判を受けて、現代の自己心理学者たちは「双方向二者心理学的自己心理学」へと大きく舵を切っている。富樫（2012）によると、現代自己心理学は双方向二者心理学の視点をさらに洗練させ、治療場面での治療者と患者の関係性を相互交流システムとして捉える「自己心理学的システム理論」へと展開しており、その主な流れとしては、バコール Bacalによる「特異性理論」の流れ、ビービー Beebeやラックマン Lachmannらによる「乳幼児研究に基づく二者関係のシステム理論」の流れ、リヒテンバーグ Lichtenbergによる「動機づけシステム理論」の流れ、フォサーギ Fosshageによる「複合理論」の流れ、ストロロウ Stolorowやアトウッド Atwood、オレンジ Orangeなどによる「間主観性理論」の流れ、そしてコバーン Cobarnによる「複雑性理論」の流れなどが存在している。

筆者は、心理臨床実践を始めてから今日に至るまで「共感」にこだわり続けてきた。自身の臨床経験から心理療法の治療作用の本質に「共感」が関係していることを確信しつつも、その「共感」や「共感的理解」の成り立ちや治療機序を明確に説明することが容易ではなく、また、実際の心理臨床実践においても「共感」の難しさをめぐって悪戦苦闘する日々を重ねてきたからである。そうした中で、精神分析家で「共感」を重視したコフォートの自己心理学に出会い、心理療法において「共感」がもつ本質的な意味の重要性（Kohut, 1978）が自分自身の中で理論的にも明確になり、「共感」と「健康な自己愛の発達」との深い関連性についても理解を深めることができた。しかし、コフォート亡き後の現代自己心理学では、さらに「双方向二者心理学」的な視点から治療者と患者の緊密な相互交流プロセスに新たな光が当てられ、「共感」の構造や治療作用についてより精緻な探究が進められている。

そこで本論文では、この「共感的コミュニケーション」ともいえる緊密な相互交流プロセスについての現代自己心理学派による最新の研究として、特に、乳幼児研究から発展したビービーやラックマンらによる研究を概観し、それらの臨床的意味を検討する。そして最後に、心理療法の自験例を提示し、その治療プロセスを現代自己心理学の視点から臨床的に再検討することを通して、臨床場面における「共感」の治療的意味とそのあり方についてさらに考えてみたいと思う。

2. 乳幼児研究と大人の心理療法をつなぐ共感的相互交流の研究

ロジャース Rogers以来、「共感」とは、治療者が患者に共感するものと考えられてきたと思われる。コフォートでさえ、「共感」は治療者が患者から精神的なデータを収集するための手段であるとし（Kohut, 1977）、晩年には、治療者が患者を癒す治療作用としての共感に言及した（Kohut, 1984）。しかし、前述したように、双方向二者心理学の視点を大幅に取り入れた現代自己心理学では、「共感」は治療者と患者の間に生じる、極めて双方向的で緊密な相互交流プロセスとして捉えられている。つまり、共感とは、治療者の心と患者の心の間に立ち現われる、間主観的な相互作用に他ならないとの視点である。

この共感の捉え方は、筆者の臨床経験からも実感に近いものがある。クライアントの語りに治療者が深い共感を憶えるとき、それは、治療者からクライアントに向かう一方だけのものということとはありえない。治療者とクライアントの間には、両者からの強く、深い共鳴が生じているはずである。また、治療者のクライアントへの共感的理解は、クライアントからも同様に共感的に理解されることがなければ、そもそも「共感的理解」とは言えないだろう。このように、治療者とクライアントの間には、双方向からの「共感的相互交流」が起こっていると考えられる。

この二者間の緊密な相互交流の研究は、今日、乳児と養育者の実際の相互交流の実証的な研究によって飛躍的な進展を見せている。そして、さらに近年、そうした乳幼児研究の知見を大人の精神分析的な心理療法に応用し、精神分析的な治療における治療作用について、さらに解明していこうとする動きが、現代自己心理学派の研究者たちの中に起こっている。そこでは、これまで必ずしも明確ではなかった「共感」の非言語的な相互交流的側面や「共感的理解」の成り立ち、そして「共感」のもつ治療作用などが、さまざまな視点から検証・探究されてお

り、非常に興味深いものがある。

その主な研究者には、現代乳幼児研究の先駆者的存在であるスターン Sternやエムディ Emdeを始めとして、メルゾフ Melzoff、トラバーセン Treverthen、ビービー Beebe、ノブロックKnoblauch、ラックマン Lachmann、ラストイン Rustin、ソーター Sorter、ジャフ jaffe、パリー Pally、ガーストマンGerstman、コーンCohn、トロニック Tronickなど、数多くの研究者が挙げられる。そして、幸運にも近年、彼らの最近の研究のいくつかがわが国でも邦訳され、刊行されるに至った。その主なものが、2008年に丸田俊彦らが訳出した、ビービーやノブローチらによる共著「乳児研究から大人の精神療法へ－間主観性さまざま－」（“Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment” 2005.）と、同年、富樫公一らが訳出した、ビービーとラックマンの共著「乳児研究と成人の精神分析－共構築され続ける相互交流の理論－」（“Infant Research and Adult Treatment: Co-constructing Interactions” 2002）である。

ちなみに、ビービー女史は、コロンビア大学医学部の臨床教授で、精神分析家であると同時に、スターンの指導の下で研究を始めた新鋭の乳幼児研究者であり、ラックマンは、現代自己心理学派の重鎮の精神分析家として著名である。ラックマンはビービーの精神分析臨床における指導者だった関係もあって、彼がビービーの乳幼児研究に強い興味を示したことから共同研究が実現したという。また、ノブロックは、精神分析的な主観性研究所のスーパーヴァイザーで精神分析家であり、患者と分析家の精神分析的対話に「音楽」のメタファーを使った興味深い理論を展開している（Knoblauch, 2000/2009）。そこで、邦訳されたこれらの著書を主な参考として、乳幼児研究の成果を大人の精神分析的な心理療法に応用し、それらを統合しようとしている現代自己心理学の研究を概観してみることにしたい。

1) 現代乳幼児研究における「相互交流プロセス」の解明

乳幼児精神保健の領域で、近年、目覚ましい発展を見せている乳幼児研究は、乳児と養育者の実際の相互交流の様子を直接観察し、録画ビデオで記録した映像を詳細に解析するマイクロ・アナリシスという徹底した客観的実証研究の手法によって行なわれている。そして、それらの観察データの解析結果から、これまで想定されていなかったような、さまざまな乳児の潜在能力や、心の発達の起源となるような乳児と養育者との相互交流メカニズムが、次々と明らかになってきた。それらは実に驚きに値する。

例えば、乳児と養育者の間で生じている交流は、それぞれが相手の動きを常に予測し、先取りし合いながら行なわれており、両者は相手の行動が出る前から、それを予測した自分の行動をすでに開始しているという事実である（Beebe, 2002/2008）。これは0.25秒分割の映像の解析で初めて明らかになったことだという。このことは、乳児と養育者の交流は、一方の動きに他方が反応して起こっているようなものではなく、本人たちも自覚していない瞬間瞬間に、まさに二人の心と心の上に浮上して、どちらからともなく交わされていることを示している。

スターンは、心の起源を、こうした双方向的な相互交流それ自体の中に見出し、二者間で共構築され続ける相互交流プロセスのことを「二つの心の間のもの」という意味で「間主観性 intersubjectivity」として概念化し、乳幼児の間主観的な自己感の発達を詳細に研究している（Stern, 1985）。これまで哲学や現象学の領域で研究され、難解な概念だった「間主観性」概念が、こうした乳児と養育者の実際の行動連鎖という枠組みから「間主観的相互交流プロセス」として明確化され、具体的な輪郭が与えられたことの意義は大きいといえよう。

さらに、スターンと共に乳幼児研究を進めてきたビービーは、これまでの研究を踏襲しながら、この二者間の間主観的な相互交流には、エクスプリシットexplicitな水準のコミュニケーションと、インプリシットimplicitな水準のコミュニケーションが存在していることを指摘する（Beebe, 2005/2008）。「エクスプリシット」は「明白な」や「明示的な」、「判然とした」などと訳され、「インプリシット」は「黙示的な」や「暗黙の」などと訳されるが、エクスプリシットな水準のコミュニケーションとは、はっきりと明示され、意識された、言語的 verbalで、記述的 declarative、象徴的 symbolicな水準のコミュニケーションであり、インプリシットな水準のコミュニケーションとは、目の表情や視線の動き、まばたき、顔の表情の動きや顔の筋肉のこわばり、声の調子や声のトーン、リズム、ピッチ、ビート、呼吸や息づかい、身体の動き、ジェスチャー、身体の緊張やくつろぎ具合など、意識されず、非言語的 nonverbal、手続き的 proceduralに進行している、非意識 nonconsciousの行為－知覚水準、暗黙水準のコミュニケーションのことを指している。そして、インプリシットな暗黙水準のコミュニケーションは、通常は意識されないまま交わされているが、そこに特別に意識を向ければ気づかれる可能性があり、伝統的な精神分析でいう「無意識」unconsciousとはまた異なる水準であることが指摘されている。そして、これら二つの

コミュニケーション水準で、二者間の相互交流のパターンは、双方向的に互いの「予測可能性」に基づいて、次第にオーガナイズされていくことになると考えられている。

そしてさらに、これら二つの水準のコミュニケーションによって交わされている二者間の相互交流が、双方向のプロセスの中でどのように生起しているのかについて、彼らは相互交流全体をひとつのシステムとして捉える「システム論」的な視点からさらに探究を進めている。そこで、彼らが二者間の相互交流を生み出す源となっている二つの調整機能として挙げているのが、「自己調整self regulationプロセス」と「相互交流調整interactive regulationプロセス」である。ちなみに、ビービーとラックマンの著書の監訳者である富樫は、このregulationを「調整」と訳すと、「整える」といった静的な語感が誤解を招くことを危惧し、「調整」に「制御」の意味を含ませた「調制」という造語を使って訳出している。しかし、本論文では、同音異義語は混乱を招きやすいことから、そのまま「調整」として記述する。しかし、いずれにしてもこの「調整」regulationにはポジティブな意味も静的なイメージもなく、あくまでも価値判断としては中立的で、良くも悪くも常に絶え間なく双方向的に生じているダイナミックな動的プロセスであることを、念頭に置いておくことが重要だろう。

そこでまず「自己調整プロセス」だが、それは交流している各パートナーが、自分自身の覚醒度 arousalと内的状態を調整 regulationしているプロセスを意味している。ビービーとラックマン（2002/2008）は、「生まれてからずっと自己調整は、覚醒の取り扱い、注意の維持、過剰刺激に直面して覚醒を弱める能力、そして、行動表出を抑える能力に関係する」としている。それは成人においては、自己の内的状態へのアクセスであり、内的状態の明確化、内的状態への関心、そして内的状態を使うための能力を含んでおり、そこではファンタジーや防衛、そして無意識的ファンタジーなども調整される。一方、「相互交流調整プロセス」は、パートナー同士の間で、一方の動きが他方の動きに影響を与えたり、影響を受けたりして、二人の交流が双方向的に調整されて起こっているプロセスを指している。そして、この「自己調整プロセス」と「相互交流調整プロセス」もまた、互いにバ

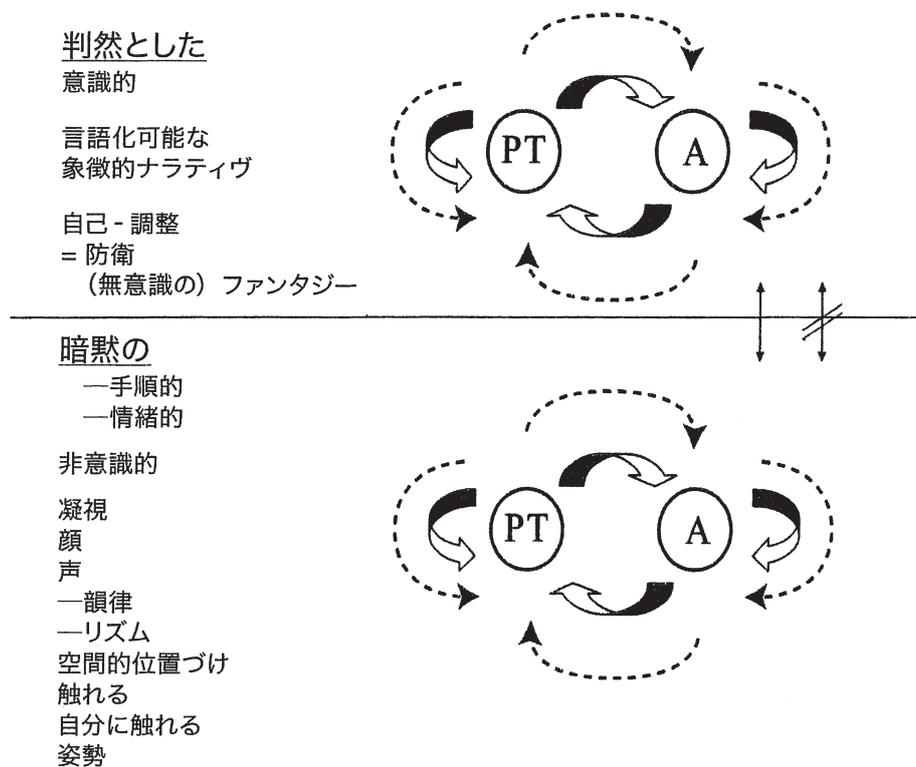


図1 判然としたプロセッシングと暗黙のプロセッシングを図解した、大人の治療における相互交流

矢印はパートナーとの間の予測可能性（「コーディネーション」あるいは「影響」）を示す。点線の矢印は予測可能性のパターンの歴史を示す。判然とした領域と暗黙の領域との間の矢印は、必要に応じて、暗黙のシステムと判然としたシステムは相互に翻訳可能であることを表している。二領域の間の矢印で打ち消されているものは、コミュニケーションが困難な場合に、この翻訳が破綻することを示している。

→現在の調整 調整プロセスの歴史
 (ビービーら (2008)「乳児研究から大人の精神療法へ」岩崎学術出版社より)

ランスを取りながら緊密に影響し合い、絶え間なく相互に調整され続けていると考えられているのである。それらを図示したものを（図1）に示す。

ここで彼らが何度も強調していることは、「自己調整プロセス」も「相互交流調整プロセス」も、どちらか一方だけが単独で機能することはありえないという点である。ビービーらは、そもそも「内的プロセス」と「関係的过程」を分けて考えることにも反対している。純粋な「内的プロセス」や「関係的过程」などは存在せず、それらは常に影響を及ぼし合い、表裏一体となって生じるからである。このように近年の乳幼児研究には、「双方向二者心理学」の視点が徹底して採用されていることが大きな特徴となっている。

2) 乳幼児研究の成果と精神分析療法の接点

こうした双方向的視点から捉えられる乳幼児と養育者の相互交流に関する研究は広範に渡っており、現在も多くの研究者たちによって実証研究が積み重ねられている。その中で彼らがこれまでずっと一貫して探究してきた共通のテーマとは、「人はいかにして相手の心の状態を感じとるのか」というテーマであるといえるだろう。それは「人はいかにして他者の主観的体験に入り込むのか」、あるいは「自己と他者の間で、いかにして主観的状态が共有されるのか」といった疑問にもつながるものであり、まさに「共感」のメカニズムに関係する主題なのである。

そして、現代乳幼児研究の数多くの研究データが共通して示唆していることは、以下のようなことなのである。つまり、相互交流の中で乳幼児と養育者は、そのいずれもが言葉や言語なしに、声のトーンや身体の動き、顔の表情などが変化する、その「タイミング」やその「形」formやその「強さ」といったインプリシットな形式的次元を介して、お互いに相手の活性化レベルの微細な変化を追いながら、それらに自分の活性化レベルをマッチさせ、相手の意図や感情状態を瞬時的に察知しており、また、それらがどのようにマッチングされていくかの予測の積み重ねが、内的な体験を根源的に組織化し、そこに意味を与える「オーガナイジング・プリンシプル」の形成につながっているのではないかと、という指摘である。そして、このことは、大人のパートナー同士が相互交流を通して相手の気持ちを感じ取り、共感していくメカニズムにも、そのまま当てはまるものとしているのである。

ここで、改めて「共感 empathy」の定義について確認しておきたい。「共感的理解」とは、概していえば、「相手の身になって感じ、考え、思うこと」である。したがって、基本的に「共感」は、意識的で認知的な過程がある程度伴った高次の機能として言及されてきたように思われる。また「共感」は、スターンが乳幼児研究において探究した「情動調律 affect attunement」とも異なるものとして捉えられてきた。スターンの「情動調律」は、ほとんど意識されず、自動的に起こる非意識の過程だからである。これまで乳幼児研究では、この情動調律がどのように生じているかを中心に、母子二者関係の緊密な相互交流の研究が進められてきたのである。

一方、コフト以来、臨床的に共感概念について探究し続けてきた現代自己心理学派の研究者たちは、近年、「共感」と「共感的理解」を明確に区別するようになってきている（Lackmann, 2008）。彼らは「共感」を、他者の立場に自分を置いて他者の感情を共有することによって、人と人を結びつけることを可能にする「感情的プロセス」と捉えており、発達的には、認知的、象徴的な要素が不可欠である「共感的理解」に至る前段階にあるものとしている。そして、スターンから始まる乳幼児研究において研究されてきた「情動調律」を中心とするインプリシットな相互交流の様式を「共感の前駆体 precursor of empathy」（Lackmann, 2008）、あるいは「原始的な共感」（Lee & Martin, 1991）として位置づけ、「共感の発達段階」を想定することで、「共感」の成り立ちをさらに精緻化しようとしている。このようにして近年、現代乳幼児研究と現代自己心理学は「情動調律」、「共感」、さらに「間主観性」といった領域を共通の研究領域とすることで結びつき、最早期の乳児と養育者の相互交流プロセスを探究する乳幼児研究の知見を精神分析的臨床実践に生かす視点からの研究が、今日、活発的に行なわれているのである。

それでは、数ある乳幼児研究の中で、特に大人の精神分析的な心理療法における共感的な相互交流と関連が深いと思われる、乳児の顔の表情の模倣の研究と、乳児と養育者のマッチングと愛着形成の研究について概観してみよう。

乳児が、早期から養育者の模倣をすることは以前から知られていたが、メルゾフ Melzoffが示した観察データは、驚くべきものであった。乳児は、誕生してから42分後には、成人モデルの顔の表情を模倣できることが明らかになったのである。これは乳児が、モデルの顔の中に見たものと、固有受容器的に自分の顔に感じるものの間

に、対応性を確立することができることを示しており、異なる感覚の間でマッチングを行ないながら、乳児はすでに内的状態と環境を対応させ、調整することができることが示されたのである。

他にも、顔の表情のマッチングに関する研究では、さまざまな観察実験データが示されている。例えば、デビットソン Davidsonとフォックス Foxは、生後10ヶ月までの乳児に、笑っている女優のビデオを見せると、乳児の脳は快感情のパターンを示し（左前頭葉の脳波賦活）、泣いている女優のビデオを見せると、乳児の脳は不快感情のパターンを示す（右前頭葉の脳波賦活）ことを明らかにした。この結果は、相手の情緒を単に知覚するだけで、知覚した人のなかに共鳴する情緒状態が創り出されることを示している。類似の実験は成人でも試みられており、そこでも、パートナーの表情にマッチングすることは、見た人のなかに似たような生理学的状態をつくり出す結果が示されている。これらの現象は、近年、神経生理学の領域で「ミラーニューロン・システム」が発見されたことで、脳科学的にもその妥当性が実証されてきており、興味深い。

このように人間が生まれた瞬間から、他者の状態の中に自分を見出したり、自分の中に他者の状態を再現することによって、間主観的な相互交流を始めていることは、精神分析的な心理療法の中でコフォートが注目したミラーリング mirroringの体験がいかに原初的でパワフルな体験であり、治療的にも重要であることを示唆するものだとはいえるだろう。こうした「あなたは私みたいだ」、あるいは「私はあなたみたいだ」と知覚する乳児の能力は、最早期において間主観性がどのようにオーガナイズされていくのかという最も重要なテーマに関連しているのである。

コフォート（1984）は、晩年に、三つ目の自己対象体験として「双子自己対象体験 Twinship selfobject experience」を提唱した。双子自己対象体験は、現代自己心理学では、自己対象体験の中で最も重要で基本的、根源的な自己対象現象として捉えられている（富樫，2011）。この双子自己対象ニードは、概していえば「自分が他の誰かと似ている」と体験することへのニードであり、双子自己対象ニードが満たされる体験は「自分は人間の中に存在する同じ人間だ」という最も人間として根本的な共感的体験となると考えられている。乳児と養育者のマッチングをめぐる再早期の緊密な相互交流体験は、こうした自己対象体験にもつながるものであることが考えられる。このように顔の表情を通したさまざまな模倣やマッチングは、対人的なコミュニケーションであると同時に、間主観的な心の創出に関係する根源的な自己対象体験であり、さまざまなレベルでの自己調整として機能しているのである。

今日、精神分析的な心理療法は、ほとんどが対面式で行なわれている。そこでは治療者と患者の間で、お互いの顔の表情や身体の動きなど、インプリシットな水準でのやり取りが活発に行なわれ、それらにお互いが大きな影響を受けていることは自明のことであろう。乳幼児研究が示すように、双方向からのさまざまなレベルのマッチングや、自己調整や相互交流調整によって、重要な感情的情報の伝達や共有が暗黙の水準で起こっているのである。しかし、これまでの伝統的精神分析のオリエンテーションを標榜する治療者は、治療者の中立性や客観性を維持しようとするあまり、自らの顔の表情をできるだけ変えないように抑制したり、時には無表情であろうとすらしてきたのではないと思われる。現代乳幼児研究の視点からは、こうした伝統的精神分析の治療者の態度は、治療的に重大な問題を孕んでいると考えられる。相互交流プロセスにおけるインプリシットな側面を排除することは実際には不可能なことであるが、その影響を無視しようとする治療者の姿勢は、極めて偏ったコミュニケーション・スタイルだと言わざるを得ないのである。

3) 乳幼児と養育者のマッチングをめぐる研究から見えてくるもの

次に、乳児と養育者のマッチングの研究について詳しく概観してみたい。それは、精神分析的な心理療法における治療者と患者の相互交流を考える上で、さらに重要な示唆を与えてくれるものと思われるからである。

ビービーら（Beebe, 2002/2008）は、母親と乳児が顔の表情や発声のリズムやトーン、ビート、身体の動きなどをマッチングさせるインプリシットな相互交流プロセスについて、さまざまな観察データを用いて研究している。実験では、母親と乳児のマッチングをめぐる相互交流プロセスは、マッチ match、ミスマッチ mismatch、再マッチ rematchに区別して観察された。すると大抵の場合、ミスマッチがあれば、母親と乳児は2秒以内に再マッチすることが示された。そして、2秒の間に再マッチする確率が高ければ高いほど、それだけ生後1年目に安定した愛着が築かれる確率も高くなることが明らかになったのである。

ここで興味深いことは、マッチングそれ自体よりも、再マッチがミスマッチに続くことの方が、愛着の形成により一層重要であったという指摘である。この断絶した母子の相互交流が修復されるプロセスの重要性は、コフー

トが自己心理学的アプローチの治療機序として、「共感不全への共感」や「自己対象転移の断絶と修復」を重視したことも一致しており、興味深い。

次に、マッチングの相互交流パターンは「類似型」と「補正型」に分けられた。例えば、母親と乳児の音声リズムのマッチングでは、サインが陽性の場合、一方が持続時間を長くすると、他方もそれに従って長くするマッチングが「類似型」で、サインが陰性の場合に、一方が持続時間を長くすると、他方は持続時間を系統的に短くするマッチングが「補正型」である。実験では、抑うつ状態の母親とその乳児の相互交流が観察されたが、サインが陽性ではなく、陰性の状態の時に「類似型」のマッチングが生じる傾向があったという。乳児が、発声、表情、身体で苦悩を表現すると、母親は、まるでさらに絶望が深まるように、高まり続ける乳児の覚醒レベルにマッチングをし続けてしまい、「過覚醒の相互増幅」が起こるのである。そうすると両者は互いに、相手の覚醒と苦悩を強め合う方向でどんどんマッチングし、苦悩状態はさらにエスカレートして、乳児はやがて混乱し、嘔吐するか悲鳴をあげる状態となっていくという。

この乳児と母親の相互交流パターンを「自己調整プロセス」と「相互交流調整プロセス」の観点から捉えると、乳児は苦悩状態において「自己調整プロセス」に支障が生じていることを示しているが、それは母親との「相互交流調整プロセス」の問題が乳児の「自己調整プロセス」を妨害していることが影響していると考えられる。乳児の自己調整への母親による妨害の例としては、乳児が布切れを触ったり、指を吸ったりという、自己沈静 self-soothingの行動を取り始めるや否や、母親が乳児の手をそれから引き離すという交流が認められた。あるいは、苦悩に喘ぐ乳児に、母親が繰り返し微笑みかけたり、顔を背け、身体を反り返えらせて、他者と関わりが持てない状態に陥っている乳児に、刺激を繰り返し与え、乳児の陰性の反応をさらにエスカレートさせる母親も観察されている。こうした母親は、そもそもの乳児の苦悩それ自体を否認しているかのようであり、ましてやそれを修復しようとはしない。そうした相互調整が難しい抑うつ状態の母親と乳児のペアでは、乳児は、過覚醒の相互増幅を避けるために、相互交流の関わりを絶って、自己沈静の行動を繰り返し、自己調整に没頭するようになることが観察されている。そして、そのような相互交流パターンが繰り返されていくと、後の不安定な愛着や引きこもりにつながっていくことが予想されるのである。

一方、苦悩状態に陥った乳児の自己調整プロセスを支えることのできている母親を観察してみると、そうした母親は、その乳児の覚醒の下方調整を促すような至適な応答を返していることが認められた。母親は、乳児の苦悩状態の中に一時的、部分的にマッチングして「参入」しながらも、活性・覚醒レベルにおいては、乳児よりも低いレベルに留まることができていたのである。

このような苦悩状態の乳児と母親との相互交流パターンと類似の現象が、精神分析的な治療状況においても生じていることは、容易に想像がつかだろう。患者への「共感」を類似型のマッチングと理解し、苦悩状態をめぐる患者の側の自己調整プロセスを無視して、類似型のマッチングを一方的に行っている治療者は、それが過剰になると、患者との間に「過覚醒の相互増幅」を引き起こし、患者の苦悩状態をさらにエスカレートさせていることがあるかもしれない。筆者自身、臨床を始めて間もない頃に、患者の苦しみに懸命に共感しようとして過度なマッチングを行ない、こうした「過覚醒の相互増幅」を引き起こして、患者の苦悩状態をさらにエスカレートさせていたことがあったように思う。いわゆる「過剰な共感」とも言えるような「過度な類似型のマッチング」は、決して治療的とはいえないことが乳幼児研究においても実証されているのである。それでは、相互交流における至適なマッチングの程度とは、いったいどのようなものなのだろうか。

ジャフらJaffe (2001) は、生後4ヶ月の乳児と母親との間の音声リズムのマッチングの度合いが、二者間の自己調整と相互交流調整のバランスや、その生後1年目での乳児の愛着のパターンにどのように影響するかについて検討した。その結果、中度のマッチングが、乳児の安定した愛着を予見し、また、自己調整と相互交流調整いずれの調整も、中度の調整が至適であることが示された。つまり、自己調整と相互交流調整がそれぞれ中度に調整されていれば、それぞれの調整は相互に拘束力を持つことなく、維持されながらも、また過度にもならず、自己調整も相互交流調整も柔軟に連動することができるのである。しかし、もしもマッチングが低度の場合には、相互交流調整は犠牲にされ、自己調整に没頭する傾向が生じる可能性があり、それは不安定な愛着にむすびつくかもしれない。また一方、あまりにも高度のマッチングが生じている場合には、逆に自己調整を犠牲にしてまで相手を過剰にモニターすることになり、相互交流調整に偏ってしまう「過剰な心配り」の傾向が表われる可能性が高くなり、それもその後の不安定な愛着にむすびつくことが予想されるのである。

また、マッチングそれ自体よりも、再マッチがミスマッチに続くことが重要であったことを考えると、中度の

マッチングは、避けることのできないその後のミスマッチにも柔軟に対処しやすいことが考えられる。基本的に、マッチングをめぐる相互交流調整は、ふたりの「類似性」と「違い」の間を常に柔軟に行きつ戻りつするプロセスとも言える。中度のマッチングの有効性は、心理臨床実践に当てはめてみても納得のいくものであろう。それは、経験のある心理臨床家が語る、「クライアントの話は掴まなくて、ふぁっと聴くことが大切」（河合，1990）というセラピストの聴き方のコツとも一致しているように思われる。

このように、二者間の相互交流は中度のマッチングで推移し、自己調整と相互交流調整もそれぞれ、ほどよい中度の調整で、柔軟にバランスを維持しながら連動し合っていることが、最も安定的で至適な相互交流パターンを構成するものと考えられるのである。

4) 乳幼児研究から見た精神分析的な心理療法における治療作用の再検討

このように現代の乳幼児研究では、インプリシットな水準における相互交流パターンに焦点が当てられているが、こうした水準の相互交流は、前述したように、当然、大人の精神分析的な治療状況においても活発に生じている。しかし、これまで精神分析は、判然としたエクスプリシットな水準の言語的交流を中心に発展してきたため、そうした治療中のインプリシットな側面はほとんど研究されず、軽視されてきた歴史がある。精神分析的な治療では、治療者による解釈などの言語的介入によって、患者の意識的な洞察が生じることが治療につながるものと考えられてきたからである。

しかし、ビービーらは、精神分析的な心理療法においても、言語的でエクスプリシットな相互交流プロセスだけでなく、暗黙のインプリシットなプロセスの両方を視野に入れ、それらを統合した中で、治療作用を再検討していく必要があることを強く主張している。

それでは、精神分析的な心理療法において、インプリシットな動きに焦点を当ててみると、治療者と患者の間に起こっている相互交流の状況は、具体的にどのように見えてくるのだろうか。ビービーらは、ビデオ録画された女性患者と男性治療者の治療場面を、次のように描写している（Beebe, 2005/2008）。

「患者は徐々に苦悶状態に陥り、せわしなく両手の身振りを交えながら、緊張した身体を前のめりにし、顔をクシャクシャにして今にも泣き出しそうな張り詰めた様子で話しをしている。分析家は静かに耳を傾けており、とても注意深い表情をしている。患者が動揺し始めた時、分析家は椅子をわずかに患者の向きに移動させた。両者はアイコンタクトを保っている。患者の動揺が高まると、分析家の足は、時々、わずかながらせわしなく揺れ、それが患者の身体のリズムにマッチしている。そして分析家は椅子に座ったまま、身体をわずかに前にずらす。この時点で分析家と患者の頭の動きはシンクロナイズしている。患者の動揺が高まる度に、分析家は足を組んだり戻したりし、動きのリズムに合わせて頭を上下に動かし、その度に“yes”と穏やかに言葉にして、患者の興奮に参加する。こうして徐々に患者の興奮はおさまり、分析家の頭の動きもゆっくりになる。長い沈黙が何度か訪れ、やがてゆっくりと彼らは互いに話を始める。」

こうしてインプリシットな非言語の水準に絞って面接の流れを見てみると、治療者と患者の間では、実に微妙で繊細な暗黙の水準の相互交流が、まさに乳児と母親のマッチングのように生じていることが分かる。ビービーらが指摘するように、面接の中で、分析家は、患者の発話のリズムに適度にマッチングしたり、身体の動きを患者の動きにシンクロナイズさせたりしながら、動揺の増幅とその沈静化という相互交流の連鎖に参入しているといえる。分析家は、患者の一連の動きに影響されながらも、治療者自身の内的状態の自己調整を行っており、それはまた患者との相互交流調整プロセスに反映して、結果的に患者の沈静化に影響を与えていることが考えられるのである。

上記の面接を例にして、ビービーらは、結局、治療者はこうした非言語で暗黙のやり取りを通して、「彼（治療者）が彼女（患者）と共にあることbeing with」を彼女に示しているのだと述べている。ビービーは、また別の例として、治療者の顔の表情をめぐるインプリシットな非言語的かわりが大きな治療的要因となった自身の臨床例、「ドロレスの症例」を詳細に提示しながら、そこにおいても、長期に渡る自分とドロレスの非言語的かわりの積み重ねが、ドロレスが「共にある新たなありかた」を創造することにつながったと述べている（Beebe, 2005/2008）。ビービーは、「共にある新たなありかたの創造」を「治療者は患者に新しい種類の相互交流のパターンを提供した」とも「ドロレスは暗黙のレベルでこの新しい関係の仕方を学んだ」とも表現しており、それらは行為手順的 proceduralなインプリシットなレベルにおいて達成されるものであることを主張している。こうしたインプリシットな認識や了解は、所謂、「暗黙の了解」や「暗黙知」と言われてきたものであろう。我々の日

常の生活の中には、莫大な量の暗黙の了解が存在する (Stern, 2004)。そして、このような暗黙の了解の多くは、言葉に置き換えることさえできない。しかし、我々の認識は、むしろ、そうした暗黙の了解によって支えられているのである。「暗黙知」の概念を最初に提唱した哲学者マイケル・ポラニー (Polanyi, 1966) は、暗黙知を通して初めて人間は、事物の集まりが全体としてもつ意味を包括的に理解することができることを指摘している。

また、この「共にある新たなありかたの創造」とは、二者間の相互交流パターンが新たにオーガナイズされたことを意味しているとも言える。ビービーとラックマン (2002/2008) は、乳幼児研究の成果から、この相互交流パターンがオーガナイズされ、体験が内在化されていく際に重要となるオーガナイジング・プリンシプルとして、「進行し続ける調整」と「断絶と修復」、そして「情動が高まる瞬間」をその特徴的パターンとして挙げ、これらの原理は、大人の世界分析の治療における治療プロセスにも当てはまることを主張している。ここで、これらの特徴的パターンは、すべてプロセスやコンテクストであり、内容的なものに限定されないという点が重要である。つまり、逆に、力動的な心理療法における言語的なやり取りも、その内容ではなく、このプロセスの流れから見てみると、これら3つのパターンが重要な治療的变化の契機となっていることに気づかされるのである。ビービーとドロレスの間の相互交流パターンも、そのようなプロセスを辿りながら、徐々に「新しいありかた」へとオーガナイズされていったものと考えられるのである。

ビービーは、以下のLyons-Ruthの言葉を引用して、次のように述べる (Beebe, 2002/2008)。「共にある」ことをめぐる暗黙のありかたのこうした変容は、言語的なインストラクションを介しては起こりえない。むしろ、そうした変容は、相互に参与し合い、協働しながら、ほとんど自覚のないところで構築される“アクション”対話を介して生み出される。」人はどのように他者と共にあればいいか、波立った自分の気持ちをどのように落ち着かせるか、などを意識的に身につけることはできない。それらは暗黙の手順的な知識によって獲得されていくものなのである。このように、これまでの精神分析では不可欠とされてきた意識的で、記述的で、象徴的な内容的要素ではなく、非意識的で、暗黙の、アクション的なやり取りのパターンの要素が、体験を根源的にオーガナイズし、他者と共にあること、そしてさらに、共にあるありかたが変容されていく際の決定的な要素となっていることが指摘されているのである。

5) 治療的变化における「二重のコミュニケーション・プロセス」

それでは、言語的な意識の水準のやり取りは、どのような位置づけになるのだろうか。もちろんビービーらも、意識的システムを決して否定してはいない。非言語的な暗黙のレベルにおいて信頼と安全の基盤が十分に醸成された後に、それを土台として、さらにその上に言語的、象徴的なプロセスが加わり、患者に意識的な気づきをもたらされることは、より適応的な活性化やその定着、意図的な選択や内省、自己感の統合感や統一感の強化につながることを指摘されている (Beebe, 2005/2008)。また、パリー (Pally, 2005) は、予測可能性が中度に作動しながら、相互交流が維持されている間は、非意識レベルでの暗黙のコミュニケーション様式で支障は起こらないが、一旦、予測していなかった事態が生じたり、予測不可能な事態に至った際には、意識レベルのかかわりが必要とされることを指摘している。また、ラックマン (2008) は、治療者と患者の相互交流の中で、それまでの予測し合い共調し合っていたやり取りだけではなく、予測外のやり取りがそこに生じることが、治療的なインパクトとして必要となることを指摘している。そうした予測外のやり取りが治療の中で外傷的でない範囲内で起こり、それが言語的、象徴的に修復されることが、「断絶と修復」と「情動の高まる瞬間」となって内的な体験プロセスを強力にオーガナイズすることになるのである。

このように精神分析的な治療においては、暗黙の水準だけではやはり不十分であり、言語的、象徴的水準のコミュニケーションがインプリシットな基盤の上に積み重ねられていくことが、認知的な要素がさらに統合された、より高次の治療プロセスに進んでいくために必要となるのである。

しかし、ここでもやはりビービーらは、意識的な言語的コミュニケーション様式は単独で機能することは決してなく、必ず非意識的な暗黙のコミュニケーション様式と相互に影響し合いながら進行していることを強調している。またそれは、非意識的な暗黙のコミュニケーション様式においても同様であり、それらは常に表裏一体となって進行していると考えられる。このように治療的变化とは、インプリシットな水準とエクスプリシットな水準の「二重のコミュニケーション・プロセス」において生じるものと考えられているのである。

ビービーは「ドロレスの症例」の中で、治療が成功裏に進んだ後半、二人は面接の中で、新しい「より安全な感覚」と「真の希望の可能性という感覚」を共に理解しつつ、驚くほどの調律をし合って、当意即妙な言語的や

り取りを交わしていた、と述べている。スカロフ Sucharov (1998) は、共感的な相互交流を「共感のダンス」empathic danceと呼んでいるが、ビービーとドロレスのやり取りは、まさに息の合ったダンスのように交わされていたことだろう。パリーは、また、ドロレスの治療後半のコミュニケーションには、意識的気づきとその言語化、そして非言語的な暗黙の情緒の様式や、面接のリズムやジェスチャー、直感のすべてにおいて、それらが統合されたあり方が示されていると指摘している。このようなドロレスの、エクスプリシットな要素とインプリシットな要素が至適に統合され、それらが柔軟に前景になったり背景になったりして入れ代わり、しなやかに連動して表出されるような自由なコミュニケーションのあり様は、治療者であるビービーもまた同様であったに違いない。ドロレスの変化は、ビービーとの双方向的な相互交流プロセスの変化によるものであり、ビービーとドロレス両者の間主観的な変化だからである。そして、こうしたビービーとドロレスの至適なコミュニケーションの変化を生ぜしめた源に二人の相互交流調整のプロセスがあり、治療後半のビービーとドロレスの「自己調整」と「相互交流調整」のプロセスは、そのどちらにも偏向することなく、最も至適な、まさにほどよい「中庸」midrangeのレベルで調整されていたと考えられるのである。

ここで最後に、精神分析的なアプローチにおいて、このようなエクスプリシットな様式とインプリシットな様式が至適に統合された相互交流のあり方に至るには、インプリシットな要素をどこまで意識化し、言語化することが必要とされるのかという疑問について触れなければならない。それはまた、非言語的な要素はどこまで解釈されるべきか、という問いにもつながるものであろう。

まず、非意識で非言語のインプリシットな領域とは、無意識とは区別される領域であり、そこには抑圧によって無意識化されているという、防衛や抵抗の要素は存在しないことが前提となっていることに注意しなければならない。したがって、心理療法において非意識の要素を意識化する必要性は、精神分析的には存在しないことになるのである。しかし、これほどまでに非意識の暗黙の要素の重要性を強調しているビービーらでさえ、精神分析家である彼らは、やはり暗黙の要素を言語化し、意識化することを、治療の重要な目標として挙げているように思われる。しかし、また同時に、彼らは、「言語の出現はいい事づくめではない」というスターンの言葉を引用して、スターンが、言語は内的な状態を伝えるという作業には不向きであると述べたことにも言及している。言語は、必然的に、「何を言うか」と「どう感じるか」の間、さらに「言語化できる自己」と「体験している自己」の間に「断絶」を生じさせる。どうもビービーらは、この間にはっきり答えることをしていないように見受けられるのである。

この点に関して筆者は、覚醒・活性化レベルを微調整するためには、自己調整や相互交流調整を、言語化しないまま調整・維持することが必要な場合があるのではないかと考える。意識化し、言語化することは、必然的に覚醒レベルを高めることにつながるだろう。微妙な水準の覚醒・活性化レベルに調整・維持することが必要な場合には、あえて言語化しないで、自己調整や相互交流調整のバランスを図る必要があることを、スターンは示唆していたのではないかと筆者には思われるのである。

しかし、もしも、インプリシットな要素とエクスプリシットな要素が矛盾するダブルバインドの状態が過剰となり、恒常化すると、そこからはさまざまな神経症の問題が生じてくることが考えられる。富樫 (2011) は、コミュニケーションにおけるインプリシット・プロセスとエクスプリシット・プロセスの不一致が、患者の病的な着古的自己愛空想archaic narcissistic fantasyが発展する素地になる危険性を指摘している。インプリシット・プロセスが、言語化によって一切、相対化されないままに積み重ねられていくと、そこには「全能性」の原理が支配的となるリスク (齋藤, 2000) が生じてくることが考えられるのである。

しかし、スターンの指摘した、言語化による「生の体験の断絶」は、人間存在の宿命とも言えるだろう。意識化し、言語化することによる「合一の世界の断絶」と、非言語に感じ、体験するレベルでの「合一の世界との融合」も、ひとつの弁証法的な「断絶と修復」のプロセスであるならば、この二つの体験世界が行きつ戻りつする揺らぎ自体が、人間存在にとって避けることのできないことなのかもしれない。齋藤 (2000) は、言語化による「断絶」あるいは「分断」に関する、次のような興味深い論を展開している。

「言語は、自己の中の“生身の体験世界”と“主体”との間に分け入って、“キシミ”や“違和感”を与えながら“スキ間”を入れて、自己完結的な閉塞を解く重要な働きがある。つまり、intrapersonalにもinterpersonalにも必要な距離 (ゆるみ) を入れるところが、先的情绪交流における全能的な直接性とは違っている。自己内対話でも、内実と言語とのズレの感覚がむしろ、混沌化とは逆方向の更なる自己探索を促していく推進力になりうるであろうし、また臨床家の解釈的介入など“他者の言葉のズレ”は、自他間の距離を安全に守りながら、自己理

解・自己再体験の仕事に有意義な一石を投ずる働きをされると思われる。」 齋藤の言うように、言語化は、その「内実」つまり「暗黙水準」との必然的な「ズレの感覚」によって、むしろintrapersonalにもinterpersonalにも必要な「ゆるみ」を入れることになり、そのことがさらなる自己探求の推進力につながる可能性があるのである。このintrapersonalとinterpersonalは「自己調整」と「相互交流調整」に読み換えることができるだろう。言語化や意識化によるエクスプリシットな水準の要素とインプリシットな水準の要素の調整に関しても、むしろそこに適度な「ズレ」があり、「スキ間」や「ゆるみ」や「ゆらぎ」を含み持った「中庸」のレベルの調整であることが、最も両水準の相互活性化と、さらなる自己展開、自己探究の可能性を秘めた「ほどよい揺らぎ」を刺激することになるのではないかと考えられるのである。

3. 臨床例の検討

1) 事例

ここで、現代自己心理学の視点から、筆者自身の実際の臨床例の治療プロセスを検討してみたいと思う。尚、守秘義務のため、治療の本質を変えない範囲内で、事実関係には変更を加えている。

19歳のB子は、コンピューター・グラフィック関係の専門学校に通っていたが、夏休み明けごろから不眠と抑うつ気分を訴えるようになり、通学も休みがちとなった。家庭では次第に情緒不安定となり、夜中に親に物を投げつけるなどの行動も見られるようになったため、心配した両親が、患者を連れて心療内科クリニックを受診した。初診時、B子は、感情をコントロールすることができないと主治医に自ら訴え、カウンセリングを希望したため、薬物療法と並行して、筆者が担当となり、週1回の精神的な個人心理療法が開始されることとなった。

初回、小柄で、目立たない、大人しそうな印象のB子は、不安げな表情を浮かべながらも、治療者に積極的に話した。「友人のことで相談したかったんです。自分は友達ができにくい。専門学校ではグループで作品を共同製作する課題もあるが、グループで自分が言った意見は、他の子には受け入れてもらえなくて、大抵、無視されるんです。それが嫌で、もう何も言わずにいたら、今度はBちゃんは協力的でないとみんなに言われて、そしたらいったいどうしたらいいの！って思うんです。友達とのことを夜に考えだすと、こうなるのは前にこんなことがあったからだとか、どんどん考えていって、落ち込んでいって眠れなくなる。そんな時、気楽にぐっすり眠っている家族に腹が立ってきて、当たってしてしまう。自分でも良くないと分かっているけど、どうしてもコントロールできなくなるんです。」B子はしっかりと自己の悩みや内面的葛藤を言語化し、内省する能力があると感じた筆者は、B子に、どうしたらいいかを共に考えるために個人心理療法を続けてみることを薦め、B子自身も継続を希望した。最後に治療への希望を聞いたところ、「どう考えたらいいかというのは教えてもらった分かるけど、私は考えてばかりで、行動できない。考えるばかりでなくて、行動できるようになりたいんです。」ときっぱりと語ったのが印象的だった。

筆者は、内心、内省力のあるB子との面接はスムーズに進むだろうと予想していた。ところが意外にも、その後の面接で筆者は、B子とのやり取りに難しさを憶えるようになっていった。それは次のようなやり取りが頻発するという形で表われたのである。

B子は面接の中で、具体的な友人関係のトラブルについて語り続けたが、筆者が「その友達の言動は、こんな意味もあるかもしれないけど」や、「そういう時は、こんな風にするのは？」など、少しでもB子の認知について修正しようとしたり、示唆するような応答をすると、B子は、急に堅い表情となり、身体をこわばらせ、「それは分かっているんです」と拒否し、筆者にあからさまな警戒の姿勢を示すことが頻繁に生じるのである。そもそも面接中のB子の様子は、いつも緊張気味に椅子に浅く座り、行儀よく手を両膝に置いて、やや下を向き、目を伏せて、筆者の顔をほとんど見ることなく、自分のペースで一方向的に喋り続けるというものだった。B子は、筆者の存在をあまり意識していないようでもあり、筆者が少しでも口を挟むと、いつもビクッと驚いたような反応を示すことが常だった。こうして筆者自身も、いつしかB子の自分への警戒的反応に敏感となり、次第に自由に応答することができなくなって、面接中、緊張と居心地の悪さを感じるようになっていった。

そこで、こうした状況を改善する必要を自覚した筆者は、B子の語りに口を挟むことはできるだけ控え、ひたすらB子の語りのリズムや声のトーンに、自分のあいづちや応答のリズムやトーンを合わせ、B子の語りの内容に徹底的に耳を傾けて、B子の内面を共感的に理解することに努めることを決心した。すると不思議なことに、そうした交流様式に転換した頃から、B子の語りが、以前よりもスムーズに筆者の心の中に浸透してくるよう感じられた。そして、B子の語りの内容は、自然と友人関係の話題から離れ、幼少の頃から抱えてきたB子の家

族への思いへと変化していったのである。

実は、B子には、生まれつき重度の身体障害をかかえた姉が居た。家族は、その姉を育て、介護することに大きな苦労を重ねてきた。そしてB子は、姉の世話に手を取られる両親に、幼い頃から文句ひとつ言わず、逆に積極的に家族に協力する優しい子どもとして育った。しかし、やはりそのことは、B子の心の中に、両親への不満となって残っていたのである。筆者は、B子の語りに耳を傾けながら、B子の家族へのアンビバレントな感情の深さとその複雑さについて、認知的側面と感情的側面からの共感的な理解を次第に深めていった。

そして、ある回、B子から、次のようなことが語られた。それはB子の誕生日の日の出来事だった。その日は、姉が親戚の家に預かってもらうことになっており、B子は前々から両親とレストランで誕生日のお祝いをするようになっていた。B子はそれを非常に楽しみにしていた。しかし、当日、たまたま父親に仕事の予定が入ってしまい、レストランでの食事は中止となってしまったのである。面接でB子は、その不満を語りながら、涙を流した。いかに自分がその日を以前から楽しみにしてきたか、そして、その自分の気持ちを両親が分からず、簡単に予定を変更したことへの不満、自分の期待する気持ちと親の気持ちに大きな温度差があったことへの失望が、B子の口から涙とともに語られた。B子は、実際、その時、この残念な気持ちをせめて母親には分かってもらいたいと、自分の思いを母親に伝えたが、母親にそれを話せば話すほど、母親から返ってくる返事はますますB子の思いとはかけ離れたものとなり、さらに失望が深まったと語った。「どうしても予定がつかなくなったのは仕方ないけど、少なくとも、この私の残念な思いをお母さんには共有して欲しかった。私としては、ただ、共感して欲しかったんです…」とB子はさめざめと泣き続けた。

その時、筆者は、ある興味深い体験をした。実は最初、筆者はB子の語りに耳を傾けながらも、B子の嘆きに深く共感することができないでいた。というのは、両親はB子に謝っており、また、新たな日程の約束もして、筆者には両親の立場もまた理解できるような気がしたからである。筆者は、この時も、B子の悲しみのトーンに合わせたあいづちの反応を繰り返しながらB子との相互交流調整を図っていたが、同時にどこか共感のできなさを感じ、自分自身の反応にぎこちなさを感じていた。こうした筆者の自己調整の問題は、相互交流調整とも微妙な齟齬を来し、インプリシットなレベルで両者の間に微妙な不自然さを醸し出していったに違いない。

ところが次の瞬間、驚いたことに、B子の嘆き、悲しみへの深い共感的理解が、筆者の胸の中に突然、強い情緒的反応を伴ってふつふつと湧き上がってきたのである。それは、筆者が『ああ、B子の期待するような母親がこの世には居た（居る）かもしれない』とフッと想像した瞬間のことだった。考えてみれば、B子が母親に自分の気持ちを共有し、共感してもらいたかったという嘆きには、叶うはずのものが叶わなかったという、無念さの感覚が伴っている。しかし、筆者は最初、B子の望むような母親は現実には存在しないだろう、いくら母親でもテレパシーでもない限り、娘の心境を温度差なくそこまで完全に共有することなどできるものではないのではないかと考えたのである。そう考えれば、B子の嘆きは、もともと不在であるものを不在だと嘆いていることになり、それは未熟で子どもっぽい現実否認であるという理解を導く。しかし、「そのような母親も居るかもしれない」という、「不在」の世界の向こうにある「存在」の世界に筆者の想像が到達した時、B子の嘆きは「喪失の痛み」となって筆者の中に深い共感的理解を喚起したのである。筆者は、B子の言葉に心の底から共感し、それは筆者自身のインプリシットなレベルとエクスプリシットなレベル、さらに認知的側面と情動的側面がさらに深く統合された共感的反応として表出されたものと思われる。

この筆者の共感体験の出現以降、B子と筆者の相互交流パターンは急速に安定していったように思われた。筆者の介入や応答にも、B子は次第に安定した状態で応じるようになり、B子も筆者も、心理的にも身体的にもくつろいで面接に臨めるようになった。筆者とB子の自己調整と相互交流調整は、それぞれの調整とバランスを回復するようになり、二人の間のエクスプリシットな交流とインプリシットな交流も、互いに矛盾することなく、自由に展開するようになったように思われた。B子のたずまいも、椅子に深くゆったりと座り、顔を上げ、治療者に笑いかけることも度々見られるようになり、二人の間には、対話を楽しむ雰囲気さえ漂うようになった。そうなるに興味深いことに、B子がまさに言おうとした言葉を一瞬先に筆者が口にしたり、その発言はどちらが先に言ったのか二人ともはっきり分からなくなったりすることが、面接中、たびたび生じるようになった。これは筆者とB子の間で、互いが互いの行動を予測し合い、先取りし合って進行する緊密な相互交流が、エクスプリシットとインプリシット両方のレベルで生じるようになったものと考えられる。それはまさに、二人で「共感のダンス」を踊るかのようになり、共感的相互交流プロセスが双方向的に展開していたことを示していたと思われるのである。

こうして、その後B子は、さまざまな現実的トラブルやストレスから一時的に情緒不安定な状態に陥ることがあっても、面接で治療者と話す、急速に落ち着きを取り戻すようになった。その後も、B子はさまざまな対人関係の悩みを抱きながらも登校を続け、無事、専門学校を卒業した。現在は、元気にパートの仕事を続けている。

2) 若干の考察

ここでもう一度、B子の治療プロセスを現代自己心理学の視点から振り返ってみたい。B子は、最初、専門学校での友人関係の悩みを訴えて来所した。B子の悩みを、B子と友人との相互交流パターンの問題として見てみると、B子は友人との間で、自己調整と相互交流調整のバランスを柔軟に維持することができないという問題を抱えていたと考えることができるだろう。B子の友人への不満は、友人から言わせれば、きっと独りよがりな反応として受け取られていたのではないと思われる。B子は友人関係のトラブルの原因を自分の中であれこれと考え、自己調整を懸命に行おうとしていたが、それは相手の自己調整や、相手との相互交流調整を視野に入れた文脈ではなかったのである。

そして、そのB子の相互交流パターンの問題は、治療者である筆者との相互交流の中にも表れたものと考えられる。B子は、筆者の反応は意に返さず、ひたすら独白的に自己の悩みを訴えたが、それは筆者との相互交流調整を無視し、極度に自己調整に偏った交流パターンを示していた。こうしてB子は、筆者の介入に拒否的となり、常に筆者の反応を敏感に警戒するようになって、筆者も次第に居心地の悪さを感じるようになっていったのである。

しかし、ここで現代自己心理学の双方向二者心理学の視点から考えると、筆者とB子の中で生じたこの相互交流パターンは、あくまでも筆者とB子が双方向的に共構築したものであると考えなければならない。確かに筆者は、B子の余りの過敏な警戒に不快さを感じたが、そこには、筆者も、B子が筆者の反応に過敏な警戒反応をまた起こすのではないかと予測して緊張し、B子の反応を過敏にモニターしていたことが影響していたものと考えられる。こうした筆者のB子への過剰な気遣いは、当然、B子にも伝わり、B子もさらに筆者の反応を過剰に警戒し、緊張するといった、まさに「過覚醒の相互増幅」と言われる状態が両者の間に生じていたのである。その意味で、筆者とB子の相互交流における自己調整と相互交流調整はバランス不全を起こしていたものと考えられる。ここで筆者の内的状態を振り返れば、筆者はこの「過剰な気遣い」というB子との相互交流調整に意識を奪われて、筆者自身の自己調整が疎かになっていたと言わねばならない。筆者は、自分の内的状態を注意深くモニターし、さまざまな連想や思考を自由にめぐらすために必要な心的スペースを確保することができなくなっていたのである。

この時、筆者は、自分自身の過剰反応とB子の警戒反応との相互作用のパターンに気づき、その後はB子の語りに無理に介入することはせず、とにかくB子の語りを徹底的に傾聴することを決意し、そのような態度に転換を図った。その際、筆者は、言語的な応答はことごとく過剰に反応されるため、自分の発声のトーンやリズムを徹底してB子に合わせ、B子の語りに疑問を差し挟むことなく、B子の語りの文脈の流れに沿って、共感的なあいづちの反応を強調して繰り返しながら、B子の語りを傾聴するよう努めることとなった。これは、言語的、認知的な理解だけでなく、インプリシットな水準でB子の覚醒・活性化レベルに積極的にマッチングを行い、相互交流調整を続けながら、同時に自分自身の自己調整も図るという筆者の努力だったとも考えられる。そうすると、B子の語りの内容がこれまでよりもスムーズに筆者の胸の中に浸透し、入ってくるようになったのである。

こうした現象を、筆者は臨床経験の中でよく体験する。まだ認知的なレベルでは十分に共感的理解に達していない段階において、インプリシットなレベルで患者の語りの流れやリズム、声のトーンや身体の動き、表情の変化などに、治療者のそれを合わせ、同調し共鳴するマッチングの反応を繰り返しながら、患者の語りを集中的に傾聴していると、患者の内的世界への共感的理解が、治療者の中で、認知的にも情動的にも進みやすくなるように思われるのである。

この点について、バラダメンティ Badalamentiとラングス Langs (1990) は、独自の実証的な研究を通して、患者と治療者の音声リズム・パターンの違いとナラティブ・イメージの深さとの関連性を論じており、興味深い。それは、患者のナラティブ・イメージの豊かさは、治療者による患者の話の中断の少なさ、治療者のより長い沈黙、患者の話の流れに沿ったビートを保持する「ウン」、「フムフム」といった「背後での水路づけ」の多用さと関連していたというのである。ラックマン (2008) は、そうしたインプリシットな非言語的コミュニケーションが、共感的理解の重要な基盤としての役割を担っていることを指摘している。筆者の体験は、そうした共感的

理解の必要条件となる、インプリシットな非言語的コミュニケーションを治療者が促進することで、患者と治療者の共感的理解の基盤を拡充させていたのではないかと考えられるのである。

こうして、その後、筆者とB子とのインプリシットな共感的相互交流に培われた関係性基盤の上に、ある回、B子から誕生日の出来事が語られた。ある意味では、これまでB子との間で構築されてきた関係性の基盤は、このための準備だったと考えることもできるだろう。B子は、期待した母親の「不在」を悲しみ、涙した。B子にとって、それは自己愛の傷つきに相当するものだったろう。しかし、筆者がB子の内的世界を理解し、B子の悲しみに深く共感するためには、B子の語りを認知的に理解するだけでなく、さらにB子の内面に思いをはせ、「B子の望む母親は存在するかもしれない」というイマジネーションを筆者自身の内面に深く喚起することが必要だったのである。

ラックマン（2008）は、共感とは、あらゆる感覚形態とイマジネーションを使って、患者の私的な世界を治療者と患者で共創造 co-createすることだと述べている。筆者にとっても、この「B子の望む母親がこの世に居るかもしれない」というイメージの出現は、その時、筆者の内的世界に存在しなかった「母親」をB子と共に創造する筆者自身の作業でもあった。それは筆者自身にとっても癒しの体験になったのである。

また、筆者がB子の悲しみへの深い共感に達した際、B子は、彼女の主観的体験の中で「母親に見つけてもらえなかった自分を、治療者に見つけてもらえた」と体験したかもしれない。また、それは、筆者の主観的体験の中では、「筆者は自分自身の中にB子を見つけた」、あるいは「筆者はB子の中に自分自身を見つけた」と体験したとすることもできるだろう。それは、また、Togashi（2012）が根源的な自己対象体験として指摘する「あなたが私の中にあなた自身を見出してほしい」という、B子の双子自己対象ニードに共感的に応える体験となっていたかもしれない。いずれにせよB子は、筆者の共感する心に映った自己を、はっきりと実感を持って感じる事ができたのだと思われるのである。

人間は「不在」そのものをイメージすることは難しい。しかし、「存在」したものを喪失した「不在」は、深く共感することができる。それは「不在の乳房」をめぐる乳児の苦しみをも連想させるものである。精神分析家の松木邦裕（2012）は、自らが提唱する不在論の中で、「乳房がない」との認識は、今現在は乳房が不在であるという認識である。それには、過去に在った乳房が今はないとの認知があるとともに、未来においてその乳房が戻ってくることの期待が含まれる。すなわち、過去・現在・未来という時間の流れについての認識が始まったことである。この時間の認識は、それ自体がフラストレーションにもちこたえる力を高めることは理解されるであろう。乳房に関する過去の認知は保証を、未来への期待は希望を乳児に授ける。」と述べている。筆者が「不在の乳房」をめぐるB子の悲しみに共感することは、過去・現在・未来へと時間が流れていくことを共に認識することであり、さらに未来のどこかで、その乳房が戻ってくることの期待と希望を与えることだったのである。最初、筆者の心には乳房が「不在」のままであった。この時、ある意味、筆者の心は動きを止め、時間の流れさえも止まっていたと考えられる。しかし、B子との相互交流の中で筆者の中に「なかった乳房」が生まれ、B子の悲しみに共感できるようになった。そしてB子と筆者の中では「なかった乳房」が過去には「在った」ことが再び認識され、「未来へと流れる時間」と「未来への希望」が生まれたのである。ここでは、筆者とB子の心の中で「在」と「不在」が幾度も流転反転していることが分かるだろう。これは、コフォートの伝統的自己心理学から現代自己心理学まで、さまざまな次元で繰り返し取り上げられてきた「断絶と修復」のテーマに通底している。

このように考えると、精神分析的治療の中では、こうした多くの次元の「不在」や「不一致」をめぐる「断絶と修復」の体験が、治療者と患者の間のインプリシットとエクスプリシット両水準の共感的相互交流の中で、行動手続的、黙示的、認知的、言語的、象徴的、情動的に何度も何度も繰り返され、集積されているのではないかと考えられる。そして、そうした治療者と患者の心に生じる「在」と「不在」の創造的な弁証法的緊張関係の創出こそが、心の再生と回復をもたらす「ふたりの心と心の作業」の中身なのではないかと筆者には思われるのである。

4. おわりに

最新の乳幼児研究の成果を取り入れ、治療者と患者の治療的な共感的相互交流プロセスの解明を進めている現代自己心理学の新しい研究を概観し、それらの視点を臨床的に理解することを試みた。さらに筆者自身の臨床例の治療プロセスを現代自己心理学の視点から検討することを通して、共感の治療的意味を具体的に検証してきた。

現代の自己心理学者たちが主張しているのは、治療者と患者の間で双方向的に繰り返される共感的な相互交

流の中の、非意識で非言語的で、暗黙の水準のインプリシットな相互交流様式の影響力の大きさと、それらの相互交流パターンが全体としてオーガナイズされていくプロセスの解明であった。

「最も大切なことは言葉にされない」と言われることがある。しかし、精神分析は、最も大切なことを言葉にしていく治療である。言葉にしてしまうことで無くなるものがありはしないかと怖れるが故に、その怖れと不安に挑戦し、それを乗り越える必要が人間には生まれる。しかし、言葉にされなくても、また必ずしも意識されなくとも、人間は多くのものを直感的に感じ取り、それらを暗黙の内に統合して「暗黙知」として体得し、適切に行動していることも事実である。

本論文で、筆者は、インプリシットな領域の現象を言語化しようとする、極めて冗長で不的確な表現しかできず、最後まで隔靴搔痒の感を免れなかった。やはり暗黙の要素は、言葉に汲み尽くせない世界の出来事なのだろう。言葉にされる前の、インプリシットな要素を残した精神分析的アプローチはありえるのか、そして、エクスプリシットな意識的・言語的要素とインプリシットな非意識的・非言語的要素とをどのように織り交ぜ、統合することが、真の治療的变化をもたらすのか、他分野のさまざまな研究や知見を貪欲に取り入れながら、現代精神分析の深化・発展への新たな挑戦は、今後もさらに続いていくのである。

文献

- Beebe, B. & Lachmann (2002): *Infant Research and Adult Treatment: Co-constructing Interactions*. The Analytic Press. 富樫公一 監訳 (2008) 乳児研究と成人の精神分析－共構築され続ける相互交流の理論－. 誠信書房.
- Beebe, B & Knoblauch, S & Rustin, J & Sorter, D (2005): *Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment*. Cathy Miller Foreign Rights Agency. London. England. 丸田俊彦監訳 (2008) 乳児研究から大人の精神療法へ－間主観性さまざま－. 岩崎学術出版社.
- 河合隼雄・鷺田清一 (2003) : 臨床とことば－心理学と哲学のあわいに探る臨床の知. 阪急コミュニケーションズ, 34-36.
- Knoblauch, S. (2000): *The Musical Edge of Therapeutic Dialogue*. The Analytic Press. 朝井 知・黒澤麻美訳 (2009) 精神療法という音楽. 星和書店.
- Kohut, H. (1971): *The Analysis of the Self*. International Universities Press. 水野信義・笠原嘉監訳 (1994) 自己の分析. みすず書房.
- Kohut, H. (1977): *The Restoration of the Self*. International Universities Press. 本城秀次・笠原嘉監訳 (1995) 自己の回復. みすず書房.
- Kohut, H. (1978): *The Search for Self*. Vol. 1. P. Ornstein, ed. New York. International Universities Press. 伊藤 洸訳 (1987) コフト入門－自己の探求. 岩崎学術出版社.
- Kohut, H. (1984): *How Does Analysis Cure?*. The University of Chicago Press. 本城秀次・笠原嘉監訳 (1995) 自己の治療. みすず書房.
- Kohut, H. (1985): *Self Psychology and the Humanities – Reflections on a New Psychoanalytic Approach*. 林 直樹訳 (1995) 自己心理学とヒューマニティ－新しい精神分析的アプローチに関する考察. 金剛出版.
- Lachmann, F. M. (2008): *Transforming Narcissism: Reflections on Empathy, Humor, and Expectations*. Psychoanalytic Inquiry Book Series. Volume 28. The Analytic Press. New York. London.
- Lee, R. R. & Martin, J. C. (1991): *Psychotherapy After Kohut: A Textbook of Self Psychology*. The Analytic Press. Inc. 竹友安彦・堀 史朗監訳 (1993) 自己心理学精神療法－コフト以前からコフト以後へ. 岩崎学術出版社. 340-353.
- Polanyi, Michael (1966): *The Tacit Dimension*. Routledge & Kegan Paul Ltd. 佐藤敬三訳. (1980) 暗黙知の次元－言語から非言語へ. 紀伊國屋書店. 35-47.
- 松木邦裕 (2012) : 不在論. 精神分析研究 第56巻 第3号. 1-13.
- 森 さち子 (2010) 乳幼児研究の関係性理論への貢献. 精神分析研究 第53巻 第2号. 170-178.
- 齋藤久美子 (1995) : 精神分析と早期発達研究. 小此木圭吾・妙木浩之編 現代のエスプリ別冊, 精神分析の現在. 至文堂. 26-36.
- 齋藤久美子 (2000) : 精神療法における「情緒」と「言語化」. 精神分析研究 第44巻 第1号. 46-51.
- Stern, D. N. (1985): *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. Basic Books. New York. 小此木啓吾・丸田俊彦監訳. (1989) : 乳児の対人世界－理論編. 岩崎学術出版社. 小此木啓吾・丸田俊彦監訳. (1989) : 乳児の対人世界－臨床編. 岩崎学術出版社.
- Stern, D. N. (2004): *The Present Moment in Psychotherapy and Everyday Life*. W. W. Norton & Company. 奥寺 崇・津島豊美訳. (2007) プレゼントモーメント－精神療法と日常生活における現在の瞬間－. 岩崎学術出版社. 115-124.
- 富樫公一 (2010) : 関係性理論とKohutの自己心理学. 精神分析研究 第53巻 第2号. 159-169.
- 富樫公一 (2011) : 蒼古的自己愛空想からの脱錯覚プロセス. 風間書房.

- Togashi, K. (2012) : Mutual Finding of Oneself and Not-oneself in the Other as a Twinship Experience. *International Journal of Psychoanalytic Self Psychology*, 7: 352-368.
- Strozier, C. B. (2001) : Heinz Kohut - The Making of a Psychoanalyst. 羽下大信・富樫公一・富樫真子訳 (2011) ハイイツ・コフート - その生涯と自己心理学. 金剛出版.
- Sucharov, M. S. (1998) : Optimal Responsiveness and a Systems View of the Empathic Process. Bacal, H. A.(1998): Optimal Responsiveness: How therapists Heal Their Patients. Jason Aronson INC. 273-288.
- 安村直己 (2004) : 精神療法の指針としての共感体験について. 甲子園園大学紀要. 第8号 (C). 87-101.

就職支援に向けたeポートフォリオの2年目の運用結果について

梶木 克則・西川真理子・増田 将伸・前馬 優策

平成24年10月31日受理

Operational Results of the second year of The e-Portfolio for Career Support

Yoshinori Kajiki, Mariko Nishikawa, Masanobu Masuda, Yusaku Maeba

平成21年度に採択された文部科学省学生支援推進プログラムの活動の一部として、平成23年からはeポートフォリオ(ePF)の本格運用を行い、1年生向けのキャリア教育科目として開講されている「教養演習Ⅰ」の2つの「振り返り」をePFに蓄積するようにした。平成23年度の前期で半期15回の教養演習Ⅰを終え、ePFに関していくつかの問題点が明らかとなった。ePF運用の2年目を迎える24年度は、それを踏まえてePFに蓄積する内容と入力頻度が見直された。本論文では、ePFの1年目の運用結果と問題点、それを踏まえての2年目の運用結果について述べる。

キーワード：eポートフォリオ、就職支援、教養演習Ⅰ、キャリア教育

1. はじめに

平成21年度の文部科学省「大学教育・学生支援推進事業(学生支援推進プログラム)」において、本学から提案された「キャンパス・キャリア・ファイル(CCF)による段階的・就職支援の構築」というテーマが採択された。この活動の一部として、平成23年からはeポートフォリオ(ePF)の本格運用を行い、1年生向けのキャリア教育科目として開講されている「教養演習Ⅰ」の2つの「振り返り」をePFに蓄積するようにした。平成23年度の前期で半期15回の教養演習Ⅰを終え、ePFに関していくつかの問題点が明らかとなった。ePF運用の2年目を迎える24年度は、それを踏まえてePFに蓄積する内容と入力頻度が見直された。

CCFは、学生個人の学習歴(就職支援講座等の受講状況、各種検定試験等の資格取得状況)や部活動・サークル・アルバイト等の経歴等を記したファイルである。CCFは、学年が上がるにつれて更新され、そこに学生の履歴が積み上げられていく。CCFによって、学生自身が学年ごとに設定された目標とその達成およびキャリアの蓄積を自ら確認することが可能になる。また、その情報を就職相談の職員・ゼミ教員・メンタルサポート職員・マナー講座等の外部講師らが共有することで、個に応じた相談ネットワーク体制を構築し、具体的な支援策を講じていく。

教養演習Ⅰは、1年次前期15回の講義形式の授業で、グループワークを中心とし、毎回グループのメンバーが変わる形式で行われる。この授業をCCFとして残

す意味で、冊子形式のワークブックに製本されたものを独自に作り配布している。そこには各回の演習内容に沿って記入するページと、その回のまとめとしての「今日の振り返り」と、1週間の間に頑張ったことを記録する「1週間の振り返り」のページがある。平成23年度からは、教養演習Ⅰの授業中にCCF(冊子)に記入するとともに、「今日の振り返り」と「1週間の振り返り」については期日までにeポートフォリオ(ePF)にも入力するように指導した。入力された内容を次回の演習までに教員が分担して評価(評点とコメント入力)し、フィードバックするようにした。「1週間の振り返り」については、出来事の種類を見出しとして、15回終了後にキーワード検索で簡単に検索できるよう工夫した。1年目の運用を終え、ePFに関していくつかの問題点が明らかとなった。それを踏まえて、ePF運用の2年目にあたる24年度は、ePFに蓄積する内容と入力頻度が見直された。

本論文では、ePFの1年目の運用結果と問題点、それを踏まえての2年目の運用結果について述べる。

2. キャリア教育科目としての教養演習Ⅰ

教養演習Ⅰは17年度からキャリア教育のための教養科目として始められ、次第に初年次教育の内容も盛り込まれ、毎年見直ししながら改良されてきた科目である。選択科目ながら、全員履修するように強く指導されており、ほぼ全員履修している。教養演習Ⅰに関する説明と実施結果については、本学紀要の「学生力を高め

るための教養演習 I (5)」を参照いただきたい。

2.1 教養演習 I のねらい

教養演習 I は、グループワークを取り入れ、それにより仲間を知り、大学への帰属意識を高めるねらいがある。また、協同学習の考えを取り入れ、個人思考と集団思考を組み合わせ、思考の深化と他者とのコミュニケーションを図れるようにしている。

教養演習 I では、ワークブックに各回に応じたワーク内容を記入し、各回の終わりには、その回のまとめとしての「今日の振り返り」と、その日までの1週間で頑張った経験2つまでを「1週間の振り返り」として記入するようになっていく。各回のテーマは、初年次教育として必要な大学生活でのことや、キャリア教育として早くから取り組むべきことなどが盛り込まれている。1週間の振り返りは、自己PRの材料となる経験談などを蓄積するためのもので、今後3年生後半から始まる就職活動に生かしてもらいたい狙いがある。さらに、23年度からのePFを併用するまでは、毎回提出された2つの振り返りに対して、教員がコメントを記入し、次回始めに返却することで、学生と教員間のコミュニケーションを図っていた。

2.2 教養演習 I の進め方

教養演習 I では、独自のワークブックを製本・配布し、毎回始めにその回のグループのメンバーの学科名と氏名を記入することから始める。グループのメンバーは、毎回変えるやり方から、2回続けて同じメンバーになる方式に変えられてきている。

教養演習 I で使うワークブックには、15回ある各回のワーク内容の説明と、聞いたこと、考えたことを記入する欄の他に、各回の終わりには、その回のまとめとしての「今日の振り返り」と、「1週間の振り返り」を記入するページがある。

さまざまな“学び”や“経験”を記録し蓄積することを目指しているCCFは、まず教養演習 I を取り込み、ワークブックに記入する形式で始められた。22年度は、穴開きのバインダー用紙に印刷したワークブック原紙とバインダーを配布した。学生はその回の記入分を提出して、教員がコメントを記入し、次回始めに返却する手順で、フィードバックを行った。

3. eポートフォリオによる1年目の運用

こうしたワークブックに記入することによる「学習歴」や「経験歴」の蓄積は、いざ取り出して見直そうとした場合にすぐには見つけにくいし、それを加工して新たな文章を作ることも簡単ではない。最近で

はそうした情報をePFに蓄積し、いつでもどこでも参照・編集できるようにすることが一般的になってきている。また、教養演習 I のワークブックは半期の授業期間が終わると使われなくなってしまっているので、後々の就職活動などに関わる部分をePFに蓄積しておくことは、非常に有効である。

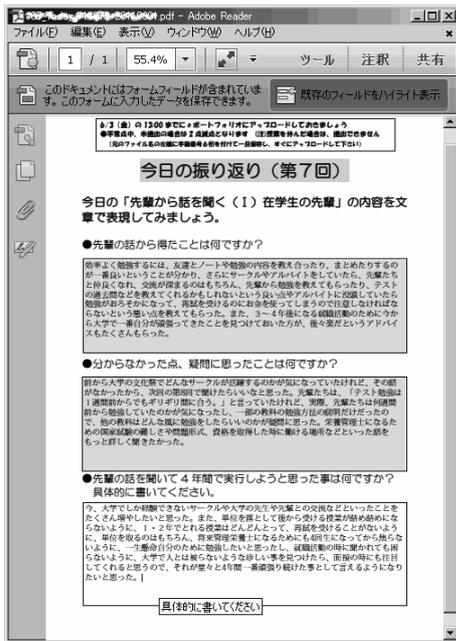
教養演習 I は、グループワークを中心とした教室での演習であるため、パソコンに向かって各自が入力する演習形式は取りにくく、授業時間中にePFに入力することは困難であると考えた。そのため、ePFに蓄積する項目をある程度限定し、授業終了後から2日間の間に入力してもらいようにし、教員による評価(評点とコメント)を次回までに済ませられるようにした。23年度の教養演習 I からは1冊に製本されたワークブックを配布し、授業中にその回の分を記入して、授業後「今日の振り返り」と「1週間の振り返り」の内容を演習室のパソコンからePFに入力するか、自宅から入力することとした。

3.1 2つの振り返りの蓄積方法

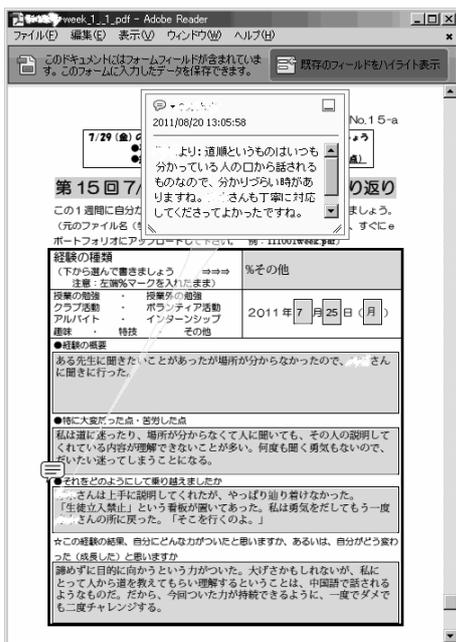
ePFへ記録・蓄積する方法として、文字入力可能なテキストボックス形式のPDFフォームを利用して、ワークブックとほぼ同じレイアウトのPDFファイルを用意した。「今日の振り返り」は毎回違う文面のPDFファイルになるが、「1週間の振り返り」は同じ文面であり、1回につき2件までの経験を15回にわたって蓄積し、キーワード検索し易いよう30ページにわたる単体のPDFファイルとした。それぞれの振り返りの入力済みの画面例を、図1のaとbに示す。

ePFに蓄積する「今日の振り返り」のページには、その回のまとめに当たるキーワードを入れる空欄や感想を入力してもらい回答欄などが配置されている。もう1つの「1週間の振り返り」は、この1週間に自分が頑張ったと思う経験を1件以上記録するというもので、経験の種類として8項目か、「その他」をキーワード欄に明示した上で、経験の内容を4項目に分けて入力できるようにしている。(図1b参照)

毎週の「振り返り」の入力・提出は、ePFにログインし、その回の「今日の振り返り」のPDFファイルを開き、入力・保存後、アップロードするという手順である。「1週間の振り返り」は1つのファイル内の特定のページに順次入力するため、前回提出し教員のコメントが挿入されてアップロードされたものを開くことから始める。図1に2つの振り返りの入力済みの例を示す。どちらも非常に良く書けている例であり、図1bの1週間の振り返りについては教員の注釈(コメント)が挿入されている。1週間の振り返りは30



a 今日の振り返り



b 1週間の振り返り

図1 2つの振り返りの入力済の画面例

ページのPDFファイルに入力するため、コメントは該当するページにポップアップ形式で挿入する注釈とした。(図1b参照)

3.2 2つの振り返りの評価方法

教員側は、アップロード(提出)された「今日の振り返り」を開き、2点か1点の評点とコメントを入力する。コメントの表示例を図2に示す。「1週間の振り返り」については、30ページにわたるPDFファイルのその回のページに注釈という形式でコメントを挿入・保存し、アップロードする。注釈の表示例を図1

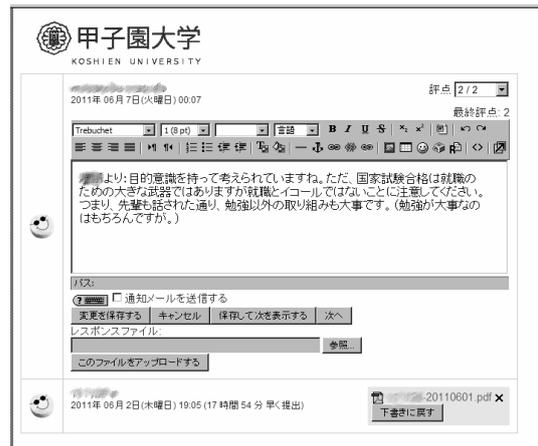


図2 今日の振り返りに対するコメント入力例

bに示す。こうしたコメントや注釈を本人に返すことで、学生と教員間のコミュニケーションが形成され、ePFへの蓄積が継続されるように努めた。

3.3 運用結果と問題点

23年度の教養演習Iは水曜日の3限と4限に実施され、ePFへの提出期限は金曜日の13時までとした。運用当初からトラブルがいくつか発生した。提出の際のトラブルとして、2種類の振り返りの提出先を間違えたり、誤って未完成のファイルを提出してしまい、提出解除の依頼が始め多かった。提出されたPDFファイルを開いてみると、注釈を挿入できなかったり、フォームへの入力ができないといったPDFファイルの機能の不具合が発生した。原因はよくわからないが、使われたAdobe Readerのバージョンが古いと発生する可能性があるようだ。また、提出に関する質問の対応窓口は事務局であることを知らせているが、締め切り直前で問い合わせる余裕がない時には、情報処理センターの関係者や教務課へ駆け込む事例があり、ご迷惑をおかけした。

学生支援推進プログラム関連のメンバー5人と総合教育研究機構の教員とで、教養演習Iの授業進行とePFの評価を分担した。第3回以降13回の評価の内、7回は5人のメンバーだけで分担し、6回はメンバーを含めた7人で分担するスケジュールを組んだ。5人で分担すると1人当たり40数名分の割り当てになり、7人では約30人分を担当することになる。担当者は提出された振り返りに対するコメントおよび注釈の入力のために、かなりの労力と時間を要し、担当教員の負担が大きいことが問題となった。とはいえ、学生とのコミュニケーション形成とモチベーションを保ちながら積極的にePFへ入力してもらうには欠かせないものと思われる。その他、ePFへの提出と評価の双方について、操作が複雑との指摘もあり、操作性の見直し

必要とされた。

4. eポートフォリオによる2年目の運用

1年目の運用を終えて明らかとなったいくつかの問題点を踏まえて、ePFに蓄積する内容と入力頻度が見直された。

4.1 ePFに蓄積する内容と頻度の見直し

23年度のePFでの運用の1年目は、「今日の振り返り」と「1週間の振り返り」とを冊子に記入するとともに、毎週日曜までにePFにも入力するよう指導したが、学生側も、評点とコメントを返す教員側にも負担が大きかった。24年度は、毎回記入する部分をePFにも入力するのではなく、始めと終盤の2回だけに記入する内容をePFに蓄積してもらうように、方針を変更した。「教養演習Ⅰ」の15回の授業において、第2回目に「入学前の自分を振り返り、大学生活の目標を立ててみる」と、第14回目に「入学してから半年間の自分とこれからの自分」と題して、それぞれ入学前と半年後を振り返る内容となっている。この2回の内容をePFに入力することとした。

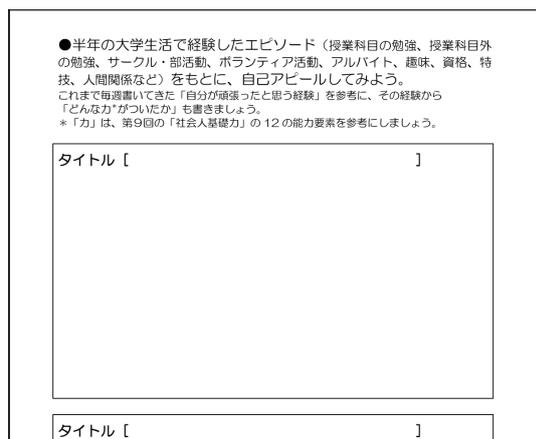


図3 ワークブックの自己PRのページ

半期を振り返る2回それぞれには、これまでに頑張ってきた経験を元に自己アピール（図3参照）を考えると、長期目標（図4参照）と、短期目標とその達成方法（図5参照）を記入するページが用意され

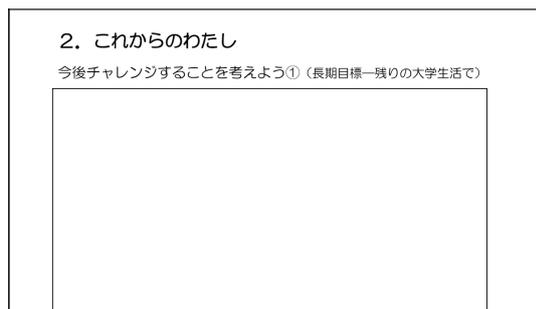


図4 長期目標としてチャレンジすること

ている。これらをePFに蓄積し、短期目標の達成度を自己評価して記録できるようにした。これを期間ごとに繰り返すことで、自己管理につながると思われる。

4.2 2年目の運用結果

1年目の運用で問題となったPDFファイルを介しての振り返りの蓄積では、ダウンロードの手間が増え操作が複雑になることから、編集画面に表の枠をコピーした上でそこに入力する方法に変更した。これにより複数回の振り返りの内容を、同一画面上に蓄積することができる。図6に自己PRを入力する際の説明があり、説明文の下の表の枠をドラッグして範囲選択してコピーし、下の入力領域に貼り付け、日付・タイトル・内容を入力する。図7は学生画面での入力領域に2つ目の自己PRを入力した状態であり、最新のものを上側に入力するように指導している。

その他に、長期目標として「チャレンジすること」を箇条書きで入力することと、短期目標としての「チャ



図5 短期目標3つとその方法

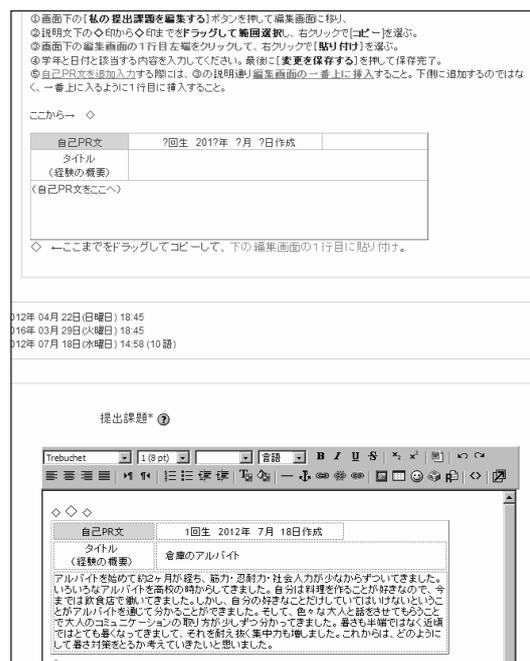


図6 ePFの自己PRの入力ページ

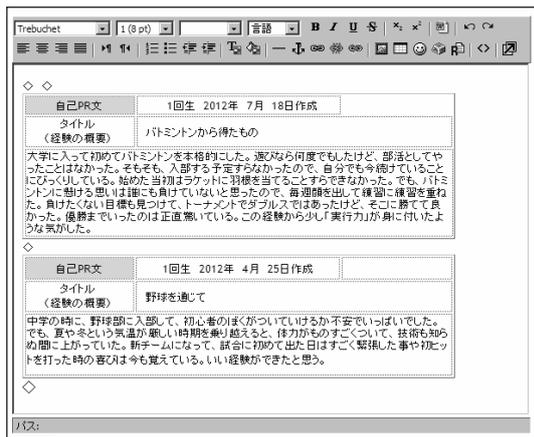


図7 ePFに自己PR文を2度入力した例

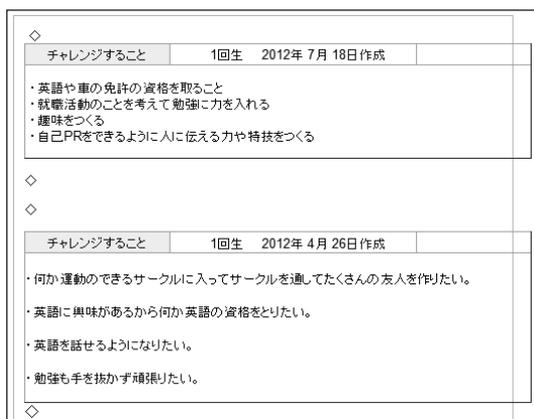


図8 ePFに長期目標のチャレンジすることを2度にわたって入力した例

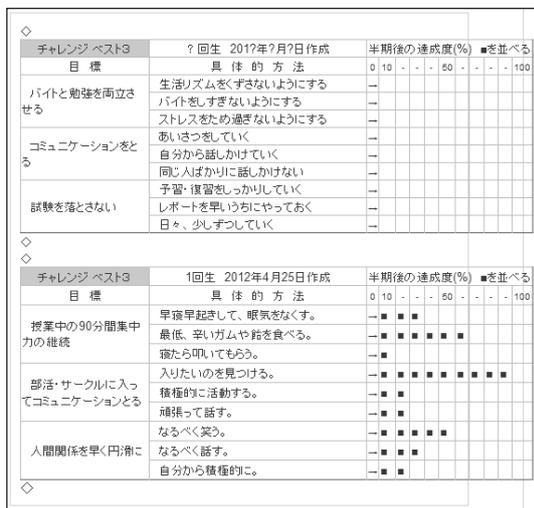


図9 短期目標のチャレンジベスト3を2度入力し、下側の前回入力に対する達成度を入力した例

レンジ ベスト3」とそれぞれの具体的実現方法を入力してもらい、半期後にはその達成度を自己診断しその右側にマークで示すように指導した。図8に長期目標の内容を2度にわたって入力した例を示す。前回入力の上側に表の枠をコピーして、入力できている。図9には、短期目標を3つとそれぞれについての達成の

ための具体的方法を2度にわたって入力した例を示す。図9下側の入力は前回入力された内容であり、その表の上に今回入力するための表を貼り付けるが、前回の達成度を■のマークを並べる方法で示せるように工夫した。

4.3 2年目の運用における評価方法

1年目の運用では、2つの「振り返り」それぞれに評点（各2点満点）とコメントを毎回返していたが、2年目の自己PRおよび2つの目標に対しては評価を行わず、別の観点からの評価を行った。

2年目の運用では、5回目、10回目、15回目の授業終了時にワークブックを回収し、機構の教員らで分担して、図10の下側の表に示すように、「ワークの記入」と「今日の振り返り」と「1週間の振り返り」についての評点と、コメントを返した。その後、評価結果を見ての感想を返してもらうようにメールを送った。学生からの感想は、図10の中央の2行のようなものである。なお、教員らによる評点とコメントの入力は、第10回終了時に集めたワークに対してのみ行われた。他の2回分の評点の入力は、西川先生お一人で評価された。



図10 ワークブックの評点・コメント（下側の表）と学生からの感想（中央の2行）

5. まとめ

23年度から始まったePFの運用は、教養演習Iの授業と連動する形で半期間の最初の運用が行われ、いくつかの問題点が明らかとなった。それらは大まかには以下のような事柄であった。①学生側から毎週頑張ったことを記録するのは難しいとの意見が寄せられた。②教員側も毎週評点とコメントを返すのは負担が大きい。③PDFファイルを介しての蓄積と評価は、双方ともに手間がかかる。こうした問題点を踏まえて、2年目の運用に向けて、蓄積すべき内容と頻度を見直し

た。具体的な変更内容を以下にまとめる。

ePFへの提出と評価の双方について、操作が複雑との意見があり、操作性が問題となった。2つの振り返りを2種類のPDFファイルに分け、それぞれを開いて入力して一旦保存し、間違わずにアップロードしなければならない。迷わず操作できるように手順を減らす改善が必要とされた。そこで、PDFファイルを介さずに、編集画面に表の枠をコピーした上でそこに入力する方法に変更した。これにより複数回の振り返りの内容を、同一画面上に蓄積することができ、操作手順を大幅に減らすことができた。

ePFへの提出の頻度に関しては、毎週2種類の振り返りを提出するようしていたのを、第3回と第15回にパソコン教室で入力する形式に変え、回数は2回に減らした。その2回の提出内容についても、教員による評価を行わず、純粋にePFへの蓄積だけとした。提出と評価に関する負担は大幅に軽減された。

ePFへの提出に対する評価がなくなった代わりに、ワークブックへの記入を3回に分けてチェックし、評点とコメントを学生側に返すようにした。その2回目については、機構の教員で分担して各17名程度のワークブックをチェックして、評点とコメントをePFに入力してもらった。学生にメールで連絡し、評点とコメントに対する感想をePFに入力してもらうようにした。評点に対する感想は非常に素直なものが多かった。

eポートフォリオへ何を蓄積すべきかを模索しながら進めているが、学生・教員双方が無理なく対応できることが重要である。それと共に、前期科目である「教養演習Ⅰ」終了後も、モチベーションを保ちながら継続してePFへの蓄積を続けてもらえるよう、指導と仕組み作りが必要である。

参考文献

- [1] 西川真理子、若槻健、梶木克則、増田将伸、石川朝子、「学生力」を高めるための「教養演習Ⅰ」(4)、甲子園大学紀要、No. 39、PP. 35-49、2012

高齢者の学習講座参加によるプロダクティブ・エイジング志向性の変容

藤田 綾子

平成24年10月31日受理

Change in Productive Aging Intensity by Participation for Aged People's Learning Class

Ayako Fujita

要 約

研究目的：プロダクティブ・エイジング志向性が高齢者のための1年間の学習講座参加によって、変容するのか？また、その変容は受講する講座内容に影響を受けるのか？変容は、プロダクティブ・エイジング志向性のどのカテゴリーレベルでも同じように起きるのかについて明らかにすることを目的とする。

調査協力者：高齢者のための学習講座参加者 371名 平均年齢 67.33歳 健康状態良好者 75.2% 経済状態普通以上 73.5%

方法：受講前と受講後に質問紙法で実施

結果：(1)講座受講前と後では、プロダクティブ・エイジング志向性得点は全体としては向上する。しかし、カテゴリーで見ると、少人数であったアーリーアダプターは牽引力とならず、より低いカテゴリーの多人数の方向に引き込まれていた。(2)受講講座の内容によっても変容は異なっている。(3)各カテゴリーから次のステップへの変容には違いはなく、キャズムは見られなかった。

キーワード：プロダクティブ・エイジング、イノベーション理論、高齢者学習講座、キャズム

ABSTRACT

Objectives : 1 Aging people can change their productive aging intensity through learn in class for aged people's class. 2 Productive aging intensity changing is influenced by learning subjects. 3 Category of Productive aging intensity from early majority to early adopter is more difficult than other changing from one category to other category.

Subjects : Data for this analysis 371 aging people who learn at the class for aged people.

Results : Productive Aging Intensity changed from before to after learn at the class for aged people. And the changing is different by class subjects. Casm is not appear within all Category of Productive Aging Intensity Scale.

Key Words : Productive Aging, Inovation Theory, Learning Class for Aged People, Casm

はじめに

藤田 (2010) は、超高齢社会（高齢化率が20%を超えた社会を超高齢社会と呼ぶが、我が国は平成24年時点で23%である）において、元気な高齢者のサクセスフル・エイジングとして「プロダクティブ・エイジング」志向性を高めることを提案している。

「プロダクティブ・エイジング」という概念は、Butler (1985) が、高齢になっても生産的・創造的な能力を維持している人が多いにも関わらず、根拠のな

い慣行や偏見などの年齢差別（エイジズム）によって、高齢者の能力が生かされていないことから、年齢差別への反論として提唱した考えである。

プロダクティブ・エイジング活動の定義は、一般に「報酬があるかないかにかかわらず、物財やサービスを生産する活動」と定義され、具体的な活動としては、「有償労働」、無償であるが有償労働に置き換えることもできる「ボランティア活動」「親戚や友人、近隣に対する無償の支援提供」(杉原2010 Herzog et al.

1989)などを指している。

プロダクティブ・エイジング活動は、高齢者がプロダクティブ・エイジング活動を行うことで、身体・心理面の両方に良好な効果をもたらす可能性が期待される活動である。そのメカニズムは、プロダクティブな活動を行うことで、意味のある社会的な役割を担っているという意識を持つことができ、自己評価が高まりそのことによって心身の健康に良い結果がもたらされるという、いわば、個人にとっては「健康予防」「いきがい」をもたらす、社会的には貢献できる活動である。そして、プロダクティブな活動への参加は、身体・心理面に問題が少ない高齢期の人にとっての選択的な行動として推進されている。

しかしながら、我が国においては「お年寄りを大事にすること」が「社会から疎外して閉鎖的な環境の中で優遇する」という考えが根強いために、高齢者に新しい役割を提示することに躊躇する傾向があった。

そこで、藤田(2010)は、プロダクティブ・エイジングの可能性を探るために、社会的要素として「地域・仲間への貢献因子」「次世代への社会貢献」、個人にとっての要素として「自己成長因子」「精神的充実因子」からなる「プロダクティブ・エイジング志向性尺度」を開発した。

プロダクティブ・エイジング志向性尺度による志向性の類型化には、Rogers(1993, 1995, 2003)のイノベーション理論が導入されている。

イノベーション理論とは、様々な考え、モノ、生き方など次々に新しい考えを基盤にしたコトが生まれ出されて行くが、これらの新しい考えの中には、多くの人に広がっていくものと、そのまま泡のように消えていくものがある。多くの人に広がっていくものについて、最初に取り組んだ人を「イノベーター」(革新者)というが、その人達の考えが多くの人に普及していくプロセスがイノベーション普及過程である。青池(2007)によると、イノベーションの普及過程は、あらゆる社会システムや時代において、普遍的に存在しているコミュニケーション過程であるという。

Rogers(2003)も、イノベーションとは、個人もしくは他の採用の単位によって新しいものと知覚されたアイデア、行動様式、モノであると定義しており、潜在的採用者である人々や採用に単位によって新しいものとされた製品・施設・設備・スタイル・技術・情報・ノウハウなどあらゆる分野にイノベーションはあるという。

そして、新しいイノベーションを採用する速さの度合いに基づき、人々のイノベティブネスを測定し、採用者を5つのカテゴリーに分類している。その5つ

のカテゴリーは、新しいイノベーションに興味を示し、最も早く体験・習得する人を「イノベーター」と命名し、そのような人は対象者全体の2.5%にあたると思う。次に、イノベーターと同じように新しいイノベーションに興味・関心は高いが、採用したことによる利得・損益を重視して判断して取り組む人を「アーリーアダプター」と命名されている。これらの人はまだ採用していない人の参考にされる人でもあり、対象者全体の13.5%と考える。3つ目のカテゴリーは「アーリーマジョリティ」と命名され、新しいイノベーションへの興味はさほど高くはなく、イノベーションを採用するに当たり、実用性を重視する人たちである。新しいイノベーションを成功させるためには、このカテゴリーの人たちを動員する必要がある、対象者の中で34%を占めていると考える。4つ目のカテゴリーに類型化される人は「レイトマジョリティ」と命名され、このカテゴリーに属する人たちは、新しいイノベーションに対して懐疑的であるため、周囲のほとんどが採用し、採用すれば確実にメリットが得られるという確信が得られないと採用しようとしにくい人であるが、この人たちが採用すればイノベーションは一気に広まることができることが期待でき、34%がここに属している。5つ目は「ラガード」と命名され、これらの人は新しいイノベーションに興味は全くなく、このカテゴリーの人々に新しいイノベーションを体験・習得させることは難しいとされている人で残り16%である。

Rogersは、5つのカテゴリーのうち、「アーリーアダプター」のイノベーションの採用がイノベーション普及過程の核心であると述べているが、Moore(1991)は、5つのカテゴリーの間には、それぞれのカテゴリーの特性が異なっているために普及に対してはスムーズに行くところとなかなか移行できないカテゴリー間に溝がある関係があるところがあると指摘している。例えば、ハイテク商品のマーケットでは、「イノベーター」と「アーリーアダプター」で構成される初期市場と「アーリーマジョリティ」以下のカテゴリーの人々である実利主義者で構成されるメインストリーム市場が存在する。ハイテク商品のマーケットでは、初期市場からメインストリーム市場に持って行ければ、その商品は成功となり、無理であれば、失敗となってしまう。Mooreは、この初期市場からメインストリーム市場へと移り変わる場所に大きな「溝」(彼はキャズムと呼ぶ)が存在するという。「キャズム」は、「アーリーアダプター」と「アーリーマジョリティ」の共通点が少ないことから導き出されたものである。「アーリーアダプター」は変革のために手段を求めるのに対して、「アーリーマジョリティ」は、改善や進化を目指して

手段を求めている、「アーリーマジョリティ」にとって「アーリーアダプター」は自分たちとは異なる生き方の人であると参考にしようとしないう、という主張をしている。Moore のこの主張は、「キャズム理論」と呼ばれる。

さて、先述したように、Butler (1985) 藤田 (2007) は、高齢者の新しい生き方 (イノベーション) として「プロダクティブ・エイジング」を提唱し、藤田 (2010) はそのための意識の変革を測定する「プロダクティブ・エイジング志向性尺度」を開発し、その尺度に基づく類型化にあたっては、Rogersの考えをもとに、5つのカテゴリーに分類するために、カッピングポイントを地域のサンプリング調査で算出した。

藤田 (2011) では、社会貢献を教育目標とする高齢者教室 (週1回、1年コース) の受講者を対象に、受講前と受講後のプロダクティブ・エイジング志向性のカテゴリーの変化について調査を行った結果、33%の高齢者が上位方向に変化を示したことによって、社会貢献を教育目標とする高齢者教室の影響が出ていることを明らかにした。

しかし、藤田 (2011) の受講前と受講後の比較は、それぞれの時期についてトータルな集計であり、個人がどのように変化したのかについての分析は行っていない。

従って、Mooreの述べる「キャズム」がプロダクティブ・エイジング志向性においても現れるのか否か、つまり高齢者教室においてプロダクティブ志向性を提唱するために、受講生にみな同じように働きかけるのか、それともキャズムが存在するならば、「アーリーマジョリティ」以前のカテゴリーの人と「アーリーアダプター」「イノベーター」は異なる働きかけを必要とするのかについて、探索する必要がある。

そこで、本研究においては、高齢者の社会貢献を理念とする高齢者教室で1年間にわたって学ぶという学習経験が、プロダクティブ・エイジング志向性の変容にどのような影響を与えるかについて、プロダクティブ・エイジング志向性をRogersのイノベーター理論によって5つのカテゴリーに類型化できる尺度を用いることで、下記の仮説について検討することを目的とする。

仮説1

高齢者が社会貢献活動を通して自らの生きがいを高めていくことを目的とした学習講座での学びは、プロダクティブ・エイジング志向性を高めるであろう。

仮説2

仮説1は学習講座の講座内容によって異なるであろう。

仮説3

プロダクティブ・エイジング志向性カテゴリーにキャズムが存在するとしたら、受講前から受講後にかけての変容はアーリーマジョリティからアーリーアダプターの間で変容率が低くなるであろう。

方法

調査協力者

大阪府下NPO 高齢者教室 受講者706名 記名については自由意思に任せる

調査の対象とした高齢者教室は、教育理念として「社会貢献活動」を通して生きがいを高めること (プロダクティブ・エイジング) を掲げており、高齢者による高齢者のためのNPO組織である。高齢者教室は、行政によって運営されていたものを高齢者が受け継ぎ、自律的に自主的に運営している

分析対象者

受講前と受講後に名前を記入した人371名 (受講者全体の52.5%) を対象とする

調査方法

入学式直後 (受講前) と1年間の受講が修了する間際 (受講後) の2回行う。

アンケートを授業終了後に配布、回収箱による回収

調査時期

受講前: 本格的に講座が開始されていない時期の平成22年5月

受講後: 修了間もない時期の平成23年2月

調査内容

- 1 属性 (年齢・性別・健康状態・経済状態・受講講座)
- 2 生活満足度尺度 (PGCモラル尺度)

Lawton (1975) によって開発された尺度で、「(心理的安定) = 自分自身についての基本的な満足感」「(老いに対する態度) = 動かしえないような事実については、それを受容できていること」「(孤独感・不満足感) = 環境の中に自分の居場所があるという感じを持つこと」の3つの因子からなり、17項目の質問項目である。

- 3 プロダクティブ・エイジング志向性尺度

藤田ら (2010) によって開発された20項目、5段階評定の尺度「地域・仲間への貢献因子」「次世代への社会貢献」「自己成長因子」「精神充実因子」4因子から構成されている。カテゴリーとして、「イノベーター」「アーリーアダプター」「アーリーマジョリティ」「レイトマジョリティ」「ラガード」に分類する。

- 4 修了後活動参加意向

趣味活動 社会貢献活動について2択

結果

1 属性

表1 分析対象者の属性

項目	回答
性別	男性：204名 (55%) 女性：167名 (45%) 合計 371名
年齢	最年少60歳、最年長85歳 平均67.33歳 (標準偏差 4.7)
経済状態	ゆとりあり (58名 15.6%) ふつう (252名 67.9%) ゆとりなし (53名 14.3%)
健康状態	良い (279名 75.2%) どちらともいえない (68名 18.3%) 良くない (20名 5.4%)

調査協力者の属性の平均像は、女性より男性がわずかに多いが、60歳から74歳までの前期高齢者で、経済的にはゆとりがないという人は少なく、普通以上に思っている人であり、主観的健康は良いと言える。

2 受講講座

具体的な受講講座は23科目であったが、科目の内容から4つにまとめた受講者である。

表2 分析対象者の受講講座

受講科目	実数名	%
地域貢献 (地域コミュニティ・伝承)	47	12.7
歴史 (歴史・考古学 史跡)	140	37.7
趣味 (音楽・落語・アウトドア・美術・IT)	112	30.2
教養 (英会話・古典文学・現代社会を考える)	72	19.4

地域貢献を真正面から看板に上げた講座は2つしかないため、受講者数は12.7%と1割強である。さらに、他の講座は、定員充足率は100%を超えているが、この講座の定員充足率は78%で、唯一未充足の講座である。地域貢献活動が目標であるという考え方の講座への参加が少ないことは地域貢献活動が、イノベーションであることなのか、それとも、地域貢献活動は結果であり、学習の場は、地域貢献するための道具であり中身を学ぶ場になっているのか。修了後の地域貢献活動への参加を推進することを目標とした場合、位置づけについて分析が必要である。対象とした高齢者教室の講座の開設は、希望者の多い講座を基本的に増設していくという考えで運営されており、高齢者の「歴史」に関する関心の高さが受講者37.7%に示されている。「歴史」は「教養」にも含めることができるので、高齢者教室の講座は6割近くが教養関連、3割が趣味、残り1割が社会貢献を目指した講座である。教養、趣味ともに、直接の目的は、個人の生きがいを目指した講座である。

3 生活満足度

PGCモラル尺度で測定した受講前と後の全体の平均値の変化には有意な差は見られなかった。

PGCモラル尺度は「心理的安定」「老いに対する態度」「孤独感・不満足感」から構成されているので因子ごとの平均値の差を比較した。その結果、心理的安定に関しては有意に上昇していることが確認され、高齢者教室での心理的な面については、「心理的安定」に効果があることが明らかになった。

表3 PGCモラル得点の変化

PGCモラル得点 N= 371	受講前 平均 (SD)	受講後 平均 (SD)	t検定 (相関値)
総得点	12.87 (3.60)	12.89 (3.96)	NS r=.19
心理的安定	6.28 (1.09)	6.97 (1.33)	P<001 r=.34
老いに対する態度	7.36 (1.05)	7.41 (0.96)	NS r=.17
孤独感	7.00 (0.87)	6.97 (0.83)	NS r=.22

4 プロダクティブ・エイジング志向性について

1) 得点の変化

プロダクティブ・エイジング志向性尺度得点の受講前得点は、66.01 (SD=18.13)、受講後得点は69.14 (SD=19.81)、相関係数 $r=.11$ ($p<.05$) であり、対応のある差のt検定を行った結果有意な差があることが確認された。相関値も値は低い有意であり、受講前に高い人は受講後も高いことが推測される。そして、全体平均として受講後は受講前より3.13ポイント高くなっており、1年間の学びによってプロダクティブ・エイジング志向性が平均として高まることが推察される。

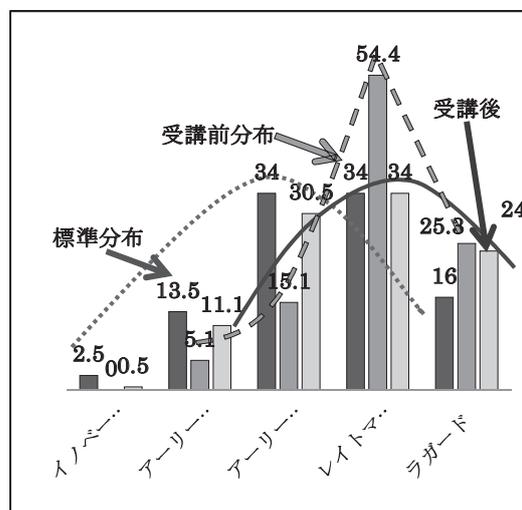


図1 プロダクティブ・エイジング志向性のカテゴリー

表4 受講前から受講後のプロダクティブ・エイジング志向性カテゴリの変化

(上段 実数、下段 %)

		受講後					総計 名 %
		イノベーター	アーリーアダプター	アーリーマジョリティ	レイトマジョリティ	ラガード	
受講前	イノベーター						0
	アーリーアダプター	0 0	4 21.1	4 21.1	5 26.3	6 31.6	19 100
	アーリーマジョリティ	0 0	14 25.0	24 42.9	9 16.1	9 16.1	56 100
	レイトマジョリティ	1 .5	18 8.9	65 32.2	86 42.6	32 15.8	202 100
	ラガード	1 1.1	5 5.3	20 21.3	26 27.7	42 44.7	94 100

2) カテゴリの変化

図1において、標準分布は、Rogersの提案するカテゴリ分布であり、これはまた地域高齢者のサンプリングデータの分布でもある。受講前のプロダクティブ・エイジング志向性のカテゴリは、レイトマジョリティが54.4%、ラガードが25.3%であり両者を合わせると、79.7%になり、プロダクティブ・エイジング志向性の低い人が標準の50%よりかなり多いことが明らかになった。「レイトマジョリティ」は、新しいイノベーションに対して懐疑的であるため周囲のほとんどが採用し、採用すれば確実にメリットが得られるという確信が得られないと採用しようとならない人であるが、この人たちが採用すればイノベーションは一気に広まることができることが期待できる人たちでもあると言われている。一方、「ラガード」のカテゴリの人は、新しいイノベーションに興味は全くなく、このカテゴリの人々に新しいイノベーションを体験・習得させることは難しいとされている人たちである。

受講後では、ラガードの割合はほとんど変わらないことから、このカテゴリの人たちは、プロダクティブ・エイジングについて興味がなく、1年後においても興味を示さないという一定の人たちの存在を示唆している。一方、レイトマジョリティは20%減少し、アーリーアダプターは5.1%から11.1%へ、アーリーマジョリティは15.1%から30.5%と2倍に増加して、標準分布に限りなく近づいている。標準分布に近いことは、高齢者教室を受講する人たちが、受講前は、地域への関心よりも自分の趣味・教養を高めることに関心の強い人たちであったともいえる。また、受講前にイノベーターであった人はいなかったため、このカテゴリからの変化はない。次にアーリーアダプターからの変化は、ラガードへの変化が31.6%と最も大きい。アーリーアダプターは本来後続の手本になることを期待される人たちであったが、むしろ変革を求めない大多数に影響を受けて、プロダクティブ・エイジング志向について後退を示している。

アーリーマジョリティであった人は、新しいイノベーションへの興味はさほど高くはなく、イノベーションを採用するに当たり、実用性を重視する人たちであるが、そのままの状態に留まっている人が42.9%いて、状況を検討中であることが分かる。

レイトマジョリティの人たちは、周囲のほとんどが採用し、採用すれば確実にメリットが得られるという確信が得られないと採用しようとならない人であるが、そのまま留まる人が42.8%で半数近くが動いていない。

ラガードであった人は、そのままラガードに留まった人は44.7%で歩留まり率は最も高い。しかし、ラガードの人の中には、レイトマジョリティへ27.7%、アーリーマジョリティへ21.3%、アーリーアダプターへも5.3%、イノベーターへ一人であるが変化した人もいて、半数以上は必ずしもかたくなに変化しない人ではないことが分かった。

5 プロダクティブ・エイジング志向性カテゴリと修了後の活動意向

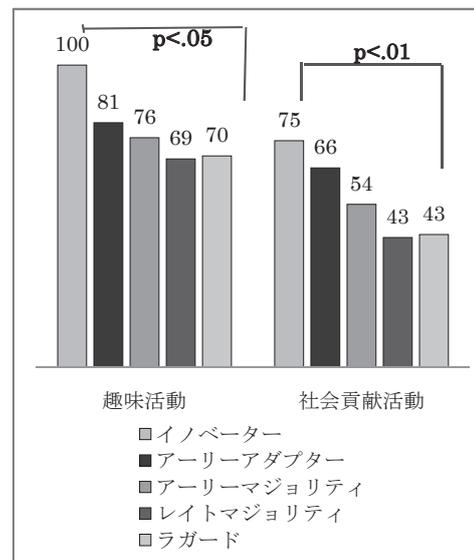


図2 講座修了後の活動意向

講座修了後の活動について、「社会貢献活動」と「趣味活動」について参加意向を「はい」「いいえ」の2件法で尋ねた結果、いずれもカテゴリー間に有意な差があり、イノベーターが最も活動参加への意向が高く、レイトマジョリティ、ラガードは低いことが一元配置分散分析の結果明らかになった。

6 講座内容とカテゴリーの変化

表5 講座内容とカテゴリーの変化

講座		①%	②%	③%	④%	⑤%
地域	前	0	0.4	23.4	51.1	3.6
	後	2.1	21.3	38.3	17	21.3
歴史	前	0	2.9	13.6	55	28.6
	後	0	9.3	31.4	39.3	20
趣味	前	0	8	15.2	51.8	25
	後	0.9	12.5	29.5	32.1	25
教養	前	0	4.2	12.5	59.7	23.6
	後	0	5.6	25	37.5	31.9

①イノベーター②アーリアアダプター③アーリーマジョリティ④レイトマジョリティ⑤ラガード

講座によって受講前と後でのカテゴリーの変化に有意な差があるかどうかについて、度数に基づき X^2 検定を行った結果（5以下の実数のセルは除く）「教養」を除いて有意な差があり、受講前より受講後にレイトマジョリティが低下しアーリーアダプターが増加している結果であった。

考察

本調査の対象者は、健康は良好で、経済的には「ゆとりがない」ことはない前期高齢者の人たちであり、プロダクティブなエイジングを高齢期の生き方として選択することができる可能性を客観的には持っていると言える。しかし、受講者の、受講前のプロダクティブエイジング志向性のカテゴリーでは、レイトマジョリティとラガードに8割近くが当てはまっていて、プロダクティブ・エイジングへの関心は高いとは言えない。「レイトマジョリティ」は、新しいイノベーションに対して懐疑的であるため、周囲のほとんどが採用し、採用すれば確実にメリットが得られるという確信が得られないと採用しようとならない人であるが、この人たちが採用すればイノベーションは一気に広まる可能性があることが期待できる人たちでもある。一方、「ラガード」のカテゴリーの人は、新しいイノベーションに興味がなく、このカテゴリーの人々に新しいイノベーションを体験・習得させることは難しいとされている人たちである。

このような人たちが1年間の学びによって、プロダ

クティブ・エイジング志向性をどのように変化させるのかについて検討をしたのが本研究の目的であった。

仮説の検証

仮説1「高齢者が、地域への社会貢献活動・参加活動を通して、自らの生きがいを高めていくことを目的としている学習講座での学びは、高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性を高めるであろう」について

結果は、受講前より受講後にプロダクティブ・エイジング志向性得点は有意に上昇しており仮説は検証された。

また、カテゴリーについても、受講前と受講後では X^2 検定をおこなったところ（イノベーターは除く）有意な差があり、カテゴリーの変化があったことがわかった。具体的には、受講前にレイトマジョリティとラガードで8割近くあったものが、受講後では6割近くまで低下し、イノベーターの方向にシフトしていることが明らかになった。しかし、受講前にアーリーアダプターであった人が、受講後にもっとも関心のないラガードに3割、レイトマジョリティへ3割近く、アーリーマジョリティに2割と最も多様な変化を見せている。このような多様な変化が起きたのは、受講前は、アーリーアダプターは5.1%にすぎなかったため、受講者全体の中ではごく少数者であった。そのために、アーリーマジョリティ以下の人たちのモデルになるというより、多数に影響を受けて志向性が低下するという事になったと考えられる。特に、イノベーターが誰もいなかったこともアーリーアダプターを心細くさせたのかもしれない。志向性の高い人が次に続く人を引っ張るような影響力を発揮するためには、その人自身も引っ張ってくれるような力が必要である。

仮説2「仮説1は学習講座の具体的な内容によって異なるであろう」について

プロダクティブ・エイジング志向性得点の受講前と受講後の平均値について、講座の内容ごとに差の検定を行った結果、「教養講座」を除いて有意に上昇していた。「教養講座」は他の講座に比較して座学で個別学習が多い。新しい価値規範の習得に効果があるのは小集団による話し合い、小集団による意思決定であることはK. Lewin (1939)の実験で証明されていることでもある。

プロダクティブ・エイジング志向性について直接話し合いをすることはなくても、グループ学習の機会を持つことで、インフォーマルなグループ仲間も形成されやすく、仲間が形成されれば、その仲間は高齢者講座の中で形成されたのであるから、高齢者講座の理念の価値観が共有された仲間である。

このように考えると、価値の共有のためにも、小集団による学習の推進が期待される。

仮説3「プロダクティブ・エイジング志向カテゴリーにキャズムが存在するとしたら、受講前から受講後への変容は、アーリーマジョリティからアーリーアダプターへの変化が他の隣のカテゴリーへの変化と比較して最も少ない」について

結果は、アーリーアダプターからイノベーターへは0%、アーリーマジョリティからアーリーアダプター以上へは25%、レイトマジョリティからアーリーマジョリティへは、32.21%、ラガードからレイトマジョリティへは、27.7%の変容をしている。(表4)

アーリーマジョリティからアーリーアダプターへの変容の間に「キャズム」と呼ばれる移動を阻む溝があるのかについてみると必ずしもプロダクティブ・エイジング志向カテゴリーについてはキャズムと呼ばれる現象はない。

一方、歩留まり率について比較すると、アーリーアダプターは21.1%、アーリーマジョリティは42.9%、レイトマジョリティは42.6%ラガードは44.7%であり、アーリーアダプターの歩留まり率が最も低いことがわかる。このことは、アーリーアダプターが、プロダクティブ・エイジング志向性についてイノベーターであった人が革新者として存在しなかったため、ラガードやレイトマジョリティの多数派を引っ張るのではなく、多数派の方向に引っ張られるという影響を受けたと推察され、イノベーターの存在の必要性が確認され、必ずしもキャズムは発生していないといえる。

また本調査対象者のプロダクティブ・エイジング志向性は正規分布を示していなかった。Mooreの言うようにキャズムが起きる要件としては、正規分布が必要となるのではないだろうか。

参考文献

- 青池慎一 2007 イノベーション普及過程論 慶応義塾大学出版会
- Butler, R. N. 1985 Productive Aging: Enhancing vitality in later life. Springer
- Butler, R. N. 1998 (岡本祐三訳)「プロダクティブエイジング」日本評論社
- 藤田綾子 2007「超高齢社会は高齢者が支える」大阪大学出版会
- 藤田綾子 2011「高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性尺度の開発と応用に関する調査研究」甲子園大学紀要 38号 163-172
- 藤田 綾子 2012「高齢者の高齢者による学習講座企画・運営に関するモデル構築のためのアクションリサーチ」甲子園大

Android タブレットのプログラミング演習

梶井 猛

平成24年10月31日受理

Seminar of Programming for an Android tablet device

Takeshi Masui

[概要]

2010年以降のiPad、スマートフォンなどの手軽なモバイル端末が普及する中で、大学におけるパソコンを利用した演習も時代とともに変化している。大学におけるパソコンの演習も学部の専門分野を対象とする演習から入学生を対象とした教養リテラシーとなり、モバイル端末も対象となりつつある。筆者の担当してきた現代経営学部の卒業演習のゼミナールでは、パソコンだけでなくモバイル端末を対象とした演習を行ってきた。モバイル端末は、屋外で使用するデバイスであるので、クラウドコンピューティング、およびデータの同期について、パソコンの操作は異なる。アプリを作成するための演習は、モバイル端末を活用するための必要な演習となりうる。今回、これまでのパソコンのプログラミング演習と比較して、平成23年度専門ゼミナールで実践したモバイル端末のOSであるAndroid のアプリを作成するプログラミング演習について報告する。

キーワード：プログラミング演習、プログラミング開発環境、モバイル端末、Android

1. はじめに

インターネットの普及により、パソコンは日常生活におけるネットサービスの端末になり、大学における新入生を対象とするリテラシー教育において、電子メール、Web検索からワープロ、表計算ソフトの学習が情報処理教育の必須課題となっている。

2010年以降、これまで広く利用されている携帯電話に代わって、幅広いインターネットサービスが利用できるスマートフォン、iPadに代表されるMID (mobile internet device、モバイル端末) が普及し始めデジタル機器のリテラシーに変化が出てきた。学生は携帯でメールを利用し、大学のパソコンで電子メールを利用しない。Webサービスを始めとするインターネットサービスはパソコンを利用しないでスマートフォンを使う。大学のパソコンは、レポートの作成ツールになっている。一般の講義においても、MIDが利用され始め、今後大学においてもMIDはインターネットサービスを利用する主要なデバイスになりつつある。携帯電話と異なって、Androidを搭載したスマートフォンやタブレット端末は、Androidに対応した便利なアプリを自由にインストールして楽しむことができる。スマートフォンに取り込んで使うアプリ、実用的なものからゲームまで、話題のアプリには無料のものが多い。ア

プリはプログラムの知識とパソコンがあれば作成できる。大手企業が販売促進のために作成するアプリもあるが、アプリビジネスは既に過当競争になっている。スマートフォンのアプリによって、情報端末の利用方法が変化している。Androidのアプリはインターネットで無料で配布されている開発キットを利用することで作成できる。

筆者の現代経営学部の専門のゼミナールは、平成22年度(2010年)より、「Androidで何ができるか」をテーマとして、Windowsパソコンの仮想化ソフト上で動くAndroid、Wi-Fi接続のAndroidタブレット端末を利用して、Androidを利用した演習を行ってきた。本稿では、筆者がこれまでパソコンで実践してきたプログラミング演習、とりわけC言語、Java、Flashなどと比較して、平成23年度(2011年)のゼミナールで実践したAndroidのアプリのプログラミング演習について報告する。

2. 現代経営学部の情報処理演習

コンピュータの登場以来、コンピュータを利用するための学習は、専門家によるデータ処理のためのオペレーションの習得であり、業務プログラムを利用する以外、個人でもプログラムを作成しなければ計算結果

を得られなかった。個人が利用できるパソコンの登場によって、コンピュータに対する学習が変化し、パソコン操作の学習が必要になった。

1980年以降、個人で購入できるパソコンが販売されてきたが、実際に利用できるアプリケーションが少なく、ゲームプログラムから実務まで、世の中ではBASIC言語を利用したプログラムを作成してパソコンを利用していた。当初パソコンを利用するためには、必要なプログラムがなく、プログラミングを作成するために、プログラミング作法を学習した。ワープロなど実務で利用できるアプリケーションが販売されると、学校における情報処理教育においてプログラミングより、実務に利用できるアプリケーションの使い方の学習が主流になってきた。

パソコンの高機能化によって、パソコンで動作するプログラムの作成が容易ではなくなり、プログラム作成のための開発環境を構築しなければ、プログラムが作成できなくなってきた。アルゴリズムの学習のためのプログラミングさえ、入門教育用の演習として敷居が高くなってきた。論理的な思考を学習できるコンピュータのプログラミング教育は、コンピュータ専門学校、コンピュータサイエンス関係の学部の専門科目として開講されている。

本学の現代経営学部は1986年経営情報学部設立以来、情報処理教育は専門科目として、1回生から4回生まで4年間にわたって開講されていた。情報処理教育センターの大型計算機のTSS端末を利用した情報処理演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの科目と卒業演習でコンピュータの演習を実践してきた。

その中で、大学でのコンピュータの演習も大型計算機で利用できるBASIC、FOTRAN、COBOL言語のプログラムの作成、実行、計算結果の出力が課題であった。現代のパソコンと利用方法と異なり、大型計算機を使用したデータ処理であった。

1990年代に入ると、フロッピーディスクの普及とともに、パソコンのOSであるMS-DOSとアプリケーションが普及し、個人で利用できるパソコン環境が実用化

レベルになった。大学でのコンピュータ演習環境も大型コンピュータからパソコンになり、MS-DOS上で動作するBASIC、PASCAL、C言語などのプログラムが開発できるソフトウェアが販売され、プログラムの作成・実行が簡単にできるため、学校教育においても多く利用された。表1に1994年度の1回生の必須科目である情報処理演習Ⅰのカリキュラムを示す。パソコンの基礎から3種の神器といわれるワープロ、表計算、データベースというアプリケーションの学習であり、C言語のプログラミングはアルゴリズム学習として実践されていた。パソコンの操作は、MS-DOSのコマンドの学習であった。表2に3回生の必須科目のC言語演習のカリキュラムを示す。構造化プログラミングによる文法、PADを使用したアルゴリズム学習、応用プログラムの作成で半期15回のプログラミング演習であった。

1995年、TCP/IPのネットワークが標準でサポートされたWindows95の発売以来、インターネットの基盤の整備とともに、大学のパソコンは学内LANに接続され、インターネットにアクセスできる環境が利用できるようになった。パソコンに対する操作もCUIからGUIに変化し、ビジュアルなデスクトップ画面とマウス操作によって、実用的なアプリケーションが利用でき、電子メール、Web検索、ワープロ、表計算などのアプリケーションが情報処理の主要な演習課題となった。

その後、ファイルサーバ、プリンタサーバ、学内ポータルサーバ、eラーニングなどの学内LANのサービスの整備とともに、OSもWindows NT、Windows2000と更新され、2002年以降Windows XPパソコンが導入されて、現在までコンピュータリテラシー教育が実践されている。パソコンの学習は、リテラシーとしてワープロ、表計算の操作に慣れるだけでなく、パソコンで何ができるかを学習することも必要である。最近のパソコンは、利用するアプリケーションによって、音楽、ビデオの再生から、データベースまであらゆる処理ができる。コンピュータリテラシーの演習内容が変化の中で、ビデオ編集、アニメーション、コンピュータ

表1 1994年(平成6年)の演習Ⅰカリキュラム

区分	項目
第1回	コンピュータの仕組み
第2回	フロッピーディスクについて
第3回	キーボードとプリンタについて
第4～7回	ワープロの使い方
第8～9回	MS-DOSの基礎知識
第10回～	アルゴリズム入門 C言語プログラミング
付録	MS-DOSコマンド一覧

表2 1994年(平成6年)のC言語カリキュラム

区分	項目
第1部 基礎編	コンパイルとリンク、標準ライブラリ、書式付きprintf関数、データの型、変数、配列、関数、If文、while文、for文、ポインタ
第2部 書式	プログラムの書き方
第3部 PAD	アルゴリズムの学習
第4部 応用	電子掲示板の作成

ゲームなどWeb上で動作するプログラミングが演習のテーマとして登場してきた。

3. プログラミング演習

プログラミング演習はアプリケーションが普及していない時代のアルゴリズムの学習として位置づけられ、パソコン演習として実践されていた。初心者が作成したプログラムは、動作の確認のため学習するのであって、実用に役に立たない。プログラムを作成するプログラミングの基礎を学習して、パソコンの機能が理解でき、パソコンを活用するスキルが向上できれば、初心者にとってプログラミングを行う価値は十分にある。

パソコンで利用できる言語として、ポピュラーなCから、Java、ホームページで利用できるHTML、JavaScript、PHPまで、プログラム環境を整備すれば、文化系の学生を問わずパソコンさえあればプログラミングの演習は可能である。表3に代表的なプログラム言語を示す。

ブロードバンドに対応したビデオ配信などのサービスが増し、デジカメ、デジタルビデオをはじめとするデジタルメディアの普及、DVDビデオの普及と共にTV放送の鑑賞・録画できるパソコンが家庭まで広がっていく中で、デジタルコンテンツはますます利用されている。プログラミングの学習は、文法の学習だけでなく、作成したプログラムの結果がデジタルコンテンツを扱ったほうがわかり易いため、単なるデータ処理よりデジタルコンテンツを対象としたプログラミングに人気がある。近年のWebページはテキスト、イラスト、写真などの画像だけでなく、音声、音楽、アニメーション、ビデオの貼り付けが多くなり、エンターテイメントに富んだものになっている。画像、アニメーション、CGなどのコンテンツを対象とするプログラムを一度は作成したいと思う学生は多い。

コンテンツを扱うには、Windows上で動作するプログラム、Webブラウザ上で動作するプログラムがある。Windowsのプログラムは、Microsoft社のVisual C++、Visual BASICなどの言語でプログラミ

ングされたものが主であるが、Windows上で動作するプログラミングは、一般的に初心者にとって簡単なものではない。Windowsプログラミングで一番基本的な開発環境であるVisual C++は、Windowsの標準のアプリケーションでないので、他のソフトウェアと異なり、演習用に別途購入する必要がある。本格的なプログラミング学習で使用するには必要となる。

Javaのプログラミングは、フリーのJDK を使用することによって、デジタルコンテンツを扱うことができる。基本的にWeb上ではアプレット、Windows上ではSwingコンポーネントを使用してプログラミングをする。インターネット上に多くのゲームプログラムが存在するので、演習に利用しやすいが、スレッドを使用してタイマーのイベントの制御をするなど、他の言語と処理方法が異なるので注意が必要になる。

Webページの作成は、ホームページ作成ソフトを使用することによってHTML言語を意識しないで作成することができるが、JavaScriptを使用することによってデジタルコンテンツを扱うこともできる。JavaScriptは、プログラム作成のためのエディタ（メモ帳）があれば、開発環境を意識しないでプログラミングができる点にある。実行環境のブラウザによって言語仕様が異なっているが、組み込みのライブラリを利用することによって、オブジェクト指向のプログラミングも行える。

Webサイトでアニメーションが増えたのは、ファイルサイズが小さくてすみ、アニメーションを制作するのにパラパラ漫画を制作する手順で、作品ができ、比較的簡単にできるMacromedia社のFlashが登場したからである。Macromedia社のFlashは、Webデザインなどで使用できるので、大学のパソコンで利用できればよいアプリケーションであり、個人で購入しても面白いソフトウェアである。

現代経営学部では、2000年よりFlash、C言語、JavaScriptを対象とするプログラミング演習を開講してきた。2回生以上のプログラミングに興味を持つ学生を対象とした選択科目である。FlashのAction Scriptを使用したアニメーションのプログラミングのカリキュラムを表4に示す。半期15回の選択科目のプログラミング演習である。Flashプログラムを起動するだけで、アニメーションプログラムが簡単に作成できる。

表5はMicrosoft社のVisual C++の環境でのプログラミング演習のカリキュラムを示す。プログラミングの基礎を学習したい学生を対象としている。表6はWebページを対象としたプログラミング演習のカリキュラムを示す。パソコンのプラットホームに依存し

表3 代表的なプログラム言語

言語	内容
Visual C++	Win32アプリケーションからMFCプログラミングまで
Java	Web上ではアプレット、Windows上ではSwingパッケージを使用
Java Script	スタイルシートの利用、ダイナミックHTMLの記述
Flash	Action Script

ないJava、Java Scriptなどの言語で書かれたプログラミングが中心である。

ゼミ室で使用するWindows XPパソコンに、基本的なプログラム環境として、Visual C++ 6.00、Java2 JDK 1.4、Flash MXを導入して、卒業研究などににおいて、プログラミングを学習する環境を整備してきた。

4. モバイル時代の情報端末

最近のケイタイは、機能が高くなり、電話機能だけでなく、メール、スケジュール管理など、キャリアが提供するサービスも多いが、学生はケイタイの操作方を学習するまでもなく利用している。必要なことができれば十分で、ケイタイの全てを知る必要もない。

ケイタイが発展したスマートフォンは、OSとしてアップル社のiOS、グーグル社のAndroidが導入され、

2012年インターネットにアクセスするデバイスは、これまでのWindowsパソコンから、MIDに広がっている。マウスの代わりにタッチパネルの操作でアプリケーションを利用するだけでなんでもできる道具となっている。MIDの活用方法がこれからのリテラシーになってくる。高機能になったMIDは学生にとって使い方を教えてもらわなくても利用できる電子デバイスである。パソコンを利用できなければ、社会で生きていけない時代から、クラウド、データの同期を必要とする新しい高機能なメディアであるMIDを利用する社会になってきた。

新しいメディアであるMIDは、標準でサポートしているアプリだけでなく、追加することによって、使いやすくなるアプリ、機能が向上するアプリがある。MIDにはどのようなアプリがあるのか、さらにどのように使えばよいのか解説書、手引書がないと使うことができないほど多くのアプリがある。「携帯電話とスマートフォンは何が違うのか」、「仕事・生活にどのように役に立つのか」、「スマートフォンを買えば何ができるのか」、「スマートフォンを活用するにはどうすればよいのか」、MIDに関する書籍が多く出版されている。

IT時代のリテラシーとしてパソコンの学習と同じように、MIDを使う立場で学習する価値はある。これからMIDが利用できなければ、日常生活および、仕事に差し支えが出てくるかもしれない。大学などの情報処理の演習で、MIDの基本的な学習が必要になるかもしれない。

Androidアプリは、一人で楽しめるものが各種揃っているのはもちろん、複数の利用者で使えるアプリも多い。いつでもどこにでももち歩けるしかも画面が大きいAndroid端末ならば、「自分が気に入ったゲームを周囲の人に見せて一緒に遊ぶ」といった楽しみもできる。Androidの楽しみ方をさらに深めるために、「自分でAndroidアプリを開発することも一つのテーマである。自分自身で作ったアプリを、手持ちのAndroid

表4 FLASHプログラムのカリキュラム

区分	項目	内容
第1回	ガイダンス	コンピュータゲームとは、作品の紹介
第2回	Flashの基本操作	起動および、アニメーションの作成
第3回	Action Script入門	フレーム、ムービークリップ、ボタンのアクションスクリプトの設計手法
第4～6回	フレームアクション	アニメーションのプログラミング（ボールの移動）タイマーの使用、乱数を使用したプログラミング
第7回	ムービークリップのアクションスクリプト	アニメーションのプログラミング（ボールの移動）
第8回	ボタンのアクションスクリプト	スタートボタン、ストップボタンのプログラミング
第9回	音楽の操作	音楽、音声、効果音のプログラミング
第10～14回	アニメーション作成	シナリオ作成、基本設計、デバッグ
第15回	作品の評価	

表5 C言語プログラムのカリキュラム

区分	項目	内容
第1回	ガイダンス	プログラミングとは
第2回	プログラミング言語	パソコンで利用できる言語
第3回	C言語入門	プログラムの開発環境について
第4回	C言語2	プログラムの書式
第5回	C言語3	制御構造
第6回	C言語4	応用問題（アルゴリズム）
第7回	C言語5	応用問題（カレンダーのプログラム）

表6 ホームページ関連のカリキュラム

区分	項目	内容
第8回	HTML言語	Webプログラム
第9回	CGI	フォームの設計
第10回	Javascript入門	プログラムの作成、実行
第11回	その2	Webページの作成
第12回	その3	Webページの作成
第13回	PHP入門	プログラムの作成、実行
第14回	その2	Webページの作成
第15回	まとめ	作成した作品の評価

端末にインストールしておき、家族や友人、同僚が集まる場所で披露することによって、MIDの楽しみ方が深まる。たとえ機能やビジュアルがシンプルなゲームアプリであっても、パソコンでのプログラムと違って、作成したプログラムは共有することによって実用になるかもしれない。

Androidアプリの作成は、パソコンのソフト開発ではなかなか味わえないような楽しみがある。デジタルカメラやGPSなど、パソコンでは周辺機器として追加しなければならないような機能を多くのAndroid端末は最初から組み込んである。こうした機能を活用した便利なアプリや楽しいゲームを作成することができる。携帯電話や無線LANなどの通信機能もほぼ標準装備しているので、インターネット上のサービスと連携したアプリも容易に作成できる。

作成したアプリの利用方法が、これまでのパソコンのプログラミングと異なっている。Androidのアプリは、アプリマーケットに登録して多くの人に試してもらうことも可能である。モバイル時代のMIDのアプリの作成は、開発者だけでなく、利用者にとってこれからの情報処理のテーマになるかもしれない。

5. Androidのアプリの開発環境

Androidアプリを作成するには、無料のアプリ開発ソフトとアプリ開発のためのパソコンが必要となる。これまでのパソコンのプログラミングの延長上で開発できる。最新のパソコンでなくても、自宅に余っている少々古いパソコンでもよい。表7にAndroidアプリの開発環境を示す。

パソコンのOSもWindowsやMacではなく、無料のLinuxで十分である。また作成したアプリは、米国Google社が運営するAndroidマーケットに登録する事で、世界中のAndroid端末のユーザに向けて公開することも可能である。アプリを公開するのに審査を受け

表7 Androidアプリ開発環境

パソコンのOS	Linux、Windows、Mac
開発ソフト	Eclipse
プログラム言語	Java
テストする場合の費用	無料
マーケットに公開する条件	審査なしでマーケットに公開できる。2,500円の登録料

表8 Fedora13の開発パッケージ

Eclipse	eclipse-java-helios-linux-gtk.tar.gz
SDK	android-sdk_r07-linux_x86.tgz
プラグイン	ADT-0.9.8.zip
JDK	Jdk-6u21-linux-i586-rpm.bin

るといった制限はほとんどなく、登録料を支払うだけですむ。

Androidのプログラム開発は、代表的なコンピュータ言語であるJavaを使用する。Javaアプリ開発に使える便利なソフトウェア部品「Javaライブラリ」、Androidアプリ開発に使用するソフトウェア部品「Androidライブラリ」を活用しながら、効率よくプログラムを作成できる。

Androidアプリの開発環境を構築するには、インターネットで無料配布している「JDK」、「Android SDK」、「Eclipse」の3つのソフトウェアが必要となる。これらのソフトウェアをパソコンにインストールすることによって、Androidアプリの開発ができる。Android端末がなくても、開発環境に実機を模倣するエミュレータというソフトも含まれているので、作成したアプリの動作をチェックすることができる。

平成23年度ゼミナールでは、ネットで導入記事が多いFedora13を演習室のWindows XPパソコンに新たにLinuxをインストールしてAndroid開発環境を構築した。Fedora13で使用した開発用のパッケージを表8に示す。図1にFedora13のデスクトップ画面で、以下の手順で開発環境を整備した。

(1) 準備したソフトウェア

必要なパッケージをホームディレクトリに作成した



図1 Fedora13のデスクトップ画面

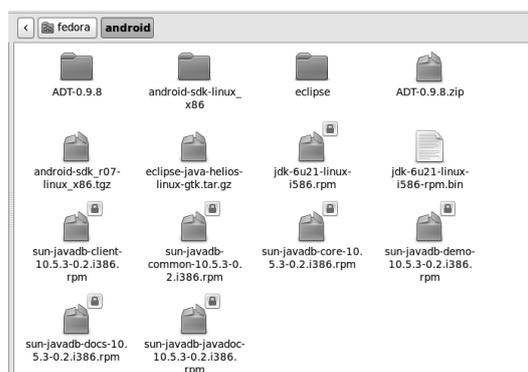


図2 Androidのホルダー

Androidにコピーする。EclipseとSDKの2つソフトウェアは解凍することによって、eclipseのホルダーとSDKのホルダーが生成される。JDKの自己解凍パッケージを実行することによって、JDKがインストールされる。図2にインストールされたAndroidのホルダーを示す。

(2) Android SDKのセットアップ

インストールされたSDKはセットアップしなければ利用できないので、設定用ツールを起動してセットアップを行う。ライセンスを承認してインストールを行う。

(3) Eclipseのセットアップ

最初に作業ディレクトリを指定して、2番目にプラグインを組み込む。次にAndroid SDKの場所を指定して、最後にアプリテストに使うエミュレータを作成する。

以上の設定を行うことによって、Androidのプログラム開発環境ができる。

6. Androidのアプリの作成

プログラムの作成は、図3に示すEclipseのTOP画面のメニューバーから「Project」、「Android Project」を選択して行う。

プロジェクト入力画面において、表9に示すプロジェクトの内容を入力すればプロジェクトに対応したプログラム環境が設定される。アプリのプログラムは、



図3 Eclipseの起動画面

表9 プロジェクト作成時に設定する項目

項目	内容
Project name	プロジェクト名
Build Target	アプリを動かしたいOS環境
Application name	完成させるアプリ名
Package name	任意のドメインの前後を逆にして名付ける
Create Activity	最初に作られるソースコードの名前
Min SDK Version	Build Targetで指定したOSのAPIレベル

プロジェクトで生成されたソースプログラムのテンプレートを編集すればできる。

図4はタブレット端末の画面にテキストで「Hello World」と表示するお馴染みのメッセージ表示アプリである。

コンパイルすれば、ソースコードから自動的にAndroidの実行ファイルhello.appが生成される。コンパイルが終了しAndroidアプリが作成されると、Eclipseとは別画面で、図5で示すエミュレータが立ち上がり、その中で「Hello World」と表示される。図6にhello.appの実行画面を示す。

Androidアプリは、グラフィックも簡単に作成できる。Android端末に赤い円を表示するアプリ「Redball」を作成した。「hello.java」という自動的に生成されるファイルだけでなく、Redball.javaという機能を実装したソースコードのファイル「MyView.java」という別のソースファイルを作成し、「Redball.java」と「MyView.java」の2つのファイルをコンパイルして実行すると、しばらく待つと、エミュレータの黒い画面に赤い円が表示される。図7にRedball.appの実行画面を示す。

7. プログラミング演習について

筆者の専門ゼミナールでは、Visual C++、Flash、Java、Java Scriptを使える環境を整備して、これまでWeb上でのデジタルコンテンツを卒業演習のテーマとして、プログラミング演習を実践してきた。Visual C++、Flashのパッケージは情報処理センターで購入して、インストールしたパソコンを利用した。JavaプログラミングのためのJDKはゼミ室のパソコンにインストールして利用し、タブレットのプログラムを作成した。JavaScriptのプログラミングではAjaxなどのライブラリを準備して、メモ帳を使用して、CSSを使用したWebプログラムの演習を実践してきた。プログラミングの学習は開発環境に依存する。

2011年度（平成23年度）、Androidアプリ開発環

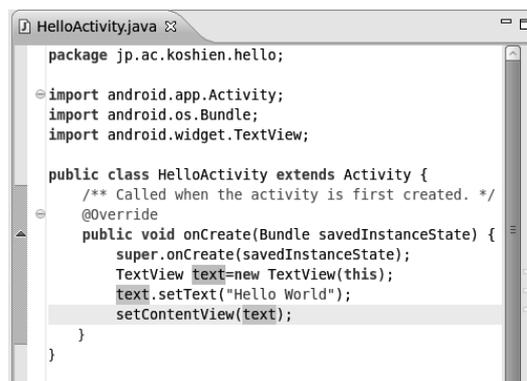


図4 作成したJavaプログラム (hello.java)

境を追加して、Androidアプリの演習を行った。Androidのアプリは、これまでのWeb上のJavaプログラミングと基本的に同じ、作成したアプリがタブレット端末で動作するところが、これまでのパソコンのプログラミング演習と異なる。

Android端末は、米国Google社が運営するAndroid



図5 エミュレータのトップ画面

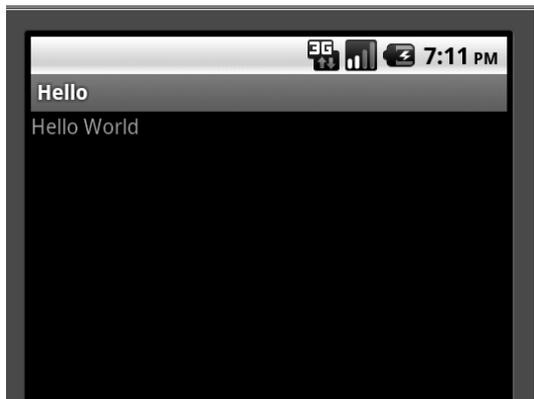


図6 Hello.javaの実行画面

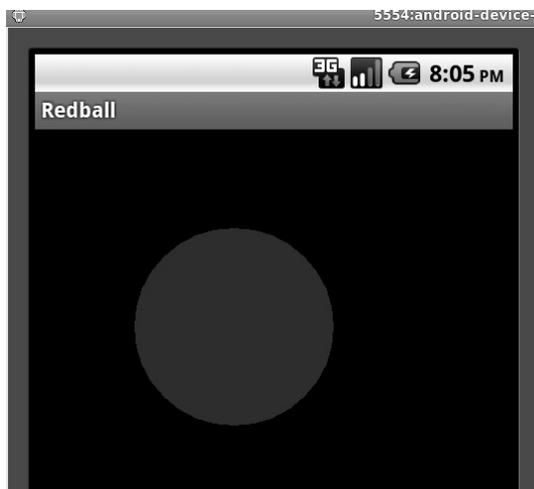


図7 Redball.javaの実行画面

マーケットなどのアプリマーケットから、自分好みのアプリを入手して利用することがこれまでのパソコンの使い方と異なる。Androidアプリの種類も急増中であり、日々新しいアプリが登場している。また、Android端末は屋外での利用を考慮したOSであり、サーバとのデータの同期が重要なテーマである。iPadもiCloudサービスをはじめ、モバイル端末間でのやり取りも自動的に行えるので、実用プログラムも簡単に出来る。大学の演習で作成したアプリが、学生のMIDで、実際に利用される可能性もある。

8. おわりに

Androidのアプリの開発環境は、WindowsのJDK、Eclipseも公開されているが、共通で利用する演習室のパソコンの運用を考慮して、Linux上に開発環境をインストールした。ネットで公開されている開発キットはOS、JDK、Eclipseのバージョンによって、SDK、Eclipseのプラグインが異なるので、開発環境の構築は容易ではない。Linuxの環境をFedora14 (32bit版) で開発環境を構築する場合、JDKはEclipseのインストール時に自動的にインストールされ、Android SDKの基本ツールを集めたファールとADT プラグインを取めたファイルはFedora13と互換性がない。

今回、Fedora13、Fedora14、Ubuntu10.04に対して開発環境のテストをしたが、Eclipse、SDK、プラグインの管理と運用は容易ではなかった。

タブレット端末はこれからますます普及し便利になっていく。これからのパソコンを使用した演習において、Androidのアプリを作成するAndroid演習はプログラミング演習の1つとして取りあげられるかもしれない。

参考文献

- 1) 榊井：仮想化ソフトを使用した大学のコンピュータ環境、甲子園大学紀要第37号、2009年
- 2) 榊井：仮想化ソフトを使用した大学のコンピュータ環境2、甲子園大学紀要第38号、2010年
- 3) 榊井：大学におけるタブレット端末の演習、甲子園大学紀要第39号、2011年

総合教育研究機構の学術活動

[2012年1月～12月] (アイウエオ順)

〔著書〕

- 1) 比名和子：『増補改訂版 ゴシック入門』共訳 英宝社 4月
- 2) 前場優策：①『学力政策の比較社会学〔国際編〕PISAは各国に何をもたらしたか』共著 志水宏吉・鈴木勇編著 54-78 明石書店 4月 ②『学力政策の比較社会学〔国内編〕全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』共著 志水宏吉・高田一宏編著 31-51 明石書店 4月

〔論文〕

- 1) 上野義久：『西東詩集』の「ズライカの書（そのⅢ）」『甲子園大学紀要』39号 1-11 3月
- 2) 大隅紀和：カンボジアにおける小規模の教育協力活動（2011-12年）の事例－現地におけるスチール黒板の組み立て、および教員研修会の実施－『国際教育協力論集』第15巻 1号 63-73 4月
- 3) 梶木克則・西川真理子・若槻健・増田将伸・石川朝子：就職支援に向けたeポートフォリオの半期の運用結果について『甲子園大学紀要』39号 85-90 3月
- 4) 中井孝・米澤忠幸：株式保有戦略とデイスポジション効果『甲子園大学紀要』39号 63-73 3月
- 5) 西川真理子・若槻健・梶木克則・増田将伸・石川朝子：『学生力』を高めるための「教養演習Ⅰ」(4)『甲子園大学紀要』39号 35-49 3月
- 6) 比名和子：The Coherence of Gothic Conventions 試訳(1)『甲子園大学紀要』39号 59-62 3月
- 7) 前場優策：①A団地における子どもへの学歴期待『今日の格差社会における家族の生活・子育て・教育の実態と新たな困難に関する実証研究：2009年～2011年度科研費研究成果報告書』58-66 3月②「言語力」育成の陥穽『教育文化学年報』7号 36-45 4月
- 8) 梶井猛：大学におけるタブレット端末の演習『甲子園大学紀要』39号 129-139 3月

〔学会発表〕

- 1) 梶木克則：①演習室でのプレゼン発表におけるチャットに代わるコメント投稿方法（梶木・梶井・那須）教育システム情報学会第37回全国大会 千葉 8月②初年次キャリア教育科目と連動させたeポートフォリオの2年目の運用（梶木・西川・増田）平成23年度教育改革ICT戦略大会 東京私学会館 9月
- 2) 前場優策：小学生の「言語コード」と学力に関する継時的分析 日本教育社会学会 第64回大会 同志社大学 10月
- 3) 梶井猛：①大学におけるタブレット端末を用いた演習について 教育システム情報学会第37回全国大会 千葉 8月②Androidタブレットを用いた情報処理演習について 大学ICT推進協議会 2012年度年次大会 神戸 12月
- 4) 増田将伸：①Linguistic Devices to Elicit Elaborated Talk in Interview Dialogues: The Case of the Corpus of Spontaneous Japanese The First Asia Pacific Corpus Linguistics Conference 2月②平田毅他5名 会話分析のスペクトラム－その広がり可能性－ 社会言語科学会 第30回大会 9月

〔社会教育活動〕

- 1) 熊谷正秀：①採択教科書を分析する－東京書籍－ 日本会議東播磨支部例会 加古川プラザホテル 4月②中学歴史教科書の問題点 自由民主党芦屋支部政策勉強会 芦屋市商工会館 6月③竹島問題について 全日本教職員連盟中部・近畿ブロック会議 ラッセホール 8月④韓国の対日意識といかに対峙すべきか 日本会議芦屋・西宮支部勉強会 西宮市民会館 10月⑤韓国における対日意識－日本はどう対応すべきか－日本の歴史文化研究会 神戸市立こうべまちづくり会館 10月
- 2) 西川真理子：段階的の就職支援とキャンパス・キャリア・ファイルの活用 甲子園大学主催大学教育・学生支援シンポジウム「eポートフォリオと協同学習を活用した大学教育・学生支援」宝塚ソリオホール 2月

〔その他〕

- 1) 榎本雅俊：Indecomposable Hilbert representations of Kronecker quivers on infinite dimensional Hilbert

spaces Research Institute for Mathematical Science 京都大学 11月

- 2) 大隅紀和：①教育概論（テキスト） 共著 OES研究所刊 9月②保育教諭のための教職実践演習ノート（テキスト） 単著 同研究所刊 9月
- 3) 熊谷正秀：①阪神大水害とある機関士（エッセイ） 日本教育文化研究所『教育創造』No.82 7月②日韓がタブーにする半島の歴史（書評） 同No.83 9月
- 4) 甲子園大学学生支援推進事業プロジェクトチーム（石川・梶木・西川・増田・若槻）：「キャンパス・キャリア・ファイルによる段階的就職支援の構築」大学教育・学生支援推進事業テーマB 最終報告書 3月

栄養学部の学術活動

[2012年1月～12月]

[論文]

- 1) Hayakawa N, Shiozaki M, Shibata M, Koike M, Uchiyama Y, Matsuura N, Gotow T: Resveratrol affects undifferentiated and differentiated PC12 cells differently, particularly with respect to possible differences in mitochondrial and autophagic functions. *Eur. J. Cell Biol.* (2012)
- 2) Maruya N, Tamon R: The Motivation Contents of Awareness-area in Nutrition Education: The Enhancement of Healthy Eating Behavior by Self-efficacy in Senior High School Students: *Journal of Human Developmental Research* 11 (1), 63-73, 2012
- 3) Maruya N: Capability Factors founded Human Development by Nutritional Education for Children: *Oxford Poverty and Human Development (OPHD)*: 3 (2) 135-137, 2012
- 4) Goto M, Morita A, Goto A, Sasaki S, Aiba N, Shimbo T, Terauchi Y, Miyachi M, Noda M, Watanabe S: Dietary glycemic index and glycemic load in relation to HbA1c in Japanese obese adults: a cross-sectional analysis of the Saku Control Obesity Program. *Nutr Metab (Lond)*. 9 (1), 79, 2012.
- 5) Goto A, Morita A, Goto M, Sasaki S, Miyachi M, Aiba N, Terauchi Y, Noda M, Watanabe S: Associations of sex hormone-binding globulin and testosterone with diabetes among men and women (the Saku Diabetes study): a case control study. *Cardiovascular Diabetology*. 11, 130, 2012. <http://dx.doi.org/10.1016/j.ejcb.2012.10.002> (92, 30-43, 2013)
- 6) Takei S, Hasegawa-Ishii S, Uekawa A, Chiba Y, Umegaki H, Hosokawa M, Woodward DF, Watanabe K, Shimada A. : Immunohistochemical demonstration of increased prostaglandin F₂a levels in the rat hippocampus following kainic acid-induced seizures. *Neuroscience*. 30, 218: 295-304 (2012).
- 7) 西谷えみ, 高田健人, 杉山みち子, 三橋扶佐子, 田中和美, 麻植有希子, 西本悦子, 星野和子, 桐谷裕美子, 梶井文子, 菊谷武, 合田敏尚, 宮本啓子, 高田和子, 葛谷雅文: 介護保険施設, 病院(療養病床ならびに回復期リハビリテーション病棟)における摂食・嚥下障害を有する高齢者に関する入・退所(院)時の情報連携の実態に関する研究, *日本臨床栄養学会雑誌*: 34 (1), 10-17, 2012
- 8) 森高初恵, 中西由季子, 不破真佐子, 谷井涼子: 米飯の熱特性, 感覚特性とグリセミックインデックスに及ぼす寒天の影響, *日本調理科学会誌*: 45 (2), 115-122, 2012
- 9) 村井陽子, 丸谷宣子: 食育をめざす学生による食に関する指導の効果: *日本食育学会誌*: 6 (2), 173-181, 2012
- 10) 丸谷宣子, 多門 隆子: 大学連携「大阪食と運動・健康フェスタ」-参加者の食生活の実態と身体組成-相愛大学研究論集, 26, 113-125, 2012
- 11) 田中憲子, 笠原靖弘, 森田明美, 宮地元彦: 生体電気インピーダンス法による皮下脂肪厚の推定. *肥満研究*. 18 (2), 118-125, 2012.
- 12) 浅田雅宣: 身近だけれど意外に知らない乳酸菌・ビフィズス菌の姿, *生物工学会誌*: 90 (8), 504-508, 2012

[著書]

- 1) 浅田雅宣: 3. サプリメント、世紀を超えるビフィズス菌の研究-その基礎と臨床応用から製品開発へ-, 上野川修一, 山本憲二監修, 日本ビフィズス菌センター (2011)
- 2) Matsuo, A. & Sato, K. : *Food additive in Tech* (2012年2月) ISBN : 978-953-51-0067-6
- 3) 森田明美: *ロコモティブシンドロームと栄養*. 中村耕三(編): *ロコモティブシンドローム. メディカルレビュー社* (2012年8月)
- 4) 谷澤容子: 『わたしの手づくり保存食百科-ジャム, シロップ, ピクルス, 燻製, ソース-』 監訳, (株)緑書房, (2012年2月1日) ISBN : 978-4-89531-127-4

[招待講演]

- 1) 浅田雅宣: 腸溶性シームレスカプセル化ビフィズス生菌の効果, 日本健康科学学会シンポジウム (2012年3

月16日, 東京ビッグサイト)

- 2) 浅田雅宣: 高麗人参とその効果, JFC講演会 (2012年3月17日, 大阪)
- 3) 浅田雅宣: 伸びる研究者の育成 - 基盤技術開発と応用を例に, 工業技術会講演会 (2012年6月22日, 東京)
- 4) 浅田雅宣: 腸内細菌を活用する機能性食品開発と応用, 日本栄養・食糧学会第51回近畿支部大会特別講演 (2012年10月20日, 甲子園大学)
- 5) 伊藤裕美: 食育の大切さ, 宝塚いずみ会総会講演 (2012年4月27日, 宝塚市)
- 6) 川合眞一郎: 水の講座第3弾 シニア自然大学校, 朝日新聞社後援, 大阪生き生き地球館主催, 東日本大震災・津波からの復興の現況 - 気仙沼からの報告を中心として (2012年3月10日, 大阪市)
- 7) 川合眞一郎: 福山大学セミナー, 消化酵素活性から見たクロマグロ仔稚魚の健苗性 (2012年3月21日, 福山大学内海生物資源研究所)
- 8) 川合眞一郎: 国際理解セミナー, 豊かさとは何か - ヒマラヤの小国ブータンの場合 - (2012年4月19日, 宝塚)
- 9) 川合眞一郎: 阪神シニアカレッジ, 「食の安全」 (2012年6月5日, 宝塚)
- 10) 川合眞一郎: 近畿大学グローバルCOEプログラム第3回シンポジウム, 「グローバルCOEにおける博士後期課程教育プログラムの検証と今後の展望」, パネリスト (2012年12月15日, 奈良)

[学会発表]

- 1) Naoya Hayakawa, Motoko Shiozaki, Masahiro Shibata, Masato Koike, Yasuo Uchiyama, Takahiro Gotow: Resveratrol is harmful to naive PC12 cells but beneficial to differentiated ones. The 35th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society (2012年9月, 名古屋)
- 2) Naoya Hayakawa, Motoko Shiozaki, Masahiro Shibata, Masato Koike, Yasuo Uchiyama, Takahiro Gotow: PC12 cells are influenced differently by resveratrol depending on their differentiation. The 42nd Annual Meeting of the Society for Neuroscience (October, 2012, New Orleans)
- 3) Yukiko Nakanishi, Sol Sowath, Koum Kanal, Buth Sokhal, Chan Theary: Impact of iron Fortified fish/soy sauce in the market on prevalence of anemia in Cambodia, The 16th International Conference of Dietitian (November, 2012, Sydney)
- 4) Nobuko Maruya: Capability Factors founded by Nutrition Education for Children: Human Development and Capability Association International Conference (HDCA) (Jakarta, 2012)
- 5) 伊藤裕美, 寅屋壽廣, 橋本加代: 大学生のライフスタイルと朝食欠食との関連についての調査, 第71回日本公衆衛生学会総会 (2012年10月 山口県)
- 6) 西谷翔太, 金田直子, 西山剛史, 畠中大, 増田眞優香, 桃井千春, 森川英美, 山口歩, 伊藤裕美: 大学生における行事食に関する認知調査, 第28回兵庫県栄養改善研究発表会 (2012年3月, 神戸)
- 7) 早川直哉, 中西由季子, 後藤隆洋: レスベラトロールは未分化と分化PC12細胞で逆の作用を示す, 第51回日本栄養・食糧学会・近畿支部大会 (2012年10月, 宝塚)
- 8) 早川直哉, 柴田昌宏, 小池正人, 内山安男, 後藤隆洋: レスベラトロールの細胞生存及び細胞死の調節機構, 第88回日本解剖学会・近畿支部学術集会 (2012年12月, 神戸)
- 9) 子安愛, 金田直子, 春木敏: 幼稚園における食育プログラムの実践と評価 - 4歳児食育プログラム “食べものに親しむ” -, 第59回日本栄養改善学会 (2012年9月, 名古屋)
- 10) 金田直子, 西山剛史, 畠中大, 増田眞優香, 桃井千春, 森川英美, 山口歩, 西谷翔太, 伊藤裕美: 大学生と食生活改善推進員における食意識の比較, 日本栄養・食糧学会第51回近畿支部大会 (2012年10月, 宝塚)
- 11) 金田直子, 太田愛美, 子安愛, 春木敏: 幼児食育実践 (第1報) - 園・家庭・地域を結ぶ食育プログラムの開発 -, 第59回日本学校保健学会 (2012年11月, 神戸)
- 12) 子安愛, 太田愛美, 金田直子, 春木敏: 幼児食育実践 (第2報) - 4歳児食育プログラム “食べものに親しむ” -, 第59回日本学校保健学会 (2012年11月, 神戸)
- 13) 太田愛美, 子安愛, 金田直子, 春木敏: 幼児食育実践 (第3報) - 5歳児食育プログラム “作って食べよう” -, 第59回日本学校保健学会 (2012年11月, 神戸)
- 14) 川合眞一郎, 黒川優子, 藤井あや, 神村祐司, 伏見浩ほか: クロマグロの健苗育成技術開発研究 - 9, 消化

- 酵素活性から見たクロマグロ仔稚魚の健苗性, 平成24年度日本水産学会大会 (2012年3月29日, 東京)
- 15) 北川哲郎, 川合眞一郎, 細谷和美: 消化酵素活性から見たバラタナゴの好適初期餌料系列, 平成24年度日本魚類学会大会 (2012年9月23日, 下関)
 - 16) 谷澤容子: 「こんにゃく加工乾燥粉の調理について」, 日本調理科学会 平成24年度大会 (2012年8月, 秋田)
 - 17) 中西由季子, Juliet Cadungog-Uy, Sol Sowath, Koum Kanal, Buth Sokhal, 高梨久美子, 戸上貴司, Theory Chan: カンボジアにおいて鉄強化魚醬・醤油を市場投入したことによる貧血改善効果-第29回日本微量栄養素学会学術集会 (2012年6月, 京都)
 - 18) 中西由季子, 細川峻哉, 吉田宗弘, Pham Van Thuy, 神馬征峰: 鉄強化米を導入することによる鉄欠乏性貧血の改善-第3回メタロミクス研究フォーラム (2012年8月, 東京)
 - 19) 佐川敦子, 中西由季子, 森高初恵: 増粘剤添加が炭水化物の消化性および力学特性に及ぼす影響-平成24年度日本調理科学会大会 (2012年8月, 秋田)
 - 20) 松尾亜希子, 佐藤健司, 中村考志, 大槻耕三: Autofocusing法による食品添加物用フィターゼ中のアミラーゼとプロテアーゼ活性のコントロール-玄米粉パンへの応用-第51回日本栄養・食糧学会近畿支部大会 (2012年10月, 宝塚)
 - 21) 中村絵美, 富永彩友美, 宮本啓子: 保育所を利用する保護者の食育ニーズの検討, 日本栄養・食糧学会第51回近畿支部大会講演要旨集 p. 63, (2012年10月, 宝塚市)
 - 22) 露口小百合, 伊藤知子, 水野千恵ほか: 油量の違いが揚げ物の揚げ具合に及ぼす影響, 日本調理科学会平成24年度大会 (2012年8月, 秋田)
 - 23) 辻秀美, 幣憲一郎, 野村由紀, 水野千恵: ニュークックチルシステムにおける腎臓病食のカリウム量の実測値と対応, 第59回日本栄養改善学会学術総会 (2012年9月, 名古屋)
 - 24) 今井絵理, 森田明美, 渡邊昌, 饗場直美, 宮地元彦, 佐々木敏, 出浦喜丈: 肝機能指標と糖尿病との関連性について-佐久健康長寿プログラム-, 第66回日本栄養・食糧学会 (2012年5月, 仙台)
 - 25) 山田優華, 福井俊弘, 竹谷耕太, 風岡拓磨, 松本裕一郎, 山本國夫: 50%エネルギー低減マンナンごはんの炊飯方法の検討, 第59回日本栄養改善学会 (2012年9月, 名古屋)
 - 26) 山田優華, 福井俊弘, 富安広幸, 竹谷耕太, 風岡拓磨, 松本裕一郎, 山本國夫: 日本栄養・食糧学会 第50回近畿支部大会, (2012年10月, 宝塚市)
 - 27) 坂根淳美, 瀧川璃七, 浅井愛美, 一柳沙弥香, 市野有加, 蛭子真衣, 志倉亜里紗, 高橋彩, 永田一樹, 山田優華, 松本裕一郎, 山本國夫: 腎臓病患者のための元気の出る市販食品コンビネーション食の検討, 第28回兵庫県栄養改善研究発表会 (2012年3月, 神戸)
 - 28) 山中裕佳子, 羽柴澄子, 山田瞳, 酒井美弥子, 川口真規子, 土井裕司: リン脂質過酸化物により劣化した分化PC12細胞への各種抗酸化剤の効果 日本農芸化学会平成24年度大会 (2012年3月, 京都)
 - 29) 山中裕佳子, 羽柴澄子, 山田瞳, 酒井美弥子, 川口真規子, 土井裕司: リン脂質過酸化物により劣化した分化PC12細胞への各種抗酸化剤の効果 日本栄養・食糧学会第51回近畿支部大会 (2012年10月, 宝塚)

[高大連携事業-出前講義]

- 1) 木村祐子: 進路相談会模擬授業「スポーツと食事」, 兵庫県立神戸北高等学校, 1年生 (2012年2月10日)
- 2) 浅田雅宣: 進路相談会模擬授業「食品でウエストにくびれをつくるには-メタボにもナイスバディーにも-」, 兵庫県立明石清水高等学校, 1・2年生 (2012年3月7日)
- 3) 山崎克人: 進路相談会模擬授業「栄養学でわかるネズミの寿命・ゾウの寿命」, 兵庫県立太子高等学校, 1・2年生 (2012年3月7日)
- 4) 山崎克人: 進路相談会模擬授業「栄養学で開く21世紀の医療」, 兵庫県立三田西陵高等学校, 2年生 (2012年3月8日)
- 5) 伊藤裕美: 特別授業「朝食の大切さ」, 兵庫県立神戸北高等学校, 1年生 (2012年3月8日)
- 6) 中西由季子: 進路相談会模擬授業「ダイエットの栄養学」, 兵庫県立川西明峰高校1・2年生 (2012年3月22日)
- 7) 木村祐子: 特別授業「スポーツと栄養」, 京都府立久美浜高等学校, カヌー部員 (2012年5月13日)
- 8) 浅田雅宣: 特別講演「働くとは-将来の進路〈研究開発の紹介〉」, 兵庫県立明石城西高等学校, 1年生 (2012年5月24日)

- 9) 浅田雅宣:進路相談会模擬授業「食品でウエストにくびれをつくるにはーメタボにもナイスバディーにもー」, 兵庫県立西宮今津高等学校, 3年生 (2012年6月1日)
- 10) 木村祐子:特別授業「競技力につながる食生活」京都府立洛北高等学校, Ⅲ類1～3年生 (2012年6月20日)
- 11) 川口真規子:進路相談会特別授業「分野紹介」尼崎市立尼崎高等学校, 2年生 (2012年6月21日)
- 12) 八木典子:進路相談会特別授業「学部学科紹介」姫路市立飾磨高等学校, 2年生 (2012年6月26日)
- 13) 木村祐子:特別授業「競技力につながる食生活」京都府立南丹高等学校, 運動部員 (2012年6月27日)
- 14) 木村祐子:特別授業「スポーツと食事」京都府立網野高等学校, レスリング部員 (2012年7月8日)
- 15) 金田直子:進路相談会特別授業「卒業論文などの研究テーマについて」, 兵庫県立西宮今津高等学校, 2年生 (2012年7月11日)
- 16) 浅田雅宣:進路相談会模擬授業「食品でウエストにくびれをつくるにはーメタボにもナイスバディーにもー」, 兵庫県立香寺高等学校, 1・2年生 (2012年7月12日)
- 17) 伊藤裕美:進路相談会模擬授業「食事をバランス良く」, 兵庫県立須磨友が丘高等学校, 2年生 (2012年7月12日)
- 18) 谷澤容子:進路相談会特別授業「学部学科説明」, 兵庫県立三木北高等学校, 1年生 (2012年7月17日)
- 19) 川口真規子:進路相談会特別授業「食品の「色」が持つもう一つの顔」, 大阪府立山田高等学校, 2年生 (2012年7月18日)
- 20) 浅田雅宣:進路相談会模擬授業「食品でウエストにくびれをつくり, お腹も整える」, 兵庫県立柏原高等学校, 1～3年生 (2012年10月4日)
- 21) 吉田龍平:進路相談会特別授業「職業理解」, 兵庫県立伊丹西高等学校, 2年生 (2012年10月9日)
- 22) 谷澤容子:進路相談会模擬授業「糖尿病患者さんのために糖質を制限した調理食品の開発」, 向陽台高等学校, 1～3年生 (2012年10月16日)
- 23) 浅田雅宣:進路相談会模擬授業「ダイエット?食品でウエストにくびれをつくる!」, クラーク記念国際芦屋高等学校, 2年生 (2012年10月26日)
- 24) 吉田龍平:進路相談会模擬授業「食文化 沖縄の食・食品について」, 兵庫県立西宮今津高等学校, 2年生 (2012年10月26日)
- 25) 浅田雅宣:進路相談会模擬授業「ダイエット?食品でウエストにくびれをつくる!」, 兵庫県立宝塚高等学校, 2年生 (2012年11月2日)
- 26) 中西由季子:進路相談会特別授業「職業理解:栄養・食物に関するお仕事」, 姫路市立飾磨高等学校, 1年生 (2012年11月5日)
- 27) 宮本啓子:進路相談会模擬授業「古くて新しい栄養問題」, 兵庫県立尼崎小田高等学校, 2年生 (2012年11月7日)
- 28) 山崎克人:進路相談会模擬授業「栄養学で開く21世紀の医療」, 大阪市立桜宮高等学校, 2年生 (2012年11月12日)
- 29) 吉田龍平:進路相談会模擬授業「食環境を考える」, 兵庫県立出石高等学校, 2年生 (2012年11月14日)
- 30) 山崎克人:進路相談会模擬授業「栄養学で開く21世紀の医療」, 兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校, 2年生 (2012年11月14日)
- 31) 浅田雅宣:進路相談会模擬授業「ダイエット?食品でウエストにくびれをつくる!」, 大阪府立市岡高等学校, 2年生 (2012年11月15日)
- 32) 谷澤容子:秋のMCフェスティバル まなび講座「世界の食事文化」, 兵庫県立武庫荘総合高校, 1年生 (2012年11月19日)
- 33) 宮本啓子:進路相談会模擬授業「古くて新しい栄養問題」, 兵庫県立芦屋高等学校, 1・2年生 (2012年11月22日)
- 34) 浅田雅宣:特別講義「研究の進め方と英語プレゼンの基礎」, 大阪府立園芸高等学校, 1～3年生 (2012年11月28日)
- 35) 山崎克人:進路相談会模擬授業「栄養学で開く21世紀の医療」, 兵庫県立三木東高等学校, 1年生 (2012年12月10日)

- 36) 木村祐子：特別講義「スポーツと食事」，京都府立鴨沂高等学校 夜間部，1～4年生（2012年12月14日）
- 37) 山崎克人：進路相談会模擬授業「栄養学で開く21世紀の医療」，兵庫県立高砂高等学校，2年生（2012年12月17日）
- 38) 宮本啓子：進路相談会模擬授業「古くて新しい栄養問題」，兵庫県立宝塚西高等学校，（2012年12月17日）
- 39) 川口真規子：進路相談会模擬授業「食品がデザインする－おいしさと健康を求めて－」，兵庫県立宝塚高等学校，1年生（2012年12月17日）
- 40) 宮本啓子：進路相談会模擬授業「ダイエットと栄養学」，兵庫県立川西北陵高等学校，2年生（2012年12月18日）
- 41) 浅田雅宣：進路相談会模擬授業「ダイエット?食品でウエストにくびれをつくる！」，尼崎市立尼崎高等学校，1年生（2012年12月18日）
- 42) 浅田雅宣：特別授業「脳と腸は関係している－お腹に良い機能性食品の開発」，兵庫県立北摂三田高等学校，2年生（2012年12月20日）
- 43) 木村祐子：特別授業「スポーツと食事」，京都府立綾部高等学校，陸上部（2012年12月22日）

【社会教育活動】

- 1) 浅田雅宣：フードデザイン学で見直す食の安全・安心，兵庫県男女共同参画推進事業リレー講座（2012年10月13日，神戸）
- 2) 金田直子：時間栄養学について，尼崎病院給食研究会（2012年5月，兵庫県尼崎市立すこやかプラザ）
- 3) 金田直子：時間栄養学について，社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団（2012年8月，総合リハビリテーションセンター）
- 4) 川合眞一郎：シニア自然大学，水環境の汚染と生きものたち（2012年10月17日，大阪市）
- 5) 川合眞一郎：宝塚生活大学，私たちの身のまわりの水問題（2012年11月13日，宝塚）
- 6) 木村祐子：成長期における発育・発達と食の重要性～スポーツ選手の栄養管理に関わって～，平成23年度文部科学省委託「栄養教諭を中核とした食育推進事業」食育研修会（2012年2月京都平安ホテル）
- 7) 木村祐子：健康なからだづくりの基礎となる『食』について～「食」とスポーツを関連づけて～（2012年2月，京都市立嵯峨中学校）
- 8) 木村祐子：スポーツ選手の食生活について，平成24年度宝塚市食育講座（2012年7月，ラ・ビスタ宝塚コミュニティセンター）
- 9) 木村祐子：スポーツと栄養管理，指導，公益法人京都府栄養士会生涯学習（2012年10月，京都府立大学）
- 10) 森田明美：食中毒予防について～最近の食品衛生事情～，三田給食施設協議会衛生講習会（2012年6月，兵庫県三田庁舎）
- 11) 森田明美：日本人の食事摂取基準の活用【2010年版】－健康食品の必要性を考える－，NR協会研修会（2012年6月，大手前栄養学院）
- 12) 森田明美：日本人の食・栄養と健康、宝塚市「農と食の講座」（2012年7月，宝塚市立西公民館）
- 13) 吉田龍平：いきいき彦根プロジェクト（生活習慣病予防事業，彦根市立病院と滋賀県立大学人間文化学部生活栄養学科の共催），健康指導（2012年1月～3月，月3回，彦根市立医療情報センター）

【その他】

- 1) 松尾亜希子：学位取得－博士（学術）「Preparation of Brown Rice Flour-added Bread with Low Myoinositol Hexaphosphate and Improved Swelling Property by Using *Aspergillus niger* Phytase Fraction」，京都府立大学論学術博第11号（2012年9月）
- 2) 宮本啓子：平成23年度老人保健事業推進等補助金（老人保健健康増進等事業分「準市場としての介護保険制度における経営状況並びにマネジメントからみた介護サービスの質の向上等に関する調査研究事業」（主任研究者 特定非営利活動法人日本介護経営学会），協力研究者
- 3) 森田明美：厚生労働科学研究費補助金・循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業，平成22～24年度，「日本人の食事摂取基準の改定と活用に資する総合的研究」，研究分担者
- 4) 森田明美：厚生労働科学研究費補助金・地域医療基盤開発推進研究事業，平成24年度，「被災地の再生を考慮した在宅医療の構築に関する研究」，研究分担者

- 5) 坪田 (宇津木) 恵, 森田明美: JCNセミナー (全5回) わかる・使えるやさしい統計基本のキから. 臨床栄養. 120 (1, 2, 3, 5, 6), 1-6, 2012
- 6) 吉田龍平: 日本栄養士会研究教育協議会近畿支部幹事 (理事), 平成23年度研究教育協議会全国研修会実行委員長 (2012年3月3日~4日、滋賀県立大学)
- 7) 吉田龍平: 管理栄養士の活動最前線 研究・教育機関 “大学の地域活動 (食育・健康指導)” 栄養日本55 (6) 19-26, 2012
- 8) 木村祐子: 京都府スポーツ振興審議会, 平成23年4月1日から平成25年3月31日
- 9) 木村祐子: FM宝塚, 宝塚アスリートSundayの出演協力, (2012年4月から2013年3月第4日曜日)
- 10) 谷澤容子: 「知りたがり! 大人気! 5時間待ちニッポン最新朝食事情」フリップ出演, (株)フジテレビジョン, (2012年11月21日)
- 11) 中西由季子: 開発途上国の主食や調味料に鉄の栄養強化を!, 栄養兵庫213 (5), 13, 2012
- 12) 中西由季子: 夏の暑さを乗り切るために~栄養素の不足による健康への影響~全薬ジャーナル261 (7), 10-13, 2012

現代経営学部の学術活動

[2012年1月～12月]

【論文】

- 1) 那須靖弘、芦田信之、辻正次、“Kinectを用いた睡眠時における呼吸音録音法”、日本遠隔医療学会雑誌、第8巻、第2号、pp.233-234. (2012.9)

【学会】

- 1) 竹内準治：「実践経営学の回顧と未来展望」、実践経営学会関西支部シンポジウム・パネラー（近畿大学）(2012.12)
- 2) 那須靖弘、榊井猛、梶木克則，“Excel計算式学習のための文字入力型e-learning”，教育システム情報学会第37回全国大会（2012.8）

【社会教育活動】

- 1) 竹内準治：「アジア系留学生の経営学の理解とその実践について」、国際コンサルタント機構（ユニコン）(2012.9)
- 2) 那須靖弘：「Android で「ものづくり」～初めてのデバイス・トゥ・クラウド、センサ・ネットワーク～」奈良県工業技術センター（2012.7）

人文学部・心理学部の学術活動

[2012年1月～12月]

【著書】

- 1) 鈴木勇・山本晃輔「ブラジルの教育改革－格差をいかに克服するか」、鈴木勇・志水宏吉編著『学力政策の比較社会学（国際編）：PISAは各国に何をもたらしたか』、明石書店、2012年。
- 2) 鈴木勇・志水宏吉「各国の学力政策の理論的整理」、鈴木勇・志水宏吉編著『学力政策の比較社会学（国際編）：PISAは各国に何をもたらしたか』、明石書店、2012年。
- 3) 鈴木勇「学力不振からの脱出をめざして」、高田一宏・志水宏吉編著『学力政策の比較社会学（国内編）：全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』、明石書店、2012年。
- 4) 高橋紀子「動きながら考える、参加者と作る「場」」、『心理臨床のフロンティア：若手臨床家の多様な実践と成長』野島一彦監修、吉岡久美子・本山智敬編、創元社、2012年。
- 5) 高橋紀子「グループ・ファシリテーション」「質的研究」、『人間性心理学ハンドブック』日本人間性心理学会編、創元社、2012年。

【論文】

- 1) 金網知征・谷口麻起子「過去の否定的経験と大学／大学院教育に関する調査研究（2）」、『甲子園大学紀要』第39号、pp. 91-103、2012年3月。
- 2) 金網知征「いじめ問題への対応に関する一考察－道徳教育の視点より－」、『道徳性発達研究』、第7巻第1号、pp. 1-7、2012年12月。
- 3) 高橋紀子「学生相談におけるグループ・ワークの立ち上げを通しての協働についての一考察」、『甲子園大学紀要』第39号、pp. 29-34、2012年3月。
- 4) 西原真喜子・高橋紀子「女子大生の友人関係傾向と携帯メールとの関連性について」、『甲子園大学紀要』第39号、pp. 51-58、2012年3月。
- 5) 藤田綾子「高齢者のプロダクティブ・エイジングイノベーション行動に関する研究」『甲子園大学紀要』第40号（印刷中）、2012年。
- 6) 藤田綾子「高齢者のQOL向上のための集団形成要因に関する研究」日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書、2013年。
- 7) Hirose, T., Koda, N., & Minami, T. Correspondence between children's indoor and outdoor play in Japanese preschool daily life. (2012) Early Child Development and Care, 182, 1611-1622.
- 8) 加藤真由子・大西賢治・金澤忠博・日野林俊彦・南徹弘「2歳児による泣いている幼児への向社会的な反応：対人評価機能との関連性に注目して」発達心理学研究、2012、23（1）、12-22.
- 9) 安村直己「悲劇人間の精神分析－ハインツ・コフートと自己心理学－」、『甲子園大学紀要』第39号、pp. 141-156、2012年3月。

【評論その他】

- 1) 高橋紀子「例えば庭のネギに思う」、『日本人間性心理学会ニュースレター』日本人間性心理学会編、Vol. 25, p. 7、2012年6月。
- 2) 坂中正義・高橋紀子・中地展生「2011年度自主プログラム助成報告「ベーシック・エンカウンターグループの効果と意義の再検討」」『日本人間性心理学会ニュースレター』、日本人間性心理学会編、Vol. 25, p. 6、2012年6月。

【学会発表・学術講演その他】

- 1) 大川清丈「滝川事件における大学教授の位置－知識人界の視点から－」、第63回関西社会学会大会、伊勢、2012年5月。
- 2) 大川清丈「近代化論から歴史社会学への転換－個別性と普遍性をめぐって－」、第85回日本社会学会大会、札幌、2012年11月。
- 3) 金網知征・谷口麻起子「過去の否定的経験と大学・大学院専攻志望動機との関連についての研究（2）」、日本

教育心理学会第54回総会、沖縄、2012年11月。

- 4) 濱口佳和・戸田有一・金綱知征・中田千絵「関係性攻撃と心理社会的適応との関連 (11) - 多次元性関係性攻撃尺度 (大学生用) の因子構造と信頼性の検討 -」、日本教育心理学会第54回総会、沖縄、2012年11月。
- 5) 藤原健志・金綱知征・戸田有一・中田千絵・濱口佳和「関係性攻撃と心理社会的適応との関連 (12) - 多次元性関係性攻撃尺度 (大学生用) の妥当性の検討 -」、日本教育心理学会第54回総会、沖縄、2012年11月。
- 6) 高橋紀子「祈りと呪いについての一考察 - アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を素材に -」、日本人間性心理学会第31回大会、宇部フロンティア大学、2012年9月。
- 7) 高橋紀子・金子周平・佐竹圭介・法眼裕子「被災地支援としてできることを考える」、日本人間性心理学会第31回大会 自主企画、2012年9月。
- 8) 藤田綾子 超高齢社会日本におけるエイジズムからプロダクティブエイジングへ、EUインスティテュート関西第16回国際シンポジウム、2012年。
- 9) 日野林俊彦・加藤真由子・金澤忠博・南徹弘・糸魚川直祐 初潮年齢に及ぼす同胞効果 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場 2012年3月。
- 10) 井崎基博・金澤忠博・鎌田次郎・安田純・加藤真由子・岡本駿一・日野林俊彦・南徹弘・北島博之・藤村正哲・糸魚川直祐 自閉症スペクトラム障害児のプロソディと意図理解 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場 2012年3月。
- 11) 金澤忠博・安田純・加藤真由子・井崎基博・鎌田次郎・日野林俊彦・南徹弘・北島博之・藤村正哲・糸魚川直祐 超低出生体重児における発達障害と周産期合併症との関係 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場 2012年3月。
- 12) 鎌田次郎・金澤忠博・安田純・日野林俊彦・南徹弘・糸魚川直祐 学齢期における発達障害と母親の養育態度 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場 2012年3月。
- 13) 加藤真由子・金澤忠博・安田純・井崎基博・日野林俊彦・南徹弘・糸魚川直祐 学齢期における超低出生体重児の共感性 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場 2012年3月。
- 14) 日野林俊彦・清水 (加藤) 真由子・金澤忠博・赤井誠生・南徹弘 発達加速現象の研究・その26 - 初潮年齢における出生順位の影響 - 日本心理学会第76回大会 専修大学 2012年9月。
- 15) 川上文人・川上清文・友永雅己・岸本健・南徹弘・高井清子 母子の共同課題遂行場面における誇り感情表出 日本心理学会第76回大会 専修大学 2012年9月。
- 16) 安村直己 現代自己心理学の基礎と臨床 日本心理臨床学会第31回大会 愛知学院大学 2012年9月。

【社会教育活動】

- 1) 青柳寛之「親と子の波長合わせ」きらきら子育て講座、フレミラ宝塚、2012年2月23日・6月1日・9月10日。
- 2) 榊田透 日本犯罪心理学会地区 (近畿) 理事 2012年9月から。
- 3) 榊田透「非行少年の“語り”～面接調査から～」、日本発達心理学会関西地区懇話会、宝塚市男女共同参画センター・エル、2012年12月。
- 4) 榊田透「心理検査技法演習 (TAT)」、大阪家庭裁判所、2012年10～12月 (全3回)。
- 5) 坂本正子「児童虐待の理解と対応・援助の視点」大阪府社会福祉協議会 個別相談援助技術研修、2012年8・9月。
- 6) 坂本正子「身近におきる児童虐待～その時地域でできることって～」大阪市教育委員会講演、2012年11月。
- 7) 坂本正子 子どもの虹情報研修センター企画委員
- 8) 坂本正子 大阪府社会福祉審議会児童福祉専門分科会被措置児童等援助専門部会委員
- 9) 坂本正子 大阪市要保護児童対策地域協議会実務者会議スーパーバイザー
- 10) 坂本正子 宝塚市地域自立支援協議会会長
- 11) 高橋紀子「1歳児のことばとところ」きらきら子育て講座、フレミラ宝塚、2012年3月8日・5月25日・9月6日。
- 12) 高橋紀子・坂中正義・中地展生「門司港エンカウンターグループ」2012年6月。
- 13) 高橋紀子「発達障がい疑いの生徒への関わり」、短大大学合同入試説明会「こころの講演」2012年6月。
- 14) 高橋紀子「発達段階における子どもと親との関わり方～就学前から成人期まで～」、人間関係研究会主催神

戸北野エンカウンター・グループファシリテーター、2012年8月10日－8月12日。

- 15) 高橋紀子「職場での円滑な人間関係のために：心理学の視点から」、甲子園短期大学 第12回卒後・キャリアアップ研修会 於：甲子園大学短期大学 3階学生ホール、2012年11月18日。
- 16) 高橋紀子 日本人間性心理学会 理事・東日本大震災心理支援チーム代表・関西部会代表・広報委員会委員
- 17) 藤田綾子 宝塚市社会教育委員
- 18) 藤田綾子 日本社会老年学会評議員
- 19) 南徹弘 日本心理学会 専門別代議員
- 20) 南徹弘 日本発達心理学会 理事・出版企画委員会委員・関西地区懇話会会長
- 21) 南徹弘 学校法人神戸女学院理事・評議員
- 22) 南徹弘 社会福祉法人都島友の会 理事・評議員
- 23) 南徹弘 一般社団法人阪大微生物病研究会 治験委員会委員
- 24) 南徹弘 大阪府立成人病センター 研究倫理委員会委員・利益相反委員会委員
- 25) 南徹弘 帝塚山大学 GP外部評価委員会委員長
- 26) 安村直己 「育児と家族関係」きらきら子育て講座、フレミラ宝塚、2012年3月1日・6月8日・9月21日。
- 27) 安村直己 「パーソナリティ障害の理解とその対応」 福井県中央児童相談所職員研修会 2012年12月。

執筆者紹介 (アイウエオ順)

安食 仁萌	本学学生	栄養学部
上野 義久	准教授	総合教育研究機構
大隅 麗	本学学生	栄養学部
柿本 奈美	本学学生	栄養学部
梶木 克則	教授	総合教育研究機構
上村 健二	准教授	総合教育研究機構
高橋 紀子	専任講師	心理学部
手嶋 彩香	本学学生	栄養学部
中井 孝	准教授	総合教育研究機構
西川 真理子	准教授	総合教育研究機構
西瀬 弘	教授	栄養学部
比名 和子	准教授	総合教育研究機構
藤田 綾子	教授	心理学部
前馬 優策	助教	総合教育研究機構
榊井 猛	教授	総合教育研究機構
増田 将伸	専任講師	総合教育研究機構
安村 直己	教授	心理学部
米澤 忠幸	准教授	現代経営学部

編集後記

甲子園大学紀要No.40（2013）をお届けします。

論文は一段組み・二段組みの順で、各々執筆者名のアイウエオ順に掲載いたしました。

甲子園大学図書館のホームページ（<http://www.koshien.ac.jp/library/index.html>）からもご覧いただけます。併せてご利用ください。

甲子園大学紀要投稿規程

I 要 項

- 1 紀要は年1回3月発行することを原則とする。
- 2 紀要投稿者は本学教職員に限る。但し連名の場合は本学関係者以外も認める。なお、研究科前期課程の院生は当学教員との共著とし、研究科後期課程の院生は、投稿申込期日までに論文原稿に対して、指導教員およびその他の教員1名の推薦を必要とする。
- 3 論文の掲載は編集委員会で決定する。
- 4 内容は総説、原著、調査、資料とし総説以外は投稿者が指定する。総説は原則として編集委員会で依頼する。
- 5 論文は和文または外国語文とし、一編の長さは図表を含め400字詰め原稿用紙100枚以内を原則とする。
- 6 投稿は一人一編を、共同研究の場合は二編以内を原則とする。
- 7 文章は原則として横書きとする。但し人文系で必要な場合は縦書きとする。
- 8 別刷りは一編につき30部を無料とし、それ以上は執筆者負担とする。
- 9 アート紙、色刷りなど特殊な印刷は執筆者負担とする。
- 10 紀要に掲載された原稿の著作権は甲子園大学紀要編集委員会に帰属する。

II 細 則

- 1 原稿は表紙付きを1部とワープロ文書ファイルを提出する。
- 2 表紙には内容の指定、題名、英文題名、著者名、ローマ字著者名、本文、図表の枚数および校正送付先を明記する。
- 3 和文の論文には、英文要約(200ワード以内)、キーワード4個以内とその英訳を添付する。和文要約(400字以内)の添付は、執筆者所属学会の慣例に従う。
- 4 原稿は原則としてワープロ使用とし、欧文はダブルスペースとする。
- 5 文中、イタリック体とする語は_____線、ゴシック体は~~~~~線、その他特殊言語には_____線をつける。
- 6 図表はそのまま使用できる大きさとする。
- 7 図表の挿入位置は、原稿欄外に朱書きして指示する。
- 8 本文中の引用文献は記号を付し、文献は本文の最後にまとめる。
- 9 執筆に関する記載要項は、執筆者所属学会の慣例に従う。
- 10 投稿の申込期日は、毎年9月末日、原稿提出期限は10月末日とする。
- 11 この規程に定めるもののほか、投稿に関し必要な事項は、図書館委員会において決定する。

甲子園大学紀要 第40号

平成25年3月21日	印 刷
平成25年3月31日	発 行
編 集 者	甲子園大学紀要編集委員会
発 行 所	甲 子 園 大 学
	〒665-0006 兵庫県宝塚市紅葉が丘10-1
	TEL : 0797-87-8023 FAX : 0797-87-8356
	E-mail : lib@koshien.ac.jp
印 刷 所	友野印刷株式会社
	〒700-0035 岡山県岡山市北区高柳西町1-23
	TEL : 086-255-1101(代)